

人生の幸福

人物
安城 豊次郎
水島 喜多雄 (弟)
かよ子 (異母妹)
寺島 某 (學者)
別荘番 藤七

初夏の頃の夜明け前。芝生の庭園。その一端にある日本建の別荘の雨戸はまだ鎖されてゐる。庭園の一方は山の方へ接してゐる。豊次郎(四十近い風采のよろしき男)窓衣の上に羽織を着てゐる。山を下りて、何か考へてゐる態で、ブラ／＼庭へ入つて来る。やがて、ステッキの先で雨戸を叩きながら扉を掛ける。返事がない。彼は部屋の方へ耳を留めて、再び山の方へ行かうとしてゐるところへ、喜多雄(三十餘歳

で、兄よりも健康らしい。同じやうに羽織を着てゐる)が入つて来る。
豊次郎は弟を見て、驚いた表情をして見詰める。
喜多雄(努めて懐っこさうに) 兄さんは朝が早いと聞いてゐるが、こんなに早いとは思はなかつた。
豊次郎 お前はいつ此方へ来たのだ? (詰問するやうに云ふ)

喜多雄 昨夕遅く来たのさ。あんまり遅かつたから此方へ知らせなかつたのだ。来ると直ぐに、一人でビール二本ばかり飲んで寝たら、熟睡したものだから。今朝は馬鹿に早く目が醒めてね。寢床でもぐ／＼してゐても醒らないから、久振りに大磯の朝景色を見ようと思つて出て来たのだが、田舎はいゝね。
豊次郎 朝景色を見るにやまだ早過ぎらあ。あの通り月が照つてゐて、まだ夜のうちぢやないか。
喜多雄 お前は朝景色を見るよりおれの様子を見に来たのだらう。おれが狂人にでもな

つてゐるかと思つて。
喜多雄 いやさういふ譯ぢやないよ。(努めて何気ない顔をして) 今朝兄さんがこんなに早く起きてゐようとは思ひも染めなかつたんだからね。(雨戸の方を見て) かよ子はまだよく眠つてゐるんだらうな。
豊次郎 あゝ。朝早く目を醒ますのはおればかりだ。今朝はあいつに夜明け前の田舎の静寂な景色を見せようと思つて、さつき扉を掛けたのだが、なかく目を開けない。しかし、眠れるうちは眠らせといふ方がいゝのだらうよ。

喜多雄 かよ子も此方へ来てから丈夫になつたんだらう。此間僕に寄越した手紙には大變元氣のいい快活なことを書いてたよ。兄さんだつてこの前よりも血色がよくなつてゐるぢやないか。
豊次郎 血色なんぞどうだつていゝさ。おれはお前にだけ話したいと思つたことがあるんだから。丁度よかつた。家の者が起きるまで、此處で、夜明けの景色を見ながら話すことにしようか。
豊次郎が芝生の上に無造作に腰をおろすと、喜多雄も同じやうに腰をおろす。

(人生の幸福)

喜多雄 僕は煙草を持つて来ればよかつたのに、忘れたよ。兄さん持つてゐないのかい。
豊次郎 おれは一週間は酒も煙草も止めてゐるんだ。コーヒーや茶も成るべく飲まないことにしてゐる。飲食物や外界の刺激なんかでおれの心を濁らさないやうに用心してゐるんだ。さうして、本當のおれの心を磨き澄まして考へてゐることをお前に話すのだから、お前も煙草などを吸はないで聴いて呉れるよ。おれが何を云はうと、眞面目に聴かなきゃいけないぜ。
喜多雄 それは眞面目に聴くがね。(強ひて笑ひを洩らして) しかし、膝の上に兩手を突いて黙つて聴くには及ぶまい。芝生の上に寝ころんでゐても、心が眞面目ならいゝだらう。(芝生の上へ足を伸して) さつき家を出た時にや頭がボンヤリしてたが、冷つこいスガ／＼した空気を吸つたために、頭のドン底までハッキリして来たよ。かういふ時には何だかい、話が聞かされさうだね。
豊次郎 (暫らく黙想的な表情をしたあと) お前はかよ子のことをどう思ふ?
喜多雄 かよ子のこと?
豊次郎 僕は花が咲いてゐた時分に此處へ来

て、一ヶ月あまりもかよ子と一しよに暮らしてゐるんだが、かよ子は今のうちに死んだ方が、當人のためにも幸福だし、社會のためにもいゝと思はれるんだがね。お前はさうは思はないか。
喜多雄 (吃驚して) 出抜けにそんなことを云はれちや、僕も面喰つちまふ。かよがどうかしたのかい。脅かさないうで、詳しく譯を聞かせておくれよ。
豊次郎 あいつは丙午の生れだからね。俗に丙午の女は男を喰ふといふぢやないか。
喜多雄 何だい。眞面目な話つてそんなことなのか。(安心したやうに) お母さんがかよにケチをつけるために、時々そんなことを云つてたが、そんな舊弊なケチのつけ方ぢや、われわれに反感を起させるばかりだからね。
豊次郎 そりや、母親はかよ子に離縁をつけるためのいゝ口實にさう云つたのだらうが、おれの云ふ丙午の意味はさうぢやないよ。おれやお前は、かよ子がたとひ死んだ父親の罪愆の記念だつたにしても、たつた一人の妹として可愛がつて来たので、かよ子もおれたちを手頼りにしてゐるんだが、あの子はこの先生きてゐても幸福ぢやあるまいよ。

喜多雄 そんなことはないさ。容貌は悪くないし、人間も馬鹿ぢやないし、相當な家へ嫁つかせれば、幸福に世が渡れるだらう。幸福なんも、此間いゝ縁談の口があるやうなことを云つてゐたよ。僕たちは、一人の妹のため、理想的の男子を捜して花々しく結婚させるんだね。しかし、僕等が傍からおせつかいをするまでもない。かよ子は、ちやんとした當てがあるんぢやないかな。まだ子供だと思つてゐるうちに、案外なことがあるものだからね。兄さんは此方へ来てから、何か感付いたことがあつて、さつきやうなことを云つたのぢやないか知らん。
豊次郎 お前はいつものやうに世間的のことを云つてゐる。百人のうち九十九人までが云ひさうなことを云つてゐる。女が年頃になりや結婚させる。結婚させれば幸福になる。それに、十九にもなつたら、自分の好きな男のことを考へても知れないなんて。さういふ風に手輕く事を極めてしまつていゝのなら、おれも頭を痛めて物を考へたりなんかしないよ。かよ子の胸の中には、まだ戀の芽は少しも萌してゐないね。それはおれが斷言するよ。

喜多雄 いくら兄さんが爛眼でも、その點はど  
うだかな。僕には信じられないからね。しか  
し、かよの胸中が白紙のやうに純白で、ま  
だ男子の影で汚れてゐないといふのなら結構  
ぢやないか。

豊次郎 今日の日までは、あれの胸の中が純白  
でも、明日の日何處で誰れを見つけて、俄か  
に戀の芽が萌えださんとも限らないのをあれ  
は恐れてるが、おれの恐れてるのはそればか  
りぢやないんだ。かよ子は一人前の女になる  
とともに、おれやお前にも得難しようとする  
のに違ひないよ。生みの母親の靈魂があれの  
腹の中には完全に宿つてゐるんだが、それが今  
はまだ眠つてゐても、いつ目を醒ますかも知  
れない。いや、今日を醒ましにかけてゐるやう  
におれには思はれるんだ。

喜多雄 何のための復讐？ 死んだ親爺に對す  
る怨みを僕等にむくいるだらうと云ふのか  
い。女つて執念深いから、かよの母親は死ぬ  
る間際に、どんな恐ろしい遺言をしたかも知  
れないが、あの子は、思ひや憎みはどんなも  
のだから、皆目分らないやうな女に生れついで  
るんだからね。時々お母さんに邪慳な仕打を  
されても、いつも無邪氣に受けてるぢやない

喜多雄 (笑ひ／＼) だつて殺す譯にや行かな  
いでせう。

二人は足音を聞きつけて、そちらへ目を向  
けると、藤七が入つて来る。豊次郎は吃驚  
する。

喜多雄 (怪訝な顔して) おれに急用でも出来  
たのかい。

藤七 いえ、別段用事があつて参つたのぢや御  
座いません。少し氣にかゝることが出来まし  
て、旦那様はどちらへいらつしやつたのかと  
思ひまして。

喜多雄 氣にかゝることつて何だい。おれが家  
を出た時にや、お前はまだよく眠つてたやう  
だが、急に何か異つたことがあつたのかい。

藤七 戸倉さんの御別荘の裏で、若い女が殺  
されてゐるんで御座いますよ。隣の婆さん  
が、御嶽さんへ朝詣りに出掛ける途中で見つ  
けて、近所で大騒ぎになつてゐるんです。喉  
を締められたらしいんですが、女は土地の人  
ぢや御座いません。東京が濱の可成りに身分  
のいい人らしいんですよ。

喜多雄 それは大變だな。しかし、その人殺し  
がおれと關係がある譯ぢやあるまい。(口輕  
く云つたが不愉快な顔に現はす)

か。(ふと氣づいたやうに調子を變へて) こ  
んな下らない話はもう止さうよ。僕は久振  
りで此方へ来たのだから今日は三人で愉快に  
遊ぶことにしようぢやないか。僕はこゝで朝  
餐を御馳走になるから、飯を食つたら三人で  
千疊敷へでも登つて見ようぢやないか。僕は  
土産に毒のいゝのを持って来るから、あと  
で届けよう。

豊次郎 お前は悠長な顔をしておれに氣休めを  
云つてる。かよ子が手紙で何か云つてやつた  
ために、お前はおれの身體を氣遣つて来たの  
に違ひない。隠さなくつてもいいよ。……お  
れの頭は狂つてやしないから安心しろ。不  
断よりも頭の中がハッキリしてゐる位だよ。た  
だ、かよ子は早く死んだ方が、當人のために  
も、傍の者のために幸福だと、おれが思つ  
てるのを、あの子が多少感付いて、お前にそ  
んな手紙を送つたのだらう。

喜多雄 なに、かよが此間寄越した手紙には、  
無邪氣な事が書いてあつただけだよ。あんま  
り退屈だから、兄さんに五日並べを教はつた  
とか、朝早く起きて、曳綱を見に行つて、鯨  
を買つて来て、自分で料理をして食べたが、  
まだビク／＼動いてゐる魚に庖丁を當てる

藤七 それは旦那様の御存じのことぢや御座い  
ませんが、……その婦人の方が男の人と一し  
よに、昨夜夜汽車で東京の方から来たのを見  
たといふ者が御座いますから、若しも旦那様  
もその人たちと同じ汽車にお乗りになつて、  
顔を知つていらつしやるのぢやないかと思ひ  
まして。

喜多雄 知らないね。お前は、いゝ加減なことを  
人に話しちゃいけないよ。叱るやうに云ふ  
藤七 はい。……私も久振りに死人の顔を見  
ましたが、死人なぞ見るものぢや御座いませ  
ん。想ひしやうな目をして、鼻汁を滴らして、  
……旦那様はあんな者を御覽にならない方が  
よろしう御座いますよ。

喜多雄 誰れが死人なぞ見に行くものか。……  
あゝさうだ。お前は、昨夜おれが持つて来た  
毒の箱を直ぐに此處へ届けて呉れ。

藤七 承知いたしました。會釋して出て行  
く。

喜多雄 あいつは、慥に掛けぢやすばしこいく  
せに、人間が少し抜けてるから、馬鹿なこと  
を云つていけないよ。

豊次郎 藤七はおれたちの話を立て聞きしてゐた  
のだよ。油断が出来ないよ。

のは氣味が悪いから、一度で盡り／＼したと  
か、その時兄さんが飯を一尾漁夫に買つて来  
たけれど、食はずじまひで打遣つたとか、さ  
ういふやうなことが書いてあつただけだ。  
豊次郎 それだよ。かよ子もいくら感付いて  
るんだな。(獨言のやうに云ふ)

喜多雄はふと、兄に對して不安な感じを起  
して、思はず後退りする。藤七(水鳥家の  
別荘番、五十歳ぐらゐが裏木戸の側へ現は  
れ、此方を覗く。夜は明けかゝる)

豊次郎 何のためにおれがかよ子を送つて現狀  
を見に行つたと思ふ？ 何のために飯を買つ  
て来たと思ふ？

喜多雄 何のためだか、僕はそんなことまで研  
究しやしないがね。(立上つて) さあ、もう家  
の中へ入らうぢやないか。東の方が薄明しく  
なつた。何處かで雨戸の閉く音がしてゐる。

豊次郎 まあ、もつと其處にゐて、おれの話す  
ことを聞け。まだ誰れも起きやしないよ。お  
れの眞面目な考へを打明けられるのはお前一  
人なんだから。……かよ子を生かして置けば、  
あれのためにもおれ達のためにも決してよく  
ないんだよ。おれは長い間考へ抜いた單句  
にさう思つてる。(重々しく云ふ)

喜多雄 聞かれて悪いことを云つてやしなかつ  
たから、それは聞かないがね。

豊次郎 いや、さうでない。おれ達はこゝで、  
大切な秘密を話してゐたのだから。

喜多雄 (はじめの快活さを失つた人間らしく)  
兄さんは獨りでいやなことばかり考へて、そ  
れを僕に押し付けるからいけないよ。僕には誰  
れに對しても秘密なんかありやしない。

豊次郎 おれはこの頃、頭のがが澄んでるか  
ら、いろんなことが分るんだ。かよ子の身に  
附纏つてゐる運命も、おれには分つてる。お前  
が藤七の云つた死人の話に氣に掛けること  
も、おれにはちやんと分つてる。

喜多雄 僕は氣に掛けてやしないよ。僕が夜汽  
車で大磯へ来たことや、今朝早く山の方を散  
歩したといふことが、ちつとも死人と關係が  
あるんぢやないからね。

豊次郎 それはさうさ。おれはお前よりもつ  
と早くから山の方を散歩してゐたんだよ。御  
嶽さんの側で暗い森の中も確かに歩いた筈  
だ。……しかし、喜多雄、お前は、ある女を  
殺さうと思つたことはなかつたか。(弟を見  
詰める)

喜多雄 ないねえ。男だつて女だつて、人間を

殺さうなんてことは、僕は一度も思つたこと  
はないよ。そんな質問をされるのは今がはじ  
めてだよ。兄さんは、なぜ、眞面目らしくそん  
な不愉快な事に拘るんだね。(空を見上  
げて)僕は久振りに夜明けの景色を見るん  
だが、兄さんも詰らない考へに凝らないで、  
このよく澄んだ空でも見るといい。

豊次郎 お前に教へられなくつたつて、澄んだ  
空なら、おれは毎日よく見てるよ。日の出も  
日の入りも、此方へ来てからよく見てるよ。  
……だけと空を見たつて、朝日を見たつて、  
おれの考へが變る譯ぢやない。……お前は本  
當に、女でも男でも殺さうと思つたことは  
なかつたか。憎いから殺したくなるばかりぢ  
やない、その人間の幸福のために殺したい  
と思つたことはなかつたか。

喜多雄 ないよ。僕は蟲けらだつて殺すのは嫌  
ひだ。  
豊次郎 臆病だねえ。……おれは誰七が知らせ  
に來た女殺しが、お前の所爲だと極つても、  
そんなに驚きやしないよ。

喜多雄 (顔を曇めて)馬鹿云つちやいけな  
(兄の顔を離れて)兎に角家の中へ入ること  
にしよう。

歩廻つたり、六ヶ敷い顔して獨りで考へ込  
んだりしてゐると書いてあつたが、それだけ  
のことで、兄さんの不審の様子に格別變つた  
ところはないんだらうね。

かよ子 え。(曖昧な調子で答へて)死んだ  
義姉さんのことでも思出してるんぢやないか  
と、わたしには思はれるんだけど、訊いて見  
たことないのよ。それで、兄さんが訊いて  
時には、わたし側へ寄付かないでソツとして  
置くのよ。……義姉さんがいくらいゝ人だつ  
たにしても、死んだ人のことを考へるのは話  
らないぢやないの。(はじめの無邪氣に似合  
はない皮肉な調子で云ふ)わたしも、豊兄  
さんの氣持が傳染したのか、此方へ來てから  
は、どうかすると、死んだ人のことが考へら  
れたりするんですけど、それはいけないこと  
だと思つて、成るべく忘れるやうにしてゐる  
のよ。

喜多雄 かよちゃんも死人のことを思出すのか  
い。いやだねえ。お前のやうな、これから世  
の中の幸福ばかり味つて行ける女が、死人  
のことなど思出して、大切な純潔な心を濁  
らすつてことがあるものか。  
かよ子 誰にでもさう云つて、力をつけて貰へ

喜多雄は兩戸の扉へ寄つて、かよ子に聲を  
掛ける。その間に、豊次郎は庭から外へ出  
て行く。

喜多雄 ちや、此方へ出ておいでよ。散歩した  
きや一しよに散歩してもいいから。  
喜多雄は兄のゐないのに氣づいて、あたり  
を見廻す。そして、却つてそれをいゝこと  
としたやうな態度で、空を見上げたり口笛  
を吹いたりする。そこへ、かよ子十九歳  
の可愛らしい女、不審着のまま、が、横手  
から入つてくる。

かよ子 豊兄さんはゐないの？(不思議さうに  
見廻す)

喜多雄 あゝ。  
かよ子 さつき、何だか二人で面白さうな話  
をしてゐたわね。わたし、話聲を聞いて喜い  
兄さんにちがひないと思ふと、直ぐに出て來  
て、お話の仲間に入れて貰ひたかつたのだけ  
ど、笑が壊れてゐたから、大急ぎで直してゐ  
たのよ。わたし、寝相が悪いから、毎晩頭を  
ぐちゃぐちゃにしてしまふの。

喜多雄 ちや、お前はさつきから起きて、お  
れたちの話聞いてたのか。  
かよ子 え、よく聞取れなかつたけれど、今

ると、わたしうれしいわ。豊兄さんと喜い兄  
さんとは云ふことが反對なのね。  
喜多雄 なあに、兄弟だから性分はよく似て  
るんだよ。上へは違つてゐるやうに見えて  
も、腹の底は同じことなんだよ。(感慨を籠め  
て云ふ)おれはね、他家の家の人間になつて  
ゐて、側にしか會はないから、お前にもよく  
分らないのだから、おれは兄貴と同じやう  
に馴ぎ込んでゐることもあるんだよ。

かよ子 いやなことねえ。……ちや、喜い兄さん  
も死んだ人のことを考へてるの？でも、水  
島の義姉さんは丈夫で生きてゐるんだし、兄  
さんのお友だちで死んだ方もないやうだし、  
誰れのことを考へ出すのかしら。

喜多雄 おれが物を考へて馴ぎ込むと云つたつ  
て、死人のことと極めなくつてもいいよ。お  
前も今朝は少し變だ。(ふと嚴かな顔付をし  
て、稍聲を清めて)それよりも、兄貴の精神  
状態はどうも調子が外れてるやうだから、お  
前は氣をつけなさいやいけなせ。兄貴の云ふ  
ことや舉動に變なところがあつたら、一々お  
れに知らせるやうにして呉れ。  
かよ子 豊兄さんの精神状態がどうかしてゐ  
るの？今朝此處で會つた時の様子が變だつ

日は三人で箱根へ遊びに行かうつて、そんな  
相談をしてゐたでせう。わたし昨夕の夢見が  
よかつたと喜んでゐたのよ。

喜多雄 (笑つて)うまいことを云つてらあ。  
眞顔でそんなことを云つて。かよもずるくな  
つたなあ。

かよ子 では、わたしの聞きちがひだつたかし  
ら。若し聞きちがひだつたと分つたら、わた  
し大變に失望してよ。

喜多雄 そりや、事によつたら、箱根へでも修  
善寺へでも連れてつてやらぬこともないが  
ね。お前は身體の加減はいゝのかい。  
かよ子 え、わたし東京にゐた時よりも太  
つたでせう。千疊敷くらゐなら一息で登れる  
わ。

喜多雄 えらいなあ。……此方へ來てからは、  
氣を使ふやうなことはないんだらうね。兄さ  
んと仲よく暮らしてゐるんだらうね。  
かよ子 え、それは。……豊兄さんと喧嘩を  
一度したこともないわ。わたしの養生にもよ  
く氣をつけて呉れるのよ。  
喜多雄 さうか？(船に落ちぬやうな態度を  
する。そしてあたりを顧みて)此間のお前  
の手に、兄さんは暗いうちに家を出て外を

たの？(物に驚いたやうに)それで、豊兄  
さんは今何處へ行つたんでせう。  
喜多雄 御嶽さんの近くで、女が締殺されて  
るさうだから、それでも見に行つたのだから  
よ。

かよ子 女が殺されてる？……誰でせう。兄  
さんはわたしを脅かさうと思つて。  
喜多雄 本當だよ。兎ふのなら見て來るとい  
い。

かよ子 本當なら、わたし恐ろしい。(恐怖に  
震へながら空間を見て)……それは誰れが殺  
したんでせうか。殺した男は誰れだか分つた  
んでせうか。  
喜多雄 加害者は誰れだかよく分らないだらう  
が、お前はなぜそんなに怖がるんだ。お前や  
おれに關係がある譯ぢやあるまいし。  
かよ子 でも、わたし、急に恐ろしい氣がして  
ならないの。……殺された女の人の顔が見え  
るやうだわ。首を絞められるのはつらいでせ  
うね。同じ殺されるにしても、首を絞められ  
ると、刃物で喉を突かれるのと、どちらが  
苦しいんでせう。  
喜多雄 おれはまだ殺された経験がないから分  
らないよ。……そんな役にも立たないやな

ことを考へる必要はないね。…あの卒の香は牛乳屋だらう。おれの持つて来た毒に牛乳をかけて直ぐに食べることにしようぢやないか。…種かない朝だ。

喜多雄は努めて快活を装つてさう云ひながら、不安な思ひが、隠しきれないやうに微見えてゐる。藤七、風呂敷で包んだ毒の箱を提げて入つて来る。

喜多雄 御苦勞だつたな。そこへ置いて行けばいいよ。  
藤七 (毒の箱を下へ置く。そして、かよ子に目をつけて挨拶して) お嬢様は今度は一べんも爺やの處へお遊びにいらつしやしませんね。此方の旦那様も寄つて下さらないし、何かお氣に障つたことがあるのぢやないかと、爺やは心配してゐたので御座いますよ。

かよ子 (返事するのが懶いやうに) わたし、この頃は減多に外へ出掛けなかつたのよ。  
藤七 爺やは此間、太田の御隠居様が東京へお引上げになる時、鯉や金魚を頂いてお池へ放しときましたから、今日でも御一しよに見にいらつしやいます。お氣に召したのがあつたら買つて頂きたいと思つてるので御座いますよ。

喜多雄 金魚は食べられないから、賣つて金にして一冊やらうと思つてゐるのかい。かよ子やんは用心してゐないと、詰らない金魚を爺やから高く買付けられるかも知れないよ。

藤七 へへ。旦那様は直ぐにわたしの申上げることケナしておしまひなさいと思ひましたから、旦那様にはお願ひしないで、お嬢様に高く買つて頂かうと思つてるんで御座います。あの金魚は、御覽になつたら、屹度お嬢様のお氣に召すだらうと思はれます。

喜多雄 爺やも高賣の時機が悪かつたよ。もつと早かつたら買つて賣へたらうが、かよ子やんは、今は金魚なんぞ見たかあないんだ。  
藤七 どうかなたつたので御座いますか。(かよ子を見詰めて) さう云へば、お嬢の色もお悪いやうだ。

かよ子 (煩さうに、顔を外して) わたし、どうもないのよ。そのうち爺やの金魚でも鯉でも見せて貰ふわ。  
藤七 どうぞ御覽なすつて下さいまし。(歸りかけてまた後戻りして、喜多雄に向つて) さつきの女殺しの話で御座いますかね。伊豆屋の平吉が怪しい男を見たと言つて居ります。

す。顔はよく見なかつたけれど、變な男が御藏さんの方から下りて来るのを見たさうで御座います。どうも譯がありさうに思はれたから、突立つてあとを見つると、も一人の男が同じ道を驅けて来たさうです。それで、殺し手は一人ぢやあるまい、二人でやつた仕事だらうと、平吉は申して居ります。物取りぢやあるまいし、意図があつてやつたことで御座います。若い女一人を、男が二人がかりで絞殺すなんてあんまりむご過ぎるやうに、わたくしは思はれます。

喜多雄 さうだね。(空々しく云ふ) …お前は早く歸つて庭をよく掃除しといつて呉れ。今日はみんなを誘つて行くから。  
藤七は出て行く。

かよ子 爺やは何だつてあんないやなことをわたしたちに話して行くんでせう。  
喜多雄 人殺しの話なんか、誰れでも話したがるものなんだよ。本當に、いゝ加減な想像なんだよ。平吉といふ男が見たつて云ふのも當てにやなりやしないさ。

かよ子 わたし、此間豊兒さんに誘はれて、御藏さんの裏山へ登つたのだから、あの邊のことよく知つてるわ。山の上からは松原越しに

海が見えて、そりや眺めがよいよ。…殺された人は、御藏さんへ行くまでは、自分がどんな目に會はされるか、ちつとも知らなかつたでせうのに。わたし、殺された人が殺した人に隨つて何も知らないで、あの坂を上つてつた様子が、今日の前に見えるやうなの。邪慳に絞殺されるくらゐなら、自分で海へ身を投げるとか、汽車の線路へ飛込むかして、早く死んぢやつた方がよかつたでせうのに、その女の人はなんにも氣がつかなかつたのね。

喜多雄 それは極まつてるさ。殺されると知つて誰れが隨つて行くものか。(また不安な思ひに襲はれたやうに) 折角眼をこしらへて保養に來たのに、朝から縁喜が悪いよ。兄貴ばかりぢやない、かよまでもどうかしてゐる。(雨戸の方を見て) おきよはまだ寝てるのか。もう起したらいいぢやないか。早く雨戸でも開けたらいいだらうに。いつまで庭に立つても爲様がないから、家の中へ入つて、氣分を變へて、その毒でも食べることにしようぢやないか。

かよ子 (兄に促されても家の中へ行かうとはしない) 此方にはお母さんがいらつしや

らないから、下女も寝たいだけ寝させるんです。

喜多雄 此方にはお母さんがゐないから、お前も氣が楽なんだらうね。(ふと柔しく云ふ) かよ子 え。(邪氣なく云つて) それは、時々は退屈して東京の懸しくなることもあるし、何かしら詰らない氣持のする時もあるのだけど、大抵はスーッとしたやうな氣持で毎日目を暮らしてゐたのだわ。…でも、それは今朝までのことなの。兄さんに呼ばれて此處へ出て來てから、わたしはじめて氣がついたの。今までわたし無智だつたのね。豊兒さんは死んだ義姉さんの事を考へて悪いでるのだとはかり思つてゐたんですもの。

喜多雄 それは、兄貴の様子はちよつと變なやうにおれには思はれるんだが、おれがさう云つたからつて、お前は兄貴を怖がらなくなつてもいいよ。おれが餘計なことを云つたために、お前に心配をさせて済まなかつたね。  
かよ子 いえ。餘計なことぢやないの。(あたりを見廻して) わたし黙つてゐられないから思つたこと云つちまふわ。豊兒さんの知つてる女の人がこの土地にゐるらしいのよ。暗いうちに外へ出て行くのは、その人に會ふた

めなんでせう。それで、しよつちうわたしに何か隠してゐるやうに氣兼ねをしてゐたのは、そのためだつたの。わたしに悟られやしないかと、豊兒さんがビク／＼してゐる譯が今やうやく分つたんです。…だから、わたし怖くなつたの。爺やの話を聞いて、恐ろしいことが考へられてならないの。わたしの思ひひならいゝんだけれど、…喜い兄さんも、豊兒さんの精神状態が今朝は變だつて、さつきさう云つたわね。

喜多雄 兄貴にそんな秘密があるつてことは、おれは今まで知らなかつた。(信じかねる風) 二人は陰鬱な顔して、めい／＼の思ひに沈む。やがて、  
喜多雄 しかし、平吉が見たつていふ男は、兄貴ぢやあるまいよ。…おれも詰らない心配をしてゐた。…いくら兄貴の頭が變になつても、そんな馬鹿なことがあるものぢやない。

かよ子 男が二人通つたのを見たといつたわね。  
喜多雄 偶然其處を通つたために疑念を受けちやたらしないね。  
豊次郎が入つて来る。二人に對して疑念の

目を放つ。  
喜多雄 何處へ行つてゐたの？  
豊次郎 戸倉の別荘の側まで行つて来た。死骸には鹿が掛つてたから顔がよく見えなかつた。

喜多雄 何だつてそんなものを見に行つたのだい。かよは非常に心配してゐたよ。  
豊次郎 お前が何か餘計なことを喋舌つたんぢやないか。(詰問するやうに)

喜多雄 僕は餘計なことなんぞ云やしないよ。(ドギマギしながら)  
豊次郎 だつて、かよ子はあの通り震へて居やないか。あんなに熟睡してゐたものが、三日も眠らなかつた人間のやうな元氣のない顔をしてゐるのに、おれが気がつかないと思つてゐるのか。(怒りを含んだ聲で云ふ)

喜多雄 それは僕の所爲ぢやないよ。  
豊次郎 ぢや、おれがちよつと出て行つた間に、お前の外の誰れかがやつて来て、かよ子に何か云つたのか。  
かよ子 わたしどうもしてやしないの。兄さんこそ氣を鎮めて聴りしてゐて下さい。  
豊次郎 おれこそどうもしてゐやしないよ。喜多雄が何か云つたか知らないが、誤解しちや

二

二三十分後、前の幕の別荘の一室。食卓を圍んで、兄妹三人が暮を食べてゐる。かよ子の居室らしく、鏡臺や屏風などあり、西洋畫の額が掛つてゐるが、それは、觀客の目には見えない。  
かよ子 この暮は随分おいしい暮ね。(匙を持つたまゝ、喜多雄の方を見る)

喜多雄 (夢から醒めたやうに) うん。うまいだらう。和泉屋へ頼んで特別にいいのを選擇させたんだ。  
豊次郎 この土地にはろくな果物がなின்றね。(平靜な態度で云つて、皿の暮を見てゐる)

かよ子 水島の義姉さんでもおたまちやんでも、誰れか東京から遊びに来てくれればいいと、わたし此間うち國言のやうに云つてゐたのよ。だから、今朝喜い兄さんの聲を聞くと、飛上るやうに悦しかつたのだけれど、出抜けに脅かされちやつたので、スツカリ情けたの。藤七がいけないのよ。いけやかない爺やだわ。死人があらうと人殺しがあらうと、体合ひもないわたし達の處へ、朝つば

いけない。  
かよ子 (外の方を氣にして) こんな處にいつでも立つてゐちやいけないから、家の中に入りませう。わたし、今雨戸を開けるわ。  
かよ子は頼み勝ちに、豊次郎の方を氣にかけながら出て行く。

豊次郎 (弟に向ひ顔をして) お前は本當にかよ子に何も云はなかつたのか。おれはあの子の生きてゐるうちは、無駄な心配はさせまいと思つて、此方へ来てからも、おれの思つてゐることは微塵も外へ現はさないやうにしてゐたのだ。それに、無邪氣な相が消えてしまつた。一日でも一刻でも時を延してゐるうちに、人間の心は不意に邪念が芽を吹いて來るものだが、一度芽を吹いたが最後、この頃の草や木のやうに、どしどし蔓つて繁つて行くのだ。昨日までは、苦しみの種から生れてゐながら、苦しみを感じなかつたかよ子も、今はそれを感じだしたのだ。あれの母親はおれたちの母親に虐殺されたやうなものだからな。  
喜多雄 虐殺だなんて考へるのは、兄さんの頭がどうかしてゐるんだよ。親爺のしたくらゐなことは世間に有りがちなことだから

らから知らせに來なかつてもいいぢやないかね。  
喜多雄 さうだとも。あいつ他所へ行つても餘計なおしやべりをしてゐるに違ひない。(へそを氣遣つてゐるらしく思ふさうに云ふ)

豊次郎 藤七のおしやべりくらゐは構はないが、お前は後暗いことではないのか。(聲を稍低めて) おれ達の前ではもう秘密にするには及ばないよ。さつき草原に轉んだ時に、おれはお前の心臓に觸つて、激しく鼓動してゐるのを知つたのだ。お前の胸の底には、何か異常な事を實行したあとのやうな震へが残つてゐるのを、おれはちやんと感じてゐるのだ。  
お前はおれだけには隠せないよ。二人は幼い時から一しよに育つて來た人間だもの、おれにお前の心の中が讀めないでどうする？……昨日までのかよ子になら、世間の者の恐ろしがるやうなことは決して聞かせたかたいのだけれど、今はかよ子も、恐ろしいことが自分の周圍に起つてゐることを感付いてゐるのだから、今更におれ達がかよ子の目に蓋をしてゐようとしたりしてもう遅いんだ。だから、お前も、遠慮しないで正直に打明けて見ろ。おれは決してお前を非難しようとは思つてゐない。輕

ね。……かよは兄さんが、死んだ義姉さんの事か何か考へて毎日鬱いでると云つて心配してゐたのだ。

豊次郎 おれはかよ子だけには、おまきのやうな苦勞をして死なせたくないよ。おれやお前の敵にしときたくはないよ。……おれは今、氣にかゝつたから死人を見に行つたのだが、加害者は明夕のおそい汽車で大磯へ來たのだと、みんなが噂をしてゐる。  
喜多雄 それが僕にでも關係があるのかね。(反抗するやうに云ふ)

豊次郎 御獄さんの邊は、人殺しをやるのにいゝ處だ。おれはさう思つて、毎朝散歩してゐたのだ。  
喜多雄 兄さんはどう思はうとも、僕はあそこが陣望がいいから、行つて見ただけだ。かよもさつきあそこは眺めがいいと云つてゐたよ。……しかし、朝からこんないやな話をしてゐても爲方がないから、僕は一先づ家に歸つて出直して來ることしよう。

喜多雄が行きかける時、豊次郎はふと手をはして引留める。喜多雄はその手を振放して行かうとする。そのはずみに、二人は芝生の上にとろぶ。

腹もしない。都合によつたら、おれが責任を背負つてお前の身代りになつてやつてもいいと思つてゐるのだ。  
喜多雄 僕の身代りになると云つて、何のため

に身代りになるんだね。……自分の胸をおさへながら)僕はさつき芝生に轉んだ時、柔かい草が身體に觸つていゝ氣持だつたよ。あの上をいつまでもコロコロと轉んでゐたかつたくらゐだ。動悸も打つてやしないし、手も震へてやしないよ。  
豊次郎 お前はまたおれのこの目を眩ましてゐようと思つてゐるんだ。(詰問する調子で) ぢや、かよ子に訊いて見る。

喜多雄 (強ひて笑ひを浮べて) おれの顔付が不潔に比べてそんなに遠つて見えるか。かよの目でよく見て、公平に判断して呉れないか。  
かよ子 (よく見て) さう云へば、喜い兄さんも今朝は變ね。目付が凄いいぢやないの。

かよ子は、喜多雄を見た目を轉じて豊次郎の方をぬすみ見して、それから、額を見上げて、ひそかにおびえる。  
豊次郎 かよもいよ、氣がついたのだな。お前があの親爺の肖像がよく出來てると云つて

此處へ掛けた時から、おれは氣遣ひでならなかつたのだ。親爺は一生のうち二人も三人も人間を殺してゐるのだよ。そのうちの一人は、西南戦争で殺したので、親爺自身も自慢をして人に話してゐたのだが、生物を殺したのは何のためだつて同じことだ。殺す生ずは戦争の時に限つたことではない。(毅然として) 喜多雄、お前は、戦争でもない時に親爺と同じことをやつたな。他所の人間はどうか知らないが、親爺の一族は、一生に一度は親爺と同じことをやらなければ生きてゐられないと、おれは此處から考へてゐたよ。

喜多雄 親爺と同じことをやつたのならやつたでいいから、兄さんは心を燃めて下さい。

豊次郎 馬鹿、おれを狂人とも思つてゐるのか。おれはこの通り落着いてゐるぢやないか。おれが狂人なら、親爺も狂人だつたのだ。お前も狂人だ。……かよ子でも喜多雄でも、おれに何事でも訊ねて見ろ。それで、おれの返答が間違つてゐるからないか試験をして見ろ。この頃のやうに澄んでゐるおれの頭には、分り過ぎるぐらゐ何でも分つてゐるつもりだ。

かよ子 お父さんはいゝ方だつたのよ。だから

豊次郎 庭へ下りようとするかよ子を、豊次郎は手を伸して引留める。

かよ子 兄さんは、わたしをどうするの？……勘忍して頂戴。

豊次郎 お前はまた誰れに對しても悪事をしたことのない女だ。あやまるには及ばないよ。

かよ子 だから、兄さんは私を虐めないで下さい。

豊次郎 おれが虐めるものか。まあ、此處へ坐れよ。

かよ子 は手を執られてゐるので、逃げようとしても逃げられないで、おど／＼しながら、背像畫の側に坐る。

かよ子 わたしお父さんの側に坐つてゐてよ。

豊次郎 おれたち三人は、その親爺を生みつけられたのだからな。よくその背像を見よといふ。人間が神に似てるやうに、三人が親爺にだけだけよく似てゐるかを見よといふ。

かよ子 わたし今から海へ行つて見たいのだけれど、兄さんは行きたくない？ (豊次郎を見てゐるやうに目を左右に向ける)

豊次郎 まあ、も少し此處に坐つてゐる。おれを恐れなくてもいいよ。おれはたつた一人の妹の眞實の幸福を考へてゐるのだ。

ら、わたしもお父さんの背像を此處に掛けてゐるんだわ。夜もお父さんに守つて貰つてゐるから、安心してよく眠れるやうにと思つて。

豊次郎 親爺の背像が廃除けになると思つてゐたのか。人間にいろ／＼な苦しみと興へた根柢の神様を、人間が崇拝してゐるやうに、かよ子は自分に苦しみと興へた根柢の神様を有難い神様にして奉つてゐるのか。……馬鹿だなあ。

豊次郎、ふと立ち上つて、背像畫を取りおろす。そこへ、姿は見えないで、藤七の聲だけが、庭の方から聞えて来る。

藤七 旦那様、至急の御用がある方がいらつしやいました。此方へ御案内いたしました。此處へお通し申しませうか。旦那様は直ぐにお家へお歸りになるでせうか。

三人はふと目を見合はす。喜多雄は慌てて立ち上つて、「ちや、ちよつと行つて来よう」と獨言のやうに云つて出て行く。

豊次郎 (背像畫を下に置いて) 彼奴はおれよりも先きに實行したのだ。(歎息する)

かよ子 喜い兄さんは何を實行したのよ。

豊次郎 何を實行したか、お前も分つてゐるんだ。

豊次郎 はやさしくさうぶひながら、出掛けにかよ子を後から抱へて、喉を締めようとする。かよ子は微かに聲をたてて激げながら抵抗する。豊次郎は女の苦しきやうな顔面を見ると、知らず／＼手をゆるめる。すると、かよ子は猛烈な抵抗をはじめ、兄の手から尻出すや否や、鬼女の如く兄の喉佛を腰へ付ける。豊次郎は腫くも氣絶する。かよ子はよろ／＼と食卓に凭れて俯伏しになる。そこへ、喜多雄が入つて来る。二人の様子を怪しんで、かよ子の肩を叩いて、

喜多雄 おい、どうしたのだ？

かよ子 (目を見上げて) わたし、兄さんに殺された。何の罪もないのに兄さんに喉を締められたのです。わたしどうもしたのぢやないの。兄さんがどうなつてゐてもわたしの所爲ぢやないの。兄さんは氣が狂つてゐるんです。(野蠻した調子で、しかしあたりを揮つてゐるやうに云ふ)

喜多雄 お前はよくそれで無事だつたな。兄貴は頭が變だと、今朝から思つてゐたのだ。

かよ子 兄さんの氣が狂つてゐることを、あなたにはよく知つてゐるんでせう。

らう。この毒はおれのところへ手土産に持つて来て呉れたのか、外見の者としよに食べた洋だか分らないのだ。

かよ子 ちや、爺やの話してゐたことが喜い兄さんに關係があるつて云ふの。

豊次郎 あいつ今は、その事で調べられるのだが、言逃げるすべはあるまいよ。……あいつ、おれよりも先きに實行したのだ。(次第にかよ子を見詰める)

かよ子 (さぞ／＼しながら) だつて、喜い兄さんのやうな活な面白い人が、そんな恐ろしいことをする譯はないと、わたしには思はれてよ。水島の家に入つてからは、今まで幸福な日を送つてゐるのぢやないの。

豊次郎 世間の出来事、譯が一々お前などに分つてたまるものか。筋の通つた道を踏んで人間は目を送つてゐるんぢやないぜ。……お前は喜多雄のしたことを手はじめにこれから怖い世の中を見なければならぬ。

かよ子 わたし、兄さんが怖い。(座を立つて庭へ下りようとする)

豊次郎 いや／＼おれが怖くなつたのか。おれはお前を幸福にしてやらうと、いつも思つてゐたのだ。

喜多雄は氣絶してゐる豊次郎の様子を側へ寄つて薄氣味悪さうに見る。

喜多雄 兄さんは狂人だかどうだが、おれには分らない……。兎に角、早く醫者を呼んで来なさいやらないよ。

かよ子 若しも豊次郎が息を吹返したら、わたしまたどんな目に會はされるか知れないから此處にゐられないわ。

喜多雄 だつて、おれ達が打遣つといつて退出す譯には行かないよ。

かよ子 ちや、お醫者と一しよに藤七をも呼んで、豊次郎があらばれたら、取調めて貰はなさいやないわよ。それに、喜い兄さんは、豊次郎の狂人だつてことをよく説明して下さいね。

喜多雄 おれにはよく分らん。とに角直ぐに醫者を呼んで来させよう。

喜多雄が出て行くと、かよ子は、怖々豊次郎の側へ寄つて、警戒しながら、兄が氣絶してゐるか否かを検査する。そして、あたりを見廻しながら、兄の喉をおさへつける。腕くも息の根の絶えてゐるのを認めたあとで、鏡の前に寄つて、亂れた髪を直しにかかる。喜多雄が入つて来る。

ら、わたしもお父さんの背像を此處に掛けてゐるんだわ。夜もお父さんに守つて貰つてゐるから、安心してよく眠れるやうにと思つて。

豊次郎 親爺の背像が廃除けになると思つてゐたのか。人間にいろ／＼な苦しみと興へた根柢の神様を、人間が崇拝してゐるやうに、かよ子は自分に苦しみと興へた根柢の神様を有難い神様にして奉つてゐるのか。……馬鹿だなあ。

豊次郎、ふと立ち上つて、背像畫を取りおろす。そこへ、姿は見えないで、藤七の聲だけが、庭の方から聞えて来る。

藤七 旦那様、至急の御用がある方がいらつしやいました。此方へ御案内いたしました。此處へお通し申しませうか。旦那様は直ぐにお家へお歸りになるでせうか。

三人はふと目を見合はす。喜多雄は慌てて立ち上つて、「ちや、ちよつと行つて来よう」と獨言のやうに云つて出て行く。

豊次郎 (背像畫を下に置いて) 彼奴はおれよりも先きに實行したのだ。(歎息する)

かよ子 喜い兄さんは何を實行したのよ。

豊次郎 何を實行したか、お前も分つてゐるんだ。

らう。この毒はおれのところへ手土産に持つて来て呉れたのか、外見の者としよに食べた洋だか分らないのだ。

かよ子 ちや、爺やの話してゐたことが喜い兄さんに關係があるつて云ふの。

豊次郎 あいつ今は、その事で調べられるのだが、言逃げるすべはあるまいよ。……あいつ、おれよりも先きに實行したのだ。(次第にかよ子を見詰める)

かよ子 (さぞ／＼しながら) だつて、喜い兄さんのやうな活な面白い人が、そんな恐ろしいことをする譯はないと、わたしには思はれてよ。水島の家に入つてからは、今まで幸福な日を送つてゐるのぢやないの。

豊次郎 世間の出来事、譯が一々お前などに分つてたまるものか。筋の通つた道を踏んで人間は目を送つてゐるんぢやないぜ。……お前は喜多雄のしたことを手はじめにこれから怖い世の中を見なければならぬ。

かよ子 わたし、兄さんが怖い。(座を立つて庭へ下りようとする)

豊次郎 いや／＼おれが怖くなつたのか。おれはお前を幸福にしてやらうと、いつも思つてゐたのだ。

喜多雄は氣絶してゐる豊次郎の様子を側へ寄つて薄氣味悪さうに見る。

喜多雄 兄さんは狂人だかどうだが、おれには分らない……。兎に角、早く醫者を呼んで来なさいやらないよ。

かよ子 若しも豊次郎が息を吹返したら、わたしまたどんな目に會はされるか知れないから此處にゐられないわ。

喜多雄 だつて、おれ達が打遣つといつて退出す譯には行かないよ。

かよ子 ちや、お醫者と一しよに藤七をも呼んで、豊次郎があらばれたら、取調めて貰はなさいやないわよ。それに、喜い兄さんは、豊次郎の狂人だつてことをよく説明して下さいね。

喜多雄 おれにはよく分らん。とに角直ぐに醫者を呼んで来させよう。

喜多雄が出て行くと、かよ子は、怖々豊次郎の側へ寄つて、警戒しながら、兄が氣絶してゐるか否かを検査する。そして、あたりを見廻しながら、兄の喉をおさへつける。腕くも息の根の絶えてゐるのを認めたあとで、鏡の前に寄つて、亂れた髪を直しにかかる。喜多雄が入つて来る。

喜多雄 兄貴は寝てるんぢやないか。気が變になつたからって氣絶する譯はあるまいよ。  
かよ子 さうかも知れないわ。兄さん、側へ寄つてよく見て御覧なさい。わたしは怖くつて寄りつけないわ。

喜多雄 (兄の側へ寄つて、その死相を注意して) 暫だなあ。昇解して心臓麻痺でも起したのかしら。

かよ子 さうかも知れないわね。(落着いた顔して振向いて) 兄さんばもういやなことを考へてゐないで幸福ね。あんなことばかり考へて目を暮らしてゐるよりは、氣絶でもしてゐる方が幸福だつてことが、わたし今やうやく分つてよ。

喜多雄 お前はさうしてそんな存気なことが云つて居れる?  
かよ子 さつき、急用があつて兄さんに會ひに来た人は誰れだつたの?

喜多雄 おれはヌツカリ忘れてゐた。お前も知つてゐる琴平の茅酒さんが、偶然此方へ来てゐておれを訪ねて来たのだ。兄貴の様子があたりまへなら、此處へ通さうと思つて、外に待たしてゐるんだが、こんな風ぢや駄目だな。

かよ子 わたし、此處にゐるのが怖いわ。  
藤七 爺やも氣味が惡う御座いますよ。こりや、たゞ事ぢやない。  
かよ子 喜い兄さんも氣が變になつてるやうだから、わたし怖いわ。  
藤七 わたくしも今朝此方へお伺ひした時からさう思つてゐました。(耳を澄まして一旦那様の聲がする。不審のお聲とはまるで違つてお嬢様も御用心なさいませ。  
藤七は事があつたら庭の方へ飛出せるやうに身構へをする。

三

ある田舎町の街の上。夜。電柱につけられた街燈が暗い道をかすかに照らしてゐる。今様の耳かくしに髪を結つて、派手な浴衣を着たかよ子が、一方から入つて来る。向うから寺濱某(四十餘歳、體格逆しき男)が入つて来る。行きぢがひさま、

寺濱 かよ子さんぢやないか。  
かよ子 あら。先生が此方へ来ていらつしやるとは、ちつとも存じませんでした。  
二人は留つて、顔に向合つて立つ。しかし、かよ子の顔のみハッキリ電燈の光を受け

かよ子 お通ししたらいいぢやないの。わたし、異つた人に會ひたくつてたまらないのよ。  
喜多雄 かういふ時だ、寺濱さんの意見でも訊いて見るとだ。  
喜多雄が奥へ入つて行くと、かよ子は鏡面を見入つてクリムなどで顔の磨きに取り掛ける。庭の方から藤七が入つて来て、旦那様と聲を掛ける。かよ子、聞耳を立てて、不安な態度で座を立つ。外を覗いて、

かよ子 爺やだつたの? まあいゝ所へ来て突れたわね。此方の旦那様はさつき不意に目を廻してお倒れになつたのよ。上へ上つて御様子を見ておくれな。

藤七 それは大變だ。お顔へ水でもぶつかけたら、息をぶつ返したさるかも知れない。(上へ上つて、豊次郎の側へ寄つて) こりや、あたりまへの氣絶ぢやねえな。  
かよ子 たゞの氣絶ぢやないつて。(驚いたやうにぶふ)

藤七 お醫者様に見て貰ふまでもない。わたくしが一日見てさへ分りませう。全體旦那様はいつの間にかこんなにおんななつたんでせう。お嬢様は御存じないんで御座いますか。  
て、寺濱の顔は光の外にあつて、絶えずボツボツと泣いてよく分らない。

寺濱 遺體をかねてあなたに會ひたいと思つて、夕方此方へ来たんです。明日の朝はお訪ねしようと思つてゐたのだが、此處で會つてよかつた。どうです、身體の具合は?  
かよ子 おかげで大變よくなりました。この頃はお薬も取れないので御座いますわ。

寺濱 それは何よりだ。  
かよ子 先生は最近に兄にお會ひ下さいませ?  
寺濱 それについてあなたをお訪ねしたいと思つてゐたのだ。兄さんはこの頃は精神状態がよつほどよくなつてゐますよ。もう大丈夫でせう。此間會ひに行つた時には、あの時のことを夢のやうに思出して話してゐましたよ。それから、あなたのこともぶつてゐました。安城家の血統はかよ子一人に残つてゐるんだから、結婚をさせるやうに骨を折つてくれと、わたしに頼んでゐました。わたしは以前、自分から縁談を持出したことがあるくらゐだから、お受合ひはして置きましたわね。

かよ子 わたしの結婚のことなど仰有らないやうにして下さいませ。二人の兄が一度期に

かよ子 わたしはちつとも知らないうわ。朝御殿の支度に差所の方へ行つてゐる間に、兄さんはそんなになつたのよ。……早くお醫者さんが来て下さればいいのに。  
藤七 晝間に外から人が入つて来て、御主人を殺して行くつてことはたい譯だ。まさか、昨今の女殺しぢやあるまいし。(両言のやうに云つて) お嬢様、こりや、お醫者様を呼ぶさきに、警察へ届けなさいやりますまいよ。

かよ子 爺やは自分で警察へ届けに行かうつて云ふの? (替めるやうにぶふ)

藤七 わたくしは家の旦那様のお指圖次第でどうにでもいたします。  
かよ子 それで、御嶽さんの人殺しの殺し手は誰れだか分つたのかい。

藤七 いゝえ、まだハツキリ分らないやうです。殺された女を連れて停車場を下りた男があつたらしいので、警察では昨夕のおせい汽車で来たお客を調べると云つてゐます。殺した男が、いつまでも、この土地に居るやうしてやしまいと云つてゐますが、御嶽さんの死人も殺されてゐるし、此方の旦那様もこんなになつていらつしやるし、……

あんな恐ろしいことになつたのですもの。寺濱 しかし、あの時の記憶を消すためにも、あなたは結婚なすつた方がいゝでせう。わたしのためにもいゝんですよ。わたしもあの時には開り合ひがあつたので、あの時の氣持が今でも頭の中に残つていけない。  
かよ子 それで、若しも兄の精神状態が完全に回復しても、罪人になるやうなことはないので御座いますか。

寺濱 そのことは心配なさらなくつてもいいでせうがね。……わたしはあの後、心の落着いた時分に時々思出しては、不思議でならないんです。あなたによくお訊ねしたいと思ふこともあるんですよ。かういふことをお訊ねしちや、あなたがいやに思ひなされるか知れないが、……わたしが門の外で會つた時には、不審とそれほど變つてもゐなかつた喜多雄君が、その前から發狂してゐるやういふ恐ろしい犯罪をしたといふのも解らないことだし、ことに、御嶽さんの前の殺人が喜多雄君の所爲だと解つたのも、僕にはよく存込みません。警官や検事の訊問に對しては、わたしは批評がましいことを口へ出すのは遠慮して、藤七の云つた通りに同意したのだつた

が、警官や検事の解決した問題が、わたしにはどうも得心の行くまでに解決されてゐないので。す。

かよ子 ちや、先生は、兄の罪は冤罪だと思つていらつしやるんでせうか。

寺濱 わたしは驚つてゐる。……人間以外に、魔物とか何かいふやうな物があつて、豊次郎君に仇をして生命を取つて、御嶽さんの側でも女の生命を取つたのだと信じられれば、至極都合がいいのだが、我々はさういふことを信じられなくなつたので、都合が悪い。喜多雄君は、御嶽さんの側の殺人も自分のしたことだと思つてゐるやうだが、わたしには、どうしてもさう思はれません。

かよ子 でも、上の兄などは、上へは何ともないやうでも、精神に異常があつたのですから。寺濱 喜多雄君の精神が何かの刺激で突然狂つたにしても、理由のないのに、兄さんの喉を締めにかゝつたのは、不思議でならない。二人は不慮の間に、兄弟だつたのだから。それに、豊次郎君が抵抗もしないで、たやすく息を取つたのも、わたしには理解の出来な問題なのです。……喜多雄君自身は、精神が暴走して来ると、自分が殺して二度も殺人

が、心安くてで、出抜けに變な事を訊いたのがいけなかつたか知れないが、鼻衝しないで心を落着けて下さい。

かよ子 検事も、誰れもわたしに疑ひをかけないから、何も知らなかつたと云つて、藤七の云ふ通りに、喜多雄兄さんの所爲にしてすましたのですけれど、本當はわたくしのこの手が兄の喉を握つたのです。それを喜多雄兄さんは御自分の所爲のやうに、今思つてゐるのなら、わたし怖う御座いますわ。喜多雄兄さんが、無實の罪だつたことも知らないで青い顔して、狂人らしい目をして御自分の手を見殺しの手としてボンヤリ見てゐることを思ふと、わたしぢつとしてゐられなくなりまして。……自分の手を出して電燈の光で見ながら物狂はしい態度をする。

寺濱 そんな華やかな手で人間の生命を取れるものですか。(かよ子の手を執つて) あなたは安城家のたつた一人の相續者なんだから自重しなければいけませんよ。……わたしがこれからあなたの前までお送りしませう。

二三人の人間が薄暗いところを、影の如く通り過ぎる。一人の男、片端に立留つて此方を見てゐる。その男の顔は分らない。寺

をしたつてことを認めてゐるやうな口を利用ので、當人さへさう認めてゐることを、わたし一人が疑ふのは變だが、かよ子さんはどう思ひますか。あなたはあの時側にゐたことだし、ことにあなたのやうな無邪氣な女の方の觀察は参考に訊いて置きたいと、わたしは思つてゐるんです。これはわたしとあなただけの間の話にして、決して外に洩らすやうなことはしないから、腹藏なく聞かせて貰ひたいんですがね。

かよ子 それでは、兄は自分を罪人として認めるので御座いますか。(氣色ばんで云ふ) 寺濱 さうです。喜多雄君のやうな不慮の狂人だつた青年が、自分が犯したかどうか分らないやうな罪を自分で認めてゐるのが、わたしには、一層不慣れに思はれるんです。むしろ狂人になり切つてゐる方が、兄さんのためには幸福なものでせう。なまなかに、ボンヤリした自意識があるのがみじめです。

かよ子 先生のやうな方がさう仰有れば、わたくしもさういふ氣がいたしますわ。死んだ兄は、兄弟に殺されたにしても、魔物とか何かの手で殺されたにしても、結局幸福なのぢや御座いますまいか。ですから兄は自分を手に

濱はかよ子の手を執つて歸りを促しても、かよ子は動かない。

かよ子 わたしはあの時豊次郎兄さんにおとなしく殺されてゐたら、却つて幸福だつたかも知れませんわ。逃げようと思つたばつかりにあんな恐ろしいことをして……。先生、わたしはこれからどうしたらよろしいのでせう。

寺濱 ……あなたも兄さんのやうになつたんだ。……黙息する。立つて見てゐた男、野卑な嘲笑を洩らして行く。寺濱はいてその後姿を顧みる。

掛けた者に違ひはしなかつたので、恨んでもゐないのだらうと思はれますわ。

寺濱 ホウ、かよ子さんはあの事件をそんな風に考へてゐるんですか。(不愉快さうに云ふ) 寺濱 さう思つてゐちやいけないんで御座いますか。

寺濱 いけないこともないだらうが、あなたは二人の兄さんのたつた一人の妹さんだ。兄さんがあんな死方をしたのを幸福だといふのはあんまり無邪氣過ぎますね。

かよ子 わたし、先生にだけ、打明けてお話しいたしますわ。……精神に異常があつた兄さんが、わたしを幸福にしてやるつて、わたしの喉を絞めようとしたから、わたし、怖くなつて逃さうとして、思はず知らず、兄さんの喉を握へつてやつたのです。御嶽さんの女殺しは誰れの所爲か知りませんが、兄さんの死んだのは、喜多雄兄さんの所爲ぢやないんですわ。わたしのしたことです。

寺濱 かよ子さんはなぜそんなことを云ふんですか。あなたがあんなことをする筈もないし、第一あなたのか細い手で、何で大の男の生命を取ることが出来るんですか。わたし

私に取つては死の恐れを減さない限りは、社會がどんな風にならうとも、眞正の幸福は得られないだらうと思はれる。冤罪で死刑に處せられようとも、正義のために犠牲的の死を遂げようとも、あるひは近親知友に看護され名醫の診察治療を受けた果に温かい病床で眠るが如く死なうとも、死はつまり同じだらうと思つてゐる。

人間の煩悩、執着、愛と憎み、生と死、私は機手して食を得ながら、十年二十年の昔と同じやうに今なほさういふ事を考へては心を暗くしてゐる。當分の喧しい問題でもさういふ人心の現はれとしてのみ私の興味を惹いてゐる。

(文藝野郎の三編巻記下)



安土の春 (三幕)

時代 天正九年三月十日頃

人物 織田信長 村瀬新八 堀内三郎 小四郎 同侍 同女 若菜野月

湖水に近い街道、路傍に松や柳が植ゑられ

てゐる。松や柳も咲いてゐる。旅人の装ひをした四郎三郎(三十歳前後)、荷物をおろして、大きな松の木に凭れて居眠りをしてゐる。

安土城内の侍女、夕月(二十歳あまり)、花野(二十歳以下)、あたりの春景色に見惚れながら、うか／＼と出て来る。

花野 (ふと気づいたやうに、不安らしく) こんにちまで遊びに出てよろしいのでせうか。お天気はよし、あなたのお話があんまり面白いので、ついうか／＼とこんなところまで来てしまつて。わたし、何だか恐ろしいやうに思はれますわ。

夕月 (お轉變らしい身振り) まあ、花野さんのお氣の小さいこと。大丈夫で御座いますよ。上様が御参語になつた竹生鳥は、こゝからは陸と海とで片道十五里もの遠いところぢや御座いませんか。たとひ、上様が草駄天のやうにお願ひ遊ばしても、日のうちにお歸りなされる氣遣ひはありませんよ。それに、羽榮様が

と、わたし、どんなに喜んでか知りませんでした。

夕月 同じ町人でも、このお城下の町人ほど仕合せなもの御座いませんの。(ふと旅人に目をつけて、面白さうに) 花野さま、御覽なさい。この旅商人がいゝ氣持で眠てゐますこと。……わたしたちも此處で休んで、往來の旅の人でも見て、ゆつくり歸ることにはしませう。まだ日は高いし、今日を過ぎたら、いつまた外へ自由に用られるか分からないのでから。

二人は松の木蔭に腰をおろす。旅人は薄目を開けて二人を見る。そこへ眉目美しき村瀬新八(二十歳あまり)の青年、酒酒たる身装をして現はれる。考へ事をしてゐる。

夕月 新八さま、何方へいらつしやいましたか。新八、足を留めて評しに二人を見る。

新八 あなたこそ、此處で何をしてゐなさる。夕月 風は吹かず、花は霞盛りで、ホカ／＼と温かくつて、こない、日和は、一年のうち今日の外にまたとあるもので御座います。新八 それで、お前さまたちは、鬼のみぬ間に

お持受けなされて、賑々とお持出しがあるに極つて居りますから、今夜は、御小姓衆も御一しよに長宿に御逗留ばすだらうと思はれますわ。

花野 昔はさう仰つて、大勢で御安心なすつて、桑貫寺のお師匠様へもお詣りになつたりしたのでせうけれど、留守のうちには氣をつけると、お殿様がお出掛けの時に、大きな聲で岩瀬様にお吩咐けになつた、あのお聲が、わたしには氣になつてなりません。

夕月 それは、あなたが御城内の生活にお馴れなさらないからですよ。わたしははじめのうちは、お上のお聲を模の外で聞いてさへ身震ひしたこともあつたのでせうけれど、馴れるとそれほどでも御座いませんわ。今の時世では、この御城内に住まつてゐるほど安心なことはないのださうです。わたしの叔母は朝倉様に御奉公してゐるために、敗軍の残兵つちりを受けて亡くなつたのださうですわ。今の時世では御成勢のつよい信長公のお側にゐるほど、氣丈夫なことはないと、父がさう申してゐました。あなたもお迷ひにならないで、此方に御幸地なさいましな。

花野 さうは思つて居りますけれど、……生命の洗濯に出なすつたのか。鬼でも、今日のやうな長閑な春風に誘はれると、氣保養がてらの神詣をする氣になるのだから。

夕月 鬼とは？ 新八さまは何故そんなことを仰る。夕月が顔色を變へると花野はおびえた顔をする。

新八 あなたがさう思ひなさらなければ仕合せだ。(口調を變へて) わたしは、今日は愛智川べりをひとり歩いてゐました。花も花だが、堤には若草が萌出て、空には雲雀が鳴いてゐました。わたしは、堤の上に寝ころんで元氣のいい雲雀の聲を聞きながら、目を開けて面白い夢を見てゐたのです。

夕月 面白い夢と仰るのとは？ 新八 あなたは岐卓の若殿様のお供をして、甲州征伐にお出掛けなされる筈ぢや御座いませんか。目醒ましのお手柄をなさるやうに、戰場の夢を見ていらつしやつたの？

新八 ハ、さう思ひたければさう思つてゐなされるが、……わたしは、城之助様にお願ひして安土へ来たのは、この頃、寢ては夢み醒めては思つてゐることを偽し遂げたいと思つたからなんです。ロームとかリスボアと

(春の土)

夕月 それに、上様は、先日京でお馬揃へを遊ばしてから、大變に御機嫌がよろしいんです。竹生鳥からお歸りになつたら、鞍馬太夫をお召しになつて舞を御覽になる手筈になつて、わたしどもまでも見せて頂けるのですから、樂みで御座いますわ。

花野 (ふと元氣づいて) わたしはまだ世間で評判の幸若太夫の舞を一度も見たことは御座いませんの。夕月 同じ太夫の舞でも、外で舞ふ時と、信長公の御前で舞ふ時とは、舞振りがまるで違ふと、お侍衆がよく申して居ります。上様もお氣が向いた時には、御自分で小鼓をお打ちになつたり、女踊りをお踊りになることもありますのですよ。

花野 (微笑して) あのお殿様が……夕月 (向うを見上げて) 此處から見たお城の眺めの立派なこと、御覽なさい。高欄の横濱球が春の日できらめいて……ヤリシタンのお説法で聞いた天國とかは、あんなところぢや御座いますまいか。

花野 はじめて父に連れられて此地へまゐりました時に、丁度この邊からお城を見上げて、あのやうな立派な處に御奉公が出来たら

かは、同じ下界の都でも、安土や岐阜とは違つて、人といふ人は神の子らしく睡り暮らしてゐるさうだ。

夕月 あなたも物好きだ。南殿へお渡りになりたいと思つていらつしやるの？ オルガンチノ和尚様にして、フタテン破天連にして、鬼か獣のやうな身置してゐるぢや御座いませんか。あんな人ばかり住んでゐるところへ、あなたのような柔しい方がいらつしやつたら、頭から食はれてしまひますわ。異人の女子はまだ見たことはありませんけれど、さぞ雲をつくやうな大きな身置をしてゐるので御座いませう。

花野 夕月さま、いつまでもこんな處にゐて、人に見られてはいけませんから、もう歸りませう。旅人の方を氣にする。夕月 え、もう行きませう。眞晝間、街道の真中で新八さまとお話なんぞして。(ふと、氣にしないで立上つて) さう云へば、先日、上様は、新八が岐阜から来たから直ぐに呼べと、岩酒様に御付けになつてゐました。新八 上様がわたしを？(頭を擧げて) わたしのことは、誰れにも云はないやうにして下さい。

新八 ハ、皆なが衣服で脅かされるのだ。前代未聞の馬揃への儀式だつて、大きな虎が袂や袖で着飾つて、小さな虎を引連れて廻るだけのことだ。(獨言のやうに) さう云つてから、親しみをもちた口調で) 世間では何と云つてゐるか知らんが、上様は氣さくな方だ。お前の面つきを一目御覽になつたら、こいつ役に立つ奴だと、餘計な穿鑿をなさらないで直ぐにお召抱へになるかも知れない。さうしたら、お前も羽柴筑前どののぐらゐに出世したいとも限らないな。ハ、ハ、ハ、。旅人 何ほわたくしが世間知らずの山家猿でも、そんな癡人の夢見たやうな大それたことを考へるもので御座いませうか。さつき、ホカ／＼した天道様のお光を浴びて、いゝ氣持で夢を見て居りますと、お女中様のお話のうちに、あなた様は、岐阜のお殿様のお供をなすつて、甲州征伐へお出ましなさるとか承りましたが、若しもそれが本當で御座りますなら、わたくしをあなたのお伴になされて下さいませ。お草履を持つなり、馬の轡を取るなり、何なりと生命をかけて御奉公をいたします。

新八 さうして、虎の威を借りて、自分の生れ

二女出て行く。新八も物を考へながら行きかけたが、ふと、旅人に目を留めて、新八 お前さんは何處から来なすつた？ 旅人 (訊かれるのを待受けてゐたやうに) わたくしは甲州から漆桶をかついで京へ商ひにまゐりまして、これから歸るところなので御座います。新八 甲州者だなどと、大きな聲で云ふものぢやないよ。お前も生命知らずだな。遠州の武田方の高天神の城も徳川勢に攻めまくられて今日にでも落城してゐるかも知れないのだ。甲州征伐の用意は大つびらに出来上つてゐるのだ。陣頼どのがいくらジタバタしても、今となつては、籠の中の鳥も同然なのだ。お前はそんなところへ歸つたつて爲儀がないぢやないか。第一甲州城は、四方八方道といふ道は塞がつてしまつて、歸りたくも無事に歸られまいよ。旅人 (氣樂さうに) いや、それはわたくしもよく存じて居ります。先日、京の町で此方のお殿様のお馬揃へを拜見して居りますと、御にゐて世間話をしてゐた男が、甲州言葉で物を云つてゐましたので、わたくしは懐かしくなつて、故郷の様子をよく訊ねました。その男

故郷を荒らさうと云ふのか。(相手が氣にするのを見て) なに、おれはお前を脅めらんぢやないよ。昨日まで莫大な知行を領けて呉れた主人に、今日は自分の都合で弓を引くの、當世有りうちのことなのだ。それはそれでいいのかも知れないな。しかし、旅人の、武家奉公は、まあ止にした方がよからうぜ。御主君から相應にお目を掛けられてゐるおれでさへ、この大小の人物斬刀は抛出して、戦争騒ぎのないところで暮らしたいと思つてゐるのだよ。土百姓や素町人から、一國一城のあるじと成上つた人を、傍で見ると、あれこそ人の中の人だと羨ましく思はれるであらうが、さて成上つて見ると、さまざまの苦勞があるのだ。あの陽氣な羽柴どのも戰場で、水攻火攻の掛引に智慧を絞るよりは、お上の御機嫌を害なまいと、その屈託に骨身を削つてゐられるのだ。徳川どのも、虎狼の牙齧を避けるためには、徳川の信康どのに無理往生に腹を切らせた。お前も武家奉公なんぞ思立たないで、何處か安穩な土地を見つけ、こつそり生活を立てることにして。あの山に光つてゐる七重のお城も、いつまであま、立つてゐることやら。四日市の濱で見え

は信玄公御在世の頃の御威勢が影も形もなくなつたのに、諦めをつけて、御奉公先から出奔して、いゝ御主人を捜しに京へ来たと申し居りました。わたくしは、親も子も女房もないので御座いますから、世の亂れた危かしい山奥へ、わざ／＼歸つて行かうと思つては居りませぬ。今の世に住めば安土と、世間の人の申ししてゐますやうに、わたくしは、成らうことなら、このお城下で生活を立てて行きたいので御座います。……かう申してはあまりに不しついでお叱りになるかも知れませんが、あなた様のお屋敷でも使つて頂く譯にはまゐりますまいか。どんな御用を御付けになつても、骨身を惜まないで御奉公をいたします。新八 おれなどを主人と認んでは出世する見込みはないよ。上様にお仕へ申したらよからう。お前は身置ももしつかりして、くせありさうだ。戰場へ出て役立ちさうだな。(相手をよく見る) 旅人 御威勢の強い此方のお殿様にお目通りいたすのは恐れ多い御座います。お馬揃への折のお姿を一目拜見しただけで、目がつぶれさうに思はれました。

三郎 新八どのの此方に、来てゐられたのですか。キリシタンの學校の建築も大分抄取つてゐるから、それを見にお出でなされたのですか。建築が落成したら、あなたは御入學なさるのであらうと噂をいたして居りました。

新八 安土にセミナリオが建つたら、早速入學して異國の學問を修業したいと思つて、城之助様にお願ひしてゐたのだが、それはもう止めた。わたしは大家を胸に持つて、岐阜から出て来たのだが、……そんなことをあなたに話しても爲方がないな。……それよりも、此處にゐる旅の人は奉公口を捜してゐるのだが、あなたは、お世話しておやりなさらぬか。

三郎 いや、この頃は諸國からいろいろな奴がやつて来る。今に安土から八幡へかけて、野にも山にも、人間がウジャ／＼するやうになるであらう。(旅人を見詰めて) しかし新八どの、この男はたゞの商人ではありますまい。油斷のならない面をしてゐる。

新八 たゞの商人でも、何處かの落武者でも、どちらでもない、ではないか。

三郎 淺井か朝倉の殘黨が、旅商人に姿を盡して、信長公を附狙つてゐると思つて見ると

一興だが、(刀を抜いて、旅人の前へつきつけて) 貴様は亡君の恨みを晴らさうと企んでゐるのか。

旅人 これは飛んでもないことを仰せられます。(警戒しながら) こちらの旦那様は、わたくしの身の上をよく御存じなんで御座います。

新八 (笑つて) 心配するな。誠だ。……(旅人や景清のやうな男は昔、中の人物ぢやないか。しかし、それだから、上様もお仕合せだ。死んだ主人の恨みを返したい男があちらにも此方にもあつた日にや、信長公が首を百も持つてゐられなくても足りぬからぬだ。……三郎どの、曾かしはもうお止しなさい。

三郎 わたしはこの土地にすつ込んでゐたため、暫らく血のにほひを吸がなくなつて退屈してゐたのです。春の目をノラリクラー遊び暮らしただけで、このまゝ、屋敷へ歸つちや興がないと思つてゐたのだが。(刀を鞘に収めて) 新八どののお言葉がなかつたら、斬り殺すのする此奴を見のがしてなるものぢやない。

旅人 わたくしは決して近敵た者ぢや御座いません。どうぞお許しなすつて下さいまし。

旅人は二人に向つて、恭しく挨拶して、荷物を背負つて急ぎ足で出て行く。

新八 可哀想に。(旅人の後を見送つてゐたが、何かを見つけたやうに當惑する)

三郎 春の目長に毎日因循としてゐちや退屈でなりませんよ。武田征伐には是非ともお供しようと思つて居ります。

新八 (侍女若菜二十歳ばかり) が道を急いで入つて来て、二人の青年と顔を見合せ

新八 若菜どのはお一人で、どこへ行つてゐたつた? 今日若菜が供をも連れないうで、よく出歩いてゐるから驚く。

三郎 天下泰平の目出度いしるしでせう。それに、今日はお上の御不在をい、沙時にして御城内も奥御殿はガラ空きで、御女房たちも山をお下りなさらぬまでも、二の丸までお出でなされて、春の目を楽しんで居られます。

若菜 わたくしは、昔様と御一しよに桑實寺へお詣りしてゐました。只今、長老様が皆様のために御説法をなすつていらつしやいます。わたし、何だか聞きづらく思はれましたから一人でそつと聽聞の座を脱出してまゐりました。

新八 それでは、あの梅十坊主が、徹夜し佛の道を説いて、廻らぬ舌でキリシタンの毒口を利用してゐたのだな。若菜どのもなぞ桑實寺などへお詣りなされた? 先日のおたよりでは、オルガンチノ様のお導きで、まことの道が誰に分りかけたと云つてゐられるではないか。それを、わたしはどれほど喜んでゐたか知れないのに。

若菜 わたくしの心が痛う御座いました。……わたくし、外の方のやうに、氣保養にお寄るりをしてゐたのでは御座いませぬ。新八さまは若殿様が御存じなつて、甲州の征伐にお出でなされると、皆さまがさう仰存つてゐましたから、お身體にお怪我のないやうに、人に傳れたお手柄をおあげ進ばすやうにと、一心にお祈りしたので御座います。

新八 (にが／＼しげに) 若菜どのは何を云はれる? 古い木の林や石ころで作つた佛に祈つて御利益があると思つてゐられるのか。愚なことだ。

三郎は二人の睡む様子を見まじげに見てゐる。

若菜 長老様のお説法を、承つてゐるうちにふとわたくしの迷ひに氣がついて、急いで逃

げてまゐりました。どうぞ御怒して下さいまし。

新八 それに、わたしは、戰場へは行くまいと思つてゐるんです。春の光のやうにまことの神の光に包まれてゐる國をたづねて行きたいと思つてゐるんです。

若菜 それはどこで御座いますの?

新八 ……ローム、リスボア、ヴェネチヤ。(あこがれてゐるやうに云ひ) 高麗大明天竺よりも遠いところで、女子などの行けるところぢやないんです。

若菜 (悲しさに) たせ、さういふところへいらつしやいますか?

三郎 新八どのの南蠻へお渡りにならうと思つてゐられるんですか。上様の天下統一の大事業を見ようとはなさらないで……

新八 (こゝへ、御田信長四十八歳。黒い南蠻笠をかぶり、唐様の服装にて虎の皮の向はぎを腰に當つ) 駿馬にまたがつて氣をせはしく入つて来て、若菜と新八とを見ると、馬を留める、三人は愕然として、匂ひつくばふ。

信長 (眉を擧げて) 女郎は此處へ何しに來た? 新八、うぬも、おれの日通り許さぬさまに、

どんたけしてこの街道をほついでゐた? ……どいつも面を上げる。

三人は恐る／＼顔を持上げる。

新八 今朝参着いたしました。上様は御他出と承りました。

信長 それで女郎を引張出して、氣儘な遊びをしてゐるのか。

彼れはつか／＼と新八の側へ寄つて、鞭を上げて、その顔を打つ。

新八 (痛みを忍びながら) 若菜どのの桑實寺へ参詣せられて、只今偶然此處で行合ひましたので御座います。

信長 なに、桑實寺へ?

三郎 大奥の方々が御捕ひで桑實寺へお詣りになつて居ります。

信長 不埒至極だ。三郎、其方はこれから桑實寺へ行つて、一人残らずふん縛つて來い。坊主どもが留立てしても容赦するな。急いで行け。……此奴等二人はおれが此處で成敗する。三郎は、ハツと答へる間もなく、一さんに、後を見ずに驅けて行く。

信長は馬から下りるや否や、刀を抜いて、すでに半ば死んだやうな若菜をさまに、新八をも、大根でも切るやうに斬倒す。

斬られると同時に、「ジエス、キリスト」と呼ぶ新八の哀切な聲が聞える。信長その聲に耳を留めてあたりを見廻す。そして、刀にしたいる血汐を振つてゐるところへ、かの旅人が、松の木蔭から恐る／＼近づいて、死體の上衣を取つて刀を拭はうとする。

信長（聲に心惹かれてゐた彼れも、ふと旅人に氣づいて）誰れだ？

旅人 御奉公いたしたいと存じまして、上様の御歸城をお待受申して居りました。

信長 さうか。……死體を片付けて後から隨いで来い。

そこへ、二三人の小姓、馬に跨つてへとくになつて入つて来る。

信長 オ、源吾、七之丞、急いでおれより先へ歸つて、城外へ遊びに出てゐる女子どもをふん捌まへて、殊數つたぎにく／＼つて置け。……（獨言のやうに）こんなことがあらうと思つて、長濱の要應を打ちやつて、馬を飛ばして戻つて来たのだ。

(二)

安土城内、信長の居室。襖には飄箏から胸の出た繪が描かれてゐる。

源吾 ハイ。……上様のお姿を見失つてはならないと思ひまして、無我夢中で歸りました。

信長 おれもやがて五十になる筈だが、まだ若い時分と異はないよ。今日は一つ根氣だめしと思つて、十里の道を二息にやつつけたが、左程に疲勞もしなかつた。二十年前に桶狭間へ駆けつけた時のことが思ひだされる。

七之丞 わたくしも無我夢中で駆けましたから、何處の村であつたか、見分けはつかないの御座います。百姓共が大勢で、血みどろになつた子供を抱へて歸りました。

信長 それでは、あの子が上様の御乗馬の蹄をお汚し申したので御座いますか。

源吾 人間は醜いものだ。……ちよつと感傷に打たれたやうに云つて、小姓に酌をさせて。

おれが長濱泊りを止したために、其方たちは御馳走を食べ損つて残念であらうな。秀吉のことだから、氣の利いた料理を拵へて待つてゐたであらうのに。……そのかばり、このおれの膳の物を願つてやらう。

信長は箸を取つて、皿の肴をばさんで、源吾に突きつける。源吾は、恐縮してゐる。

七之丞 わたくしどもは、後ほど御膳部のお俵りを頂戴いたしたう存じます。

信長 馬鹿な奴だ。さあ手を出せ。小笠原流とかの禮儀作法を心得てゐるつもりか。馬鹿め。人間が食ひたくつて食ふのに儀式も作法もあつたものか。おれが許す。肴を掴んで食べ。

恐る／＼差出した二人の手へ、肴を與へる。二人は誰しやかに食べる。

信長 將軍らしく、公卿らしくと、酒を飲むにも氣取つてゐた奴等は、おれの馬の蹄にかけると、今日長濱街道で踏潰した鯨魚見たいなものだ。

そこへ、三郎が入つて来て不伏する。

三郎 仰せつけ通りに、桑實寺詣りの御女房たちを、召捕つて御城内へ連れて、歸りました。

信長 中庭へ出して、一人残らず首を打て。

三郎 かしこまりました。……あの、桑實寺の長老様が、お願ひの筋があつてお目通りいたしたいと、お次の間に控へて居りますが、いか取計ひませう。

信長 枯木のやうな坊主に會ひたくはないが、来てゐるのなら、ちよつと會つてやらう。そこへ酒を出せと云へ。

三郎 ハイ。

三郎が行きかけると、

信長 坊主にはかまはずに、其方は早速女郎どもの成敗に取りかかれ、一刻も猶豫はならんぞ。

三郎 仰せつけ通りにいたします。

三郎、出て行く。

信長（小姓達に向ひ）其方どもも腕試しがしたければ、三郎の手助けをして、罪人の首を斬つて来い。

源吾（五） ハイ。……答へただけで座を立たない。そこへ、老僧が珠數を手に入つて来ようとする。

信長 そこでよい。用事を聞かう。

老僧 襖の外で平伏する。

老僧 上様のお慈悲をお願ひ申したう存じま

す。

信長 それはならぬ。重ねて申すな。

老僧 せめて、若様のお生命だけはお助け下しますやう、愚僧の身にかへてもお願ひ申します。

信長 くだく云ふな。

老僧 若さまは、上様の御武運を佛に祈願してゐられました。その心根をお取り遊ばして。

信長 タハケたことを申すな。おれの武運が木の石に對んだ佛と何の關係がある？ おれはおれの方で、手向ふ奴を片づけしから御代して来たのだ。其方たちに現世の勝利や死後の冥福を祈つて貰はうとは、夢にも思つてゐないが、其方にはまだ分らぬのか。うつけ者め。

老僧 愚僧の身につきましては兎に角、……上様も竹生島へ御參詣遊ばした當日で御座いますから、か細い女性の方々を御成敗遊ばすのはいかゞかと存じます。

信長 何だ／＼、おれに意見するのさ。おれは怒りたければ怒り、斬りたければ斬るのだ。それがどうしたといふのだ。

老僧 左様なれば、罪をお恕しなさりたく思召

してお想し感ばしますやうに。

信長 くだい。……それほど女郎どもを庇ひたければ、其方も一しよに冥土へ行つて、穢業へでも淨土へでも、勝手なところへ連れて行け。……源吾、この坊主を引立てて、三郎の手を渡して首を打たせる。おれの日ははりだ。早く引立てろ。

源吾 直ちに立つて行つて、老僧を捉へる。

源吾 御上意だ。お立ちなされ。

信長 邪僧に老僧を引張つて出て行く。

信長（ふと耳を留めて）七之丞、あれを聞け。中庭から泣喚く女子の聲が聞えこ来るではたいか。……人間は醜いものだ。……蓋を口にしながら前へ出て出して、酒がぬる／＼つた。温めて来い。

七之丞、出て行く。信長、何かの聲を辨ひのけるやうな態度をする。

信長（獨言）新八ももうこの世にはゐないのだな。人間は醜いものだ。

そこへ、源吾、入つて来る。

信長 坊主は三郎へ渡したか。

源吾 たしかに三郎どのへお手渡し申しました。

信長 あんな枯木のやうな坊主は、斬つても血

は用いた。  
源吾 柴田修理亮様が只今参着いたされまし  
た。明朝お目通りがかなひませうかとお訊  
ねになつて居ります。

信長 (喜んで) 修理亮が来たつ。丁度いふと  
ころだ。直ぐに呼べ、...それから膳部は一  
先づ次の室へ下げて、其方達はおれが呼ぶま  
でそちらで休息しろ。

源吾、膳部を持って出て行く。  
信長、長押から槍を取下して、幾たびかし  
ごく。

そこへ、柴田勝家五十二歳、無骨な身軀が  
小姓に導かれて入つて来て、槍の手ごみ  
に感心しながら座に就く。

信長 よく来た。(槍を収めて) 近う寄れ。今  
まで京で遊んでゐたのか。  
勝家 上様の御威光をもちまして、京の町も語  
話になりまして、此たびは、罷出ました  
大手に、神祇傳聞名所古跡の見物をしたま  
した。それよりも御馬揃へのお催しは前代未  
聞言語に絶した御盛況で、老後の思出、こ  
れに過ぎたことは御座いません。上様の御威  
光によつて、天下がかやうに泰平に相成りま  
しては、わたくし如きは、もはや御馬前の御

奉公をいたす場合もなくなりました。先日拜  
領いたしました城口の釜に湯を沸かし、北  
國の遊覧でも眺めて、この年までの手柄話で  
も若武士に聞かせることにいたしました。

信長 ハ、其方は愚直だから、そんなこと  
を云つてゐられて気が楽だ。何が天下が治ま  
つてゐる?

勝家 高天神はまだ開城いたしませぬか。  
信長 いや、昨日家康から早打を寄越して、あ  
の手強い城も今日か明日かの生命だと知らせ  
て来た。あの城が潰れたなら武田四郎も我を  
もがれた小島同様の。あの武田の小作など、  
おれは最初からさして心に掛けてはゐない  
のだが、中國の毛利勢には一骨折らされさう  
だ。四國には長曾我部がある。九州には島  
津が居る。腹に一物ある高野の坊主どもの始  
末も何とかしなければならぬ。(魚込むま  
うに云つて) 北國の豊勝などは其方に任せて  
ゐても安心だが...

勝家 上様もお心算うおなり遊ばしましたな。  
(微笑する)  
信長 何だ。

勝家 今日の上様の御威勢では、毛利如きは春  
の日に照らされる砲臺のやうなもので御座  
るが、淺はかなものだ。...おれは伴天連の説  
法はたび／＼聞いた。...聞いてみると、おれ  
はそのジースといふ異國の神と角力を取つ  
て見たくなつたのだ。異國の神の前に俯ひつ  
くばつてお慈悲を願ふなんて以ての外だ。  
勝家 それはわたくしも御同意申上げます。  
角力なら、わたくしとても異國の神と取組ん  
で負けることちや御座いません。(快げに笑  
ふ)

信長 (快げに笑ひ) おれも今日はおかど夢  
話をしてしまつたな。...さうだ。明日は其  
方が歸國いたすのなら、別れに何か御馳走し  
よう。温かい春の竹だ。誰れかに舞はせて見  
せようか。  
信長 膳部を手をたく。源吾、入つて来る。  
信長 膳部を調へて来い。修理亮にも相伴を

りませぬか。(獨言のやうに) 舞臺め、幸  
福な男だ。中國征伐を一手に引受けやが  
つて。  
信長 筑前には筑前の役目があるのだ。其方は  
おれに代つて北國を押へてゐて呉れ。(勝家  
の顔を見詰めて) つい忘れたが、修理亮は今  
年幾歳になる?

勝家 五十二歳に相成ります。  
信長 さうだつたな。おれも人間の定命が近  
くなつたのだ。

勝家 でも、上様は十年の昔と今日と少しもお  
變りにならないちや御座いませんか。わたく  
しなどはこの通り頭が白くなりました。...  
でも、元氣だけは昔と變らないつもりで御座  
います。

信長 おれも元氣だけは、今時の若い奴等には  
負けないつもりだが、年齢は年齢だ。おれも  
夢知りの世の中に、五十間近まで無事に生き  
て来たのだが、年齢のことを考へると、何と  
なく氣が焦かれる。毛利や長曾我部をわが  
膝の前に俯ひつくばはせるのは、あと一年か  
二年か。おれが定命に達するまでには日  
本統一の大業も略日鼻がつくと、おれは信じ  
てゐる。...しかし、修理亮、このことは今日

させるのだから、その用意を吟附けて来い。  
それから酒興を助けるやうに踊り子をも呼  
べ。三郎はどうした? 死體の後片付は他の  
者にまかせて、直ぐに此方へまゐれと云へ。  
骨折質に東柴田の酒の相手をさせて武勇にあ  
やからせてやると申傳へよ。  
源吾、出て行く。  
勝家 御城内に何か變事があつたので御座い  
ますか。  
信長 なに、些細なことだ。其方などに話すほ  
どのことでもないよ。  
勝家 今日御城内は何となくお淋しいやう  
では御座いませんか。  
信長 この頃の京の町の賑ひを見た目には、安  
土の町はいくらか淋しく見えるのかも知れな  
いな。淋しいと云へば、おれは何ぼ歳を取つ  
ても、樂居して公家業のやうに歌でも作つ  
ても、泰平を樂しむ氣持にはなれないよ。一日  
でもちつとしてると氣が減入つて来る。今日  
も長濱から竹生島まで五里の海上が退屈でた  
まらなかつた。小波も立たない鏡のやうな湖  
水は、見てゐて退屈なものだ。龍巻でも起  
ればいふと思はれたよ。だから、南蠻の坊主  
どもが、世界のはてから萬里の波濤を凌いで

はじめて其方に話すのだが、おれは日本統一  
だけで満足は出来なくなつてゐるのだ。高麗  
や大明に馬を駈けてゐる夢を、おれは毎夜の  
やうにこの頃見てゐるのだ。  
勝家 (驚いて) では上様は、御馬揃へを異國の  
都で御催しなされたので御座いますか。  
信長 異國と云つても、高麗だけではない、明  
だけではない。先日愛智川べりへ鷹狩に行  
つた歸りに南蠻の寺へ寄つて、伴天連どもの  
異國話を聞いたので、ひどく面白い思ひを  
したので、その時から、南蠻の國々をも残  
らず、おれの手のうちに収めたくなつたのだ  
よ。

勝家 (呆れて) わたくしには、南蠻の國々は、  
佛者の説かれる十萬億土と同様な遠い處にあ  
るやうに思はれます。  
信長 遠くも近くも下界の中にあるのぢやない  
か。

勝家 わたくしども雪の中に埋つてゐる田舎武  
士は、異國のお宗旨は薄氣味が悪いやうに思  
はれますが、上様には御信心遊ばすので御座  
いますか。  
信長 日本の佛も異國の神も、おれに信心が  
出来ると思ふのか。しかし其方も明日にも伴

天連に會つて聞いて見る。南蠻の坊主どもの  
話は、日本の坊主どもの古くさい話よりや、  
どれほど面白いか知りやしないぜ。  
勝家 城之助様や三七様をはじめ、當地の若い  
方たちは、伴天連のお宗旨に凝つてゐらせら  
れると承りましたが、それは本當で御座い  
ますか。  
信長 若い奴等は直ぐに珍らしいものにかぶれ  
るが、淺はかなものだ。...おれは伴天連の説  
法はたび／＼聞いた。...聞いてみると、おれ  
はそのジースといふ異國の神と角力を取つ  
て見たくなつたのだ。異國の神の前に俯ひつ  
くばつてお慈悲を願ふなんて以ての外だ。  
勝家 それはわたくしも御同意申上げます。  
角力なら、わたくしとても異國の神と取組ん  
で負けることちや御座いません。(快げに笑  
ふ)

信長 (快げに笑ひ) おれも今日はおかど夢  
話をしてしまつたな。...さうだ。明日は其  
方が歸國いたすのなら、別れに何か御馳走し  
よう。温かい春の竹だ。誰れかに舞はせて見  
せようか。  
信長 膳部を手をたく。源吾、入つて来る。  
信長 膳部を調へて来い。修理亮にも相伴を

信長 膳部を調へて来い。修理亮にも相伴を

りませぬか。(獨言のやうに) 舞臺め、幸  
福な男だ。中國征伐を一手に引受けやが  
つて。  
信長 筑前には筑前の役目があるのだ。其方は  
おれに代つて北國を押へてゐて呉れ。(勝家  
の顔を見詰めて) つい忘れたが、修理亮は今  
年幾歳になる?

勝家 五十二歳に相成ります。  
信長 さうだつたな。おれも人間の定命が近  
くなつたのだ。

勝家 でも、上様は十年の昔と今日と少しもお  
變りにならないちや御座いませんか。わたく  
しなどはこの通り頭が白くなりました。...  
でも、元氣だけは昔と變らないつもりで御座  
います。

信長 おれも元氣だけは、今時の若い奴等には  
負けないつもりだが、年齢は年齢だ。おれも  
夢知りの世の中に、五十間近まで無事に生き  
て来たのだが、年齢のことを考へると、何と  
なく氣が焦かれる。毛利や長曾我部をわが  
膝の前に俯ひつくばはせるのは、あと一年か  
二年か。おれが定命に達するまでには日  
本統一の大業も略日鼻がつくと、おれは信じ  
てゐる。...しかし、修理亮、このことは今日

来た話を聞くと、おれの心が湧立つのだ。勝家 上様にお目通りいたすたびに、勝家の全身にも活気が湧いてまゐります。

そこへ、三郎が入つて来る。

信長 罪人どもの首は斬れたか。

三郎 仰せの通りいたしました。御座います。死體は右近のお計ひで、御新参の四郎兵衛どのなどに運ばせて、桑實寺へ埋葬いたすことにいたしました。

信長 左様か。(軽く首づいて) さつきから其方に訊ねたいと思つてゐるが、新八と若菜とは云ひかはした仲でもあるのか。隠さずに云つて見ろ。

三郎 わたくしはよく存じませんが、今日の二人の話で聞いて居りますと、二人の間には何か譯があるやうにも思はれました。

信長 おれもあの時、咄嗟にさう訊んだのだ。二人はどんなことを云つてゐたか、修理亮への御馳走に話して聞かせたらどうだ。今時の若い男女の戀話は、おれや修理にも皆目見當がつかないのだよ。

勝家 新八とは村瀬左門の遺子のことか御座いますか。

信長 さうだ。城之助がおれにないしよで引

立ててゐた奴だ。

勝家 文武兩道に傑れてゐると、承りましたが、その若者は御城内へまゐつてゐるので御座いますか。

信長 おれが城之助に命じて新八を呼寄せたのは、戰場へ引連れるためではなかつた。新八には教盛の舞を舞はせたかつたのだ。あれが舞つたなら、おれが鼓を打つてつかはしたのに。幸若大夫や清洲の友間は、いつ舞はせても舞はうまいが、新八なら、教盛が生れか

はつて眼前に現はれたやうであらうな。

勝家 新八どのの舞も勘能なので御座いますか。

信長 知らなければ習はせる。教盛の舞なら太夫の手をかるまでもない、おれが傳授してやる。三郎、其方のまづい面では、半若にも教盛にもなれない。人の戀話を指をくはへて立聞きしてゐるのが相應してゐる。(嘲笑をもらす)

勝家 武士たるものは顔形などどうでもよろしいでは御座いせんか。三郎どのも、上様へさうお答へなさい。

信長 修理は自分の身に引くらべて、左様なことを云つてゐる。其方も大勢の美女や少人を

のお取做しで罪を許して、おれの臣下に加へてやつた。それが今では織田家第一の忠臣になつてゐるのだから不思議ではないか。三郎、其方たちはまだ若いから知るまいが、これが世の中だ。おれが強かつたからだ。おれに力があつたからだ。おれの力にヒマが入つたら、おれも最後だ。おれの足許からでも敵が飛出して来るのだ。

勝家 若い昔のことを仰せられてはわたくしの身體にも冷汗が流れます。大罪はお許し下された上に、三十年の間、須彌大海にもたとへられぬ御恩を蒙つたわたくし、未來永々、弓矢八幡、日本はおるか、南蠻の神にまで誓をかけ、上様に忠勤を怠ることは御座いませぬ。この勝家を筑前などと御同様に御覽遊ばされては、勝家も御恨みに存じます。

信長 舊弊な臺詞は止めにして、おれは誓言はきらひだ。たつて誓ひたければ、織田信長にかけて誓へ。佛も神も踏みこじつた信長の力にかけて誓へ。力のあるうちは神と角力の取れる信長だ。力の衰へた信長は、羸人形の内大臣だ。鳥おどしにしきやなりやしないよ。ハ、ハ、ハ。室町の案山子將軍の喜びさうな臺詞は止して、今夜はうんと飲め、おれ

弄んで来たのであらうが、當世の若い男女のやうな、まことの戀の情は知らないだらう。

勝家 これは異な事を仰せられる。勝家とても戀の口説は身に染みて心得て居ります。

信長 これは面白い。話して見ろ。鬼柴田の戀物語は面白い。

そこへ、小姓たちが酒肴を運ぶ。

信長 昔な聞けよ。殿軍にかけては天下に類のない鬼柴田が、戀物語を聞かせてくれるぞ。

勝家、小姓をして勝家に酒をすゝめさせる。勝家、飲飲す。

勝家 (生眞面目で) まだ三郎どのくらゐの若さで御座いました。はじめて上洛いたしました時、供をも連れず、吉田山あたりを遊び歩いてゐましたところ、上様とは思はれませぬ女房が、白練の肌着に平絹の袴を裾短くつけて、薄色の短冊をさげて、小童を一人連れて宮司の家へまゐるのを見つけました。あまり床しく思はれたので、その女房のあとを随けてまゐりますと、女子の方でも艶いた目でわたくしの方を見返りました。わたくしは目はまばゆく脚は騒いで、心も空になりました。流石は京の町だ、那古野や清洲の田舎

が的をしてやらう。酔つて槍踊りでも踊つて見せろ。

信長、勝家に酌をする。勝家、感謝して受けて、快く飲干す。

勝家 冥加にあまるお持成しのお禮として、わたくしが無様な舞の手振を御覽に入れます。踊り子たちの支度の出来るまでのお座興として御覽下され。

勝家、立つて讀ひながら舞ふ。

「この世はつねの住家にあらず、草葉に置く白露。水に宿る月よりなほあやし。人間五十年、化轉の内をくらぶれば夢幻の如くなり。一度生を受け滅せぬものあるべきか。これを菩提の種と思ひ定めざらんは口惜かりき次第ぞと。」

信長、感に堪へ恍惚として見てゐるが、ふと、

信長 そこで止める。それで十分だ。

勝家、舞を止めて平伏す。

勝家 見苦しきものを御覽に入れました。

信長 いや面白かつた。其方がかやうな隠し戀を有つてゐようとは思ひもつかなかつた。

勝家 上様の教誨の舞を見やう見真似に覚えましてので御座います。

信長 (恍惚として) 人間五十年、化轉の内をくらぶれば夢幻の如くなり。(と語つて) 一たび鞍を上げると、百萬の馬を集めることの出来るおれも、明日とも云はず、今夜のうち誰れかに寢首を振られぬともかざらないのだ。(と云つて、座中をじろりと見渡して、三郎に目を留め) 三郎、其方たちは修理亮の舞を見せられたのであらうが、おれは新八の教誨の舞を見てゐたつもりだ。其方はあの時、なぜ新八と若菜とおれの目から遮らなかつた。新八は其方を恨んでゐるぞ。人の寢首でも振きさうな面をしてゐやあがつて。

信長は、さう云ふや否や、つと立つて、長押の槍を取りおろし、

信長 この鋒先を、除けられるなら除けて見る。其方生死の境だ。  
三郎 御免遊ばせ。上様の御馬前討死いたすまで、三郎の生命を三郎にお預け下さいませ。  
信長 よく云つた。今夜は許してやるから、勝家にあやかつて、戦場で功名をしる。

勝家 (不思議さうに) 新八どのはどうかしたので御座いますか。

信長 あの男はもうこの世にはゐないのだ。人間は賤いものだな。  
勝家 (合點の行かぬらしく) 御意に御座います。  
信長 (小姓たちに向ひ) 今夜は踊りは止めるから、さう云つて来い。勝家の舞だけで澤山だ。

(三)

その翌日の早朝、  
城内の庭園の一部、  
四郎兵衛、仲間男らしい新しい服装をして、庭を掃いてゐる。  
そこへ、三郎が出て来る。  
四郎兵衛 お早う御座います。  
三郎 お前こそ馬鹿に早く起きて働かやないか。忠實な働き振りが上様のお目に留つて、今に出世するだらうよ。  
四郎兵衛 わたくしなんぞ、大した望みは持つてゐやしません。寒い思ひ、ひもじい思ひをしないで、今日がおくれれば、それで満足して居ります。

三郎 口先ではそんなへり下つたことを云つてゐても、腹の中では、天下を望んでゐるんだらう。しかし、お前は運がよかつた。昨日い

いところで上様のお目にかゝつて。  
四郎兵衛 さう思つて喜んで居りましたが、何だか寢首めが怒う御座いますよ。あの時新八さまとかは、わたくしに親切に御意見を聞かせて下さつた上に、わたくしがすんでのことにあなた様は生命を取られかけたところを助けて下さつたのですから、わたくしに取つてはあの方は大恩人なので御座います。その大恩人が、どういふ罪があるのか存じませんが、上様のお手打になつたのちや御座いませぬか。  
三郎 本心からさう云つてゐるのか。どうも眞に受けられないよ。おれが刀を突付けて脅かした時に、お前は上へだけは驚いた風をしてゐたが、腹の中は泰然自若としてゐた。おれはお前の度胸を見届けたつもりだ。  
四郎兵衛 ハ、それは、今の時世に、刀や槍の光に目が眩むやうや生きてゐられませぬからな。しかし、今夜はあんな怖い脅かしは、眞平御免蒙りますよ。  
三郎 昨日の無禮は謝るよ。おれも街道でお前

に會つた時には、血のほひに濡れてゐたのだが、天龍殿面、いやな首斬役を仰付かつた上に、自分の土手つ腹まで、槍の穂先で抉られようとしたのだ。それで、昨夕は變な夢に襲はれ通したつたが、朝の冷つこい風に當ると、おれの頭もややく自分の頭のやうになつた。あ、何處かで、鶯が鳴いてゐる。  
四郎兵衛 今日もお天気が御座いますな。此處から湖水を眺めますと、槍のやうに思はれます。  
三郎 たとひ槍のやうでも、おれたちは此處の生活には馴れてしまつた。あいたのは今日にはじまつたことぢやないが、今日は格別お城住ひがいやになつたよ。  
花野 三郎を呼べと、お寢間のうちで仰せられたさうです。  
三郎 早朝わたくしに御用のあつた例はなかつたのだが、(訝しげに思ひながら入つて行く)

花野 (四郎兵衛に近づいて) あなたは昨日街道で荷物をおろして居眠りをしてゐた方ぢやありませんか。  
四郎兵衛 左様です。あなたが今一人のお方とお話をなすつていらつしやるのを、居眠りをしながら、い、氣持で、承つて居りました。  
花野 あの時の旅の方が御城内に御奉公をなさうとは思ひませんでした。  
四郎兵衛 昨日のお連れの方も此方にいらつしやるんで御座いませうな。  
花野 (親しさうに) それが、わたしたち二人とも任合せだつたのですわ。皆様と御一しよに桑實寺にお詣りしないまでも、あの街道で、もう少し長く休息してゐたなら、若菜さまと同様な、恐ろしい目に會つたのに違ひありませんの。  
四郎兵衛 ほんたうにあなたはお任せで御座いました。若菜さまとかはあんなにお美しくつて、お歳も若くつていらつしやつたのに、おいたはしい目にお會ひなされたが、でも、戀しい方と御一しよにお手打になつたので、からお心残りには御座いませぬまいよ。  
花野 それでは、ほんたうに新八さまは若菜さまと隣じいお話をしていらつしやつたんで

せうか。夕月さまはじめ、お知合ひの方は、それはまことか空言かと、疑つていらつしやるんですけれど。  
四郎兵衛 いや、わたくしは松の木蔭で、すっかり立聞きをいたしましたから、よく存じて居ります。(興に乗つて) 天が裂け地がわれでも、二人の仲は變らぬと云つてゐました。眞善間街道の眞中であゝいふやうなお噂じい様をお見せになつては、上様が御立腹遊ばすのは御無理も御座いませぬまい。  
花野 (昂奮して) そんなはしたないことを云つて、何方かのお耳に入つちや大變ですわ。あなたのためにならないからお憤みなさいよ。  
四郎兵衛 恐入りました。でも、新八さまはわたくしどもでさへ惚々するやうなお美しい方で御座いましたな。お姿が美しいばかりではなくつて、お氣立ては優しくつて武藝もお出来になるに違ひない。上様のなされ方もあんまり無慈悲ぢや御座いませぬか。  
花野 さう思ひなされるのなら、あなたは何故この御城内に御奉公をなすつたのですか。  
四郎兵衛 食へないからでさあ。(投げ付けるやうに云つて) 明日の日お上の氣紛れで、首が

明から隠れようとも、今日食へなきや困りま  
すからな。いや、危い御渡りだ。  
花野 たゞ御飯を頂くためだけの御奉公なら、  
こんな恐ろしいところにゐなくつても、よま  
さうに思はれませうけれど、あなたがおぼん  
たうにその氣でゐなさるなら、今夜にでもわ  
たしを連れて兩親の家へ送届けて下さいま  
せんか。兩親は京の町外れで豊かに暮らし  
てゐるので、あなたに相當のお禮はい  
たしますわ。

四郎兵衛 飛んでもないことを仰有る？ わた  
くしばかりではない、あなたやあなたの御兩  
親がどんなお咎めを受けるか分りません。  
彼れは、あたりに目を注いで、花野には取  
合はないやうにして掃除に取りかゝる。  
そこへ、夕月が入つて来る。

夕月 花野さまはそこで何をボンヤリ考へてい  
らつしやるの？  
花野 何も考へてやしませんわ。  
夕月 危い生命を助かつたらばこそ、今日一日  
でも、こんな美しい春景色が見られるのぢや  
ありませんか。三郎さまも昨日のお手柄  
の御褒美に、上様から何か拜領なさるのです  
つて。

花野 三郎さまはどんなお手柄をなすつたので  
せうか。  
夕月 それは桑實寺参詣の方をお召取にいらつ  
しやつて、首斬役までも首尾よくお勤めなす  
つたからぢやありませんか。  
花野 武士衆の上様への御奉公は、そんなこと  
なので御座いませうか。昨夕中庭から聞えて  
来たあの氣味の悪いなり聲が、三郎さまの  
お手柄になつたのでせうか。不慮は陽氣だつ  
た桂木さまや朝霧さまの、今際のお聲は、わ  
たしの耳に染みついて、何時までも離れませ  
んわ。夕月さま、どうぞあなたから岩淵  
様へお願ひなすつて、わたしがお暇を頂い  
て、兩親の家へ無事に歸られますやうにして  
下さいまし。(歎願する)

夕月 (呆れたやうに) お氣の弱いにも程があ  
る、あなたがお手打になるのぢやなし、  
取越苦勞をなさらなくつてもいゝぢやありま  
せんか。今の時世では、あなたの御兩親の  
お家よりも、この御城内にゐた方がどれほど  
安穩であるか知れないんですわ。日本の内で  
も、信長公のお城だけは、敵に攻められる氣  
遣ひはないんですから。  
花野 あなたは御親切にわたしに力をつけて下

さいませけれど、わたしはどうしても恐ろし  
くつて、よく晴れた春の日も暗闇のやうに思  
はれますの。そこで鳴いてゐる聲の聲も昨  
夕の中庭から聞えた氣味の悪い聲のやうに思  
はれますの。(恐怖に震へる)

夕月 あなたはそんな聲を正直にお聞きにな  
るからいけないの。わたしなんぞ、兩手で耳  
を隠へて、いやな聲を耳に入れないやうにし  
てゐるんです。さうすれば、大風の吹通つた  
あとも同様になるんですもの。  
四郎兵衛、さつきから暮の手を休めて、二  
人の方を見てゐたが、  
四郎兵衛 昨夕は御奉公はじめに、大勢様の死  
骸の跡片付をされましたが、これぢや武家  
奉公も隠亡のやうで御座いますな。新八さま  
の仰有つたこともほんたうだ。  
夕月 新八さまはどんなことを仰有つたの？  
四郎兵衛が何か答へようとしてゐるところ  
へ、三郎、前とかはつた立派な身づくりし  
て、馬を牽いで出て来る。

私には織田信長の一生やその時代について興  
味を感じてゐる。それに關する書類を可成り  
讀んでゐる。それで、信長の一生を題材とし  
て長篇の小説か戯曲を書かうと、かねて  
企ててゐたのであつたが、それは手つ取り早  
く運ばないので、ふと思ひついて、短いもの  
を書くことにした。  
三月十日、信長御小姓來五六人召しつれ  
られ、竹生島御参詣、長瀬羽柴筑前の所ま  
で、御馬にめされ、これより、海上五里、  
御舟にて御社参、海陸共に片道十五里の所  
を、日の内に上下三十里の道、御歸城な  
され希代の題目也。しかし御機力も餘人  
にかはり、御達者に御座候の處、諸人  
奉感候也。

も、同時に御成敗候也。  
蘇峰氏の「近世國民史」によつて教へられた、  
信長の最も正確なる生活記録である太田牛  
一の「信長公記」中の一節を種子として空想を  
逞しうしたのであつた。空想劇であるといつ  
ても、私は當時の時世や信長の一生について  
は、可成り知つてゐるのだから、自ら歴史  
の片影がそこに現はれてゐるだらうと思ふ。  
信長が無造作に人を斬るのを、私の好みから  
恣にさうさせたやうに、新潮合評會で云  
つてゐた人があつたが、信長は時として、蘇峰  
氏の所謂「血に渴した魔鬼」の如くやたらに人  
を斬つたものだ。小山内薫氏の「吉利支丹信  
長」にも出てゐるやうに、安土城新築の際に  
は、信長自身白刃を提げて監督して、仕事をな  
まける人夫を斬らうと目を配つてゐたのだ。  
しかし、これまでと同様に、「安土の春」だつて  
書きつ放しである。筆を探りはじめた時に、  
結末がどうなるかさへ分つてゐなかつた。戯  
曲や長篇小説について、豫め立案構圖を徹  
細に定めてかゝることは、私には出来ない。  
だから實際の上流に際しては、随分差支へが  
起るだらうと思ふ。  
(文藝評論「人形芝居など」より)

い氣取つた態度をして、馬に乗つて、  
三郎 上様御寵愛のお馬に跨つて、春の街道  
を岐阜まで驅付けけるのだ。おれが使者の役目  
を果すと、天下にいかなる騒ぎが起るか、四  
郎兵衛、よく見て居れ。(芝居の武士らしく氣  
取つて云ふ)

四郎兵衛 無事に行つていらつしやい。(手輕  
く云つて挨拶する)  
三郎、わざと庭の中を一廻りしてから、馬  
に鞭打つて驅出た。  
四郎兵衛 三郎さまはうまくやりましたな。  
(羨ましそうに見送る)

花野 また戦がはじまりますの？  
夕月 だからこの御城内にゐるのがまだしも  
安心なんですわ。  
四郎兵衛 大戦がおつばじまつたら、おれも、  
どうかして自分の手で死體の山を築きたいも  
のだ。他人の斬つた死體の跡片付だけぢや請  
らない。(獨言のやうに云ふ)  
驚鳴く。



歓迎されぬ男

人物

久三 (三十歳前後)
染井 (三十歳前後)
伊東 (三十五歳)
大山 (六十五歳)
大山 明三 (三十五歳)
大山 治助 (三十五歳)
夏江 (二十六歳)
く子 (三十三歳)
おちか (二十四歳)

初夏の頃

本郷彌生町大山明三宅の應接室。以前醫師の家だったので、患者の待合室であった部屋が應接室になつてゐる。壁の上にテーブルが置かれて、椅子が二三脚。壁に添つて、青いクッションのついた長いベンチが置

(一)

かれてある。大地震のための破壊の跡がまだ残つてゐる。
久三 おちかの顔を見ると、微笑して庭の方へ寄つて、
久三 何處へ行くの？
おちか 牛肉屋まで。
久三 もうそろそろお午後飯支度か。僕も大分腹が減つたが、牛肉の御馳走になれるかしら。
おちか さあ、どうですかね。(辛気なく云つて行過ぎようとする)

おちか (不愉快さうに) あなたはそれを聞いてどうなさるの？ どうだつていふぢやありませんか。あなたには御自分の御用がいろいろおあんなさるでせうのに。
久三 いえ、僕が忙しくつても、人の結婚の噂を聞くぐらゐの餘裕はあらあね。おちかさんがさうツケ／＼邪智な返事をするのは少し可笑しいね。
おちか (少し機嫌を直して) でも、この家は一家團圓の樂みなんか、影もありやしませんわ。それはあなたも御存じなだけれど、

この頃はことに乾燥無味なんです。... dust. あるひは水の如き生活... 久三さんこそ、室借り生活をしていらつしやつても、一家團圓のお温かい家庭を樂んでらつしやる譯ぢやありませんか。
久三 お世辭にでもそんなことを聞かされるのははじめてだな。だけど、一家團圓でも、お温かい家庭でも、金がなくちゃ駄目だね。僕の求めてゐる金銭は、極めて僅少なものでないけれど。

おちか 今日、そのお金のことでいらつしたの？
久三 今日とはひどいね。僕はこの前来た時にも、金銭の無心な言ひを云やあしなかつた。今日だつて、借金をしに来たのぢやない。僕の貧相な顔はいつも無心顔や乞食面に見えるのかな。
おちか へえ。それは不思議ですわね。伯父さんも伯母さんも、久三が金を借りに来る／＼とたび／＼云つてらつしやつたから、わたしもさうとばかり思つておました。... それにあなただも御用でもなければ、こんな家へいらつしやる必要はないぢやありませんか。

久三 成るほどね。金でも借りるためでなければ、僕がこんな家へ何しに来るのかと、おちかさんが思ふのも無理はないね。(大いに感じたらしく)僕は此處の伯父さんから金を借りようなんて、そんな不可能なことは思はない。
おちか でも、あなたなんか男だから、いくらでもお金の取れる仕事が見つかるでせうのに。

久三 僕の家が奴がよくさう云ひますよ。男のくせにと云つて、我々男子をケナスのが女の常識なのかも知れないが、僕から云はせると、當節は女の方が金の蔓を掴まへることが手易いんぢやないだらうか。おちかさんほどの婦人がこんな家で牛肉買ひなんかに使はれてくすぶつた生活をしてゐるのを、僕は不思議に思つてゐるんだ。
おちか でも、わたしたちに適當したい仕事は何處にあるんでせう。あなたが御存じなら教へて下さいね。
久三 さうだなあ。戯談にも僕に職業の相談

をしてくれる人は、あなたくらゐなものだ。... 人間の職業はいくらでもありさうで、さう考へて見ると無いものだね。やつぱりこの家で辛抱してゐるのが一番いんだらうな。
おちか ...こんな天氣のいゝ日曜に、お午後のお惣菜の買出しに出掛けるなんか、こんな話らないことつたらありやしない。
久三 ハ、ハ、ハ。治助さんの結婚話を聞かうと思つたのに、あなたが云はないものだから、所帯染みた話になつてしまつた。... まあ、早くお使に行つていらつしやいな。僕に好意を持つておちかさんには、もつと面白い話を聞かせたいんだが、僕にはそんな面白い話の持合せは全くないでね。
おちか ほんとに愚問々々しちやあられない。(ふと我に返つたやうに云つて、久三の側を離れて) 御ゆつくりしていらつしやいと云ひたされど、あなたは、此處の家では、歓迎せられないお客様なんですからな。
久三 それはあなたに注意されるまでもないことだ。何處へ行つてもあまり歓迎される男子ぢやないことは、御當人が百も千も承知してゐるよ。両親がからいふ風に僕を生みつけたのだから、今更ジタバタしたつて爲方

おちか あなたが其處にさうしていらつしやるのを見ると、病人がお醫者の家へ来て御診察の暇番を待つてるやうに見えますよ。(笑ひながら云つて行きかける)

久三 うまいやがらせを云つたね。(淋しく笑ふ)  
おちか、下手へ入つて行く。久三、何か味きながら、ベンチに腰を掛ける。と、そこへ明三(六十五六歳、體格は逞しいが、リユーマチスを病んで弱つてゐる)が足を引摺るやうに歩いて、訪問者島田某(四十歳くらゐの立派な男)を見送つて出て来る。久三立上つて、二人に向つて一しよにお辭儀をする。

島田 オ、築井さんでしたか。(立留つて挨拶して)この頃はどちらへお勤めになつていらつしやる?  
久三 お聞きに入れるほどのところぢや御座いません。  
明三 (島田に向つて)築井は丸ノ内の信託會社に出てゐます。今度は落着いて勤まりさうです。  
島田 それは結構です。……ちと、お遊びにい

らつしやる。  
島田、沓脱ぎへ下りる。明三は足のだるまを忍んで玄関先に立つて、客が靴の紐を結ぶのを待つてゐる。久三は疊の上に坐つて丁寧に見送る。

久三 伯父さんはこの頃氣分がよくないんですか。  
明三 ウ、ン。陽氣の加減で持病が出ていけない。去年まではこんなぢやなかつたのだが。  
久三 陽氣の加減と云つても、この頃は晴天続きで温かくて、一年中の一番いい時節ぢやありませんか。  
明三 お前たちにはよくつても、おれの身體にはよくないよ。

久三 それは病氣をもつてる人には、いゝ時候といふものはないんでせう。金に不自由してゐる人間にもいゝ時候はないんでせうがね。  
明三 (相手の言葉には耳を留めず、外を見ながら、少しの間黙つてゐる)おれは今朝から二三人の來客に攻められて話疲れをし

てゐるんだが、お前は何か急な用事でもあるのかい。  
久三 (少しドギマギして)いや、差當つて用事があつてお伺ひした譯ぢやありません。……東京では身内は伯父さんのお宅だけだから、時々お伺ひすると、故郷の母がいつも云つて來まして、時々は此方の御様子も、手紙で知らせてやらないと、叱られますので。

明三 それで、ちよいと、おれの家の様子も暇きに來るのかい。何のことだ。(不快な顔して)しかし、これからは、わざと來てくれるには及ばないよ。おれが死んだ時には、死亡通知を送らせるから、それでいゝぢやないか。  
久三 わたくしがお伺ひすることが、そんなに伯父さんのお氣に障るのなら、御慮してもよろしいんですが。

明三 (少し言葉を軟けて)親對に來ちやいけないとは云はないがね。……しかし、あゝいふ同業者が出來た以上、おれの家とは家風が合はないんだから、そのつもりでゐて呉れなきや困るよ。  
久三 でも、故郷の両親の許可を得るんですから、伯父さんも認めて下さらなければ……

明三 だから、おれはお前がどんなことをしよらうとも妨害はしなかつた。そのかはり、お前もおれの家へ害を加へないやうにして呉れなきやいけないね。

久三 害を加へる?……へえ、わたくしは伯父さんの身内だつてことを、誰れにも云やしません。こんなヤクザな物で東京で生きてゐることは、伯父さんの御名譽にもならないでせうが、別段不名譽にもならないだらうと思はれます。治助さんの縁談だつて、身内にわたくしのやうな奴がゐちや困ると、先方で歐鐵砲を吹はしたりなんかしないでせう。  
明三 治助の縁談のことを、お前は誰れから聞いた?

久三 さういふ話は、誰れの口から出たともなく、直ぐに知れるものですね。(ふと氣がついたやうに)さう云へば、今歸つて行つた島田さんは、縁談のことやつて來たんですね。あの人は仲人稼業をよくやつてゐるやうだから、……伯父さん、わたくしの身についてもたまには考へて見てください。わたくしには島田さんのやうに縁談の世話をして呉れる者があるぢやなし、この年齢になつて獨身ではゐられないし、あなた方のお氣に入らないやう

な同業者でも持へなければ爲方がないぢやありませんか。

明三 身勝手なことを云つてる。お前はあの事でもまだおれを恨んでゐるのか。(不意に神經を尖らせる)  
久三 あのこゝろ? (考へて、ふと氣づいたが、詰らなささうに)ハ、ア。あのこゝろと云つてくに子さんのことですか。随分以前のことです。今やうやく思出したくらゐで、平生わたくしの頭からは消えてしまつてゐたんですよ。あんなことは根に持つても葉に持つてもゐませんよ。伯父さんはお年寄のくせによく覚えていらつしやる。

明三 おれがあつた事と云つたのは、くに子のことぢやないよ。  
久三 ハテナ。……しかし、何事についても、伯父さんを恨んでなんかもありませんから、安心していらつしやう。身内の者に恨まれてゐると思つたら、御病氣にも障るでせうから。  
明三 おれは椅子に腰を掛けてゐると、足がだるくてたまらない。これで御免を蒙らう。(椅子を離れて)お前も用事がないのなら歸つたらよからう。  
久三 (嗚咽に言葉に力を入れて)伯父さんに

お願ひしたいことがあります。

明三 (驚いた顔して振返つて)何だ?  
久三 金を貸して下さいとは申しません。さう思つて心配していらつしやるかも知れないけれど。  
明三 おれの家に有り餘る金がある譯ぢやなし、たとひ、貸してくれと云つたつて貸せるものか。  
久三 わたくしは、伯父さんのお心をよく存じて居りますから、今日の米糧が空になつてゐても、決して御無心は申しませんが、今御願ひしたいことは、全く別なことなんです。(首垂れて思詰めてゐるやうに)わたくしはこの應接室を拜借したいんです。

明三 この部屋を貸して呉れつて? 妙な無心だね。それでどうしようと思ふんだ? 誰れかに此處で會はうと思つてゐるのか。  
久三 ……誰れに會ふ必要があるものですか。わたくしは、この應接室の、あのクッションの上に横になつて、永久に眠つてしまひたいんです。この世にお眼を告げたいんです。  
明三 (誰とも思へないやうな相手の顔付を見入つて) 戲談もいゝ加減にしな。おれを侮らふつもりか、脅かすつもりか。

久三 どちらでもありません。今から何分間かの間、あのベンチを貸して頂ければよろしいんです。今生にわたくしが伯父さんから求めるところは、たつたそれだけなんです。

明三 馬鹿を云へ。自殺でもする奴が、豫め人に断るつてことがあるものか。それに、死ぬと極まつたら、適当な死場所はどこにでもあつてやないか。

久三 いえ、わたくしにはあのベンチの上が何處よりもいい死場所なんです。(と云つて、ベンチの方へ近寄つて) このベンチには、以前いろ／＼な患者が腰を掛けてゐたのです。この家の前の持主だつた醫師は山師で、いゝ加減な注射治療を賣物にして、一本の注射で二三十圓づつも儲けたといふことですが、役に立たない治療を受けて、金ばかり取られて死んだ人間が随分あるんでせう。……さういふ不幸なる患者の思ひの残つてゐる椅子だ。(と、意味ありげな目をベンチに向けて腰をおろす)

明三 この家にケチをつけるものぢやないよ。以前はどうだらうと、買取つた今は、ベンチ一つでも椅子一つでも、おれの所有なんだから。……お前はさういふいやがらせを云つて、

おれを脅かして、いくらかの金をまた持つて行かうと云ふんだね。……オイ。そこへ腰を掛けちやいけないよ。早く歸んなさい。彼れは久三の腕を捉へて立たせようとす。しかし、久三は動かない。

久三 「また」と仰つても、わたくしは、伯父さんから何も頂いた覚えはありませんよ。誰れにでも物をやることのお嫌ひな伯父さん、眠つてゐる間には、わたくしなんか金を下さる夢を御覽になることもあるんでせう。さつき申上げた通り、わたくしは、今日お金を恵んで貰はうなんて、毛頭そんな考へをもつて参つたのぢやありません。

明三 ぢや、はじめからおれの家で自殺しようと思つて来たとも云ふのか。馬鹿な奴だ。と企んで来たとも云ふのか。馬鹿な奴だ。

久三 いえ、必ずしもさうぢやありません。(まだ彼れの腕を捉へてゐる伯父の顔をちつと見上げて) 伯父さんがわたくしの申上げることを聞きたいと思つていらつしやるんならお話ししますが、……

明三 事によつたら、話を聞くだけは聞いてやつてもいいが、おれの病氣に障るやうな話なら御免蒙るよ。

久三 (相手にかまはない、獨言のやうに) 昨夜

から今朝まで、たまらない不愉快なことがあつて、わたくしは朝飯も食はないで家を飛出したのです。天気がいいので、いくらか気が紛れましたが、誰れかの處へ行つて、親身な話でも聞きたかつたら、まらなくなつて、うかうかと此方へまゐりました。伯父さんか伯母さんか、春雄さんか、治助さんか、此方のどなたかに會つたら、元氣がつくだらうと、當てにもならないことを考へてやつて来たんです。その結果はアベコベだつたんです。

明三 (そんな話には興味を感じないらしく) 生きて人間に愉快なことばかりあるものか。たまには不愉快なことがあるのは當り前だ。

久三 (目を空間へ注ぎながら、なほ獨言のやうな言葉を續ける) 頑丈だつた伯父さんが病み疲れて、この前お目に掛つた時と比べてさへ見違へるやうになつていらつしやるのを見て、わたくしは、スツカリ氣を感じました。金があつても、子供が人並みに育つて嫁入り嫁取りをするやうになつても、かうなつちや、何の生きてゐる樂があるものか。……

明三、相手の話に心を惹かれた態度を示す。

久三、年齢と病氣の重石に壓されて、ウソ／＼呻きながら、辛うじて生きてゐるといふだけで、何の樂があるものか。わたくしなぞは、親の遺産が手に入る望みがあるぢやなし、自分で出世もしさうでないのに、伯父さん見たいになつちやたまらない。と、さう思ふと、昨夕からの不愉快なことが胸に一杯になつて、此處で浮世におさらばをした方が結局自分にとつて得策ぢやないかと思はれるんです。

明三、そんな氣味の悪い目で、おれの顔を見て哭れるな。

久三、伯父さんの顔こそ、死相を帯びてゐるぢやありませんか。わたくしの顔なんか平凡です。よ。みんなに馬鹿にされて来た奴だ。

明三、餘計なことを云はないで早く歸れ。……今日は鳥田がおれの家の爲になる話を聞かせて呉れたと喜んでる矢先さへ、お前のやうな奴がやつて来て、おれの頭を臺なしにしよう。……早く歸んなさい。……たつて死にたいのなら、上野の森で首をくゝるか、不忍池

へ身を投げるかするがよい。おれの家に迷惑を掛けるな。……お前はおれを脅かさうと思つてそんなことを云ふが、自殺の用意に刃物でもピストルでも持つて来てるのか。

久三、此處にこんなものを持つてゐます。(ポケットから布片に包んだ小さな薬瓶を取り出して見せる)

明三 (その薬瓶を見上げて) それを魔薬だといふのか。變な色をしてゐるぢやないか。消化薬か何かだらう。

久三、ぢや、さう思つていらつしやればよい。わたくしは、この消化薬を飲んで、このベンチを拜借して、一眠入りさせて貰ひますから、伯父さんはわたくしに圖はないで、奥へいらつしやつてお休みなすつて下さい、わたくしは誰れにも遺言することはないんです。……(と云つて、自分の心に向つて云ふやうに) 遺言? そんなものを残す必要があるものか。

そして、彼れは、もはや明三には圖はないやうな態度で、何事かを思ひながら、部屋を歩き廻つたあと、咄嗟に薬瓶の薬を飲んで、ベンチに横はる。

明三は不安らしく、側へ寄つて久三の顔を見詰める。そこへ、次男の治助(二十五、

六歳の、可成り立派な容姿をした男)が歸つて来る。

明三、オ、い、所へ歸つて来た。今、久三が自殺すると云つて、變な薬を飲んで此處に寝てるのだ。何か目算があつて狂言を打つたのかも知れないよ。此處へ来て様子を見て呉れ。

治助、呆れたものだ。久三さんが狂言をやるなんて。人間で分らないものだな。(驚いた風もなく、好奇心をもつてベンチに近づくと)

明三、まさか、本當に毒を飲んだんぢやあるまい。

治助、さあ、どうですかね。(久三の顔をソツと見下して) オイ、君。(と、久三を揺動かす)

久三、薄目を開ける。

治助、戯言ぢやないよ、君。

明三、爲様のない奴だ。(稍安心したが、急に足腰の苦痛を覺えたらしく) おれは腰つ骨が挫けさうに痛みだした。あちらへ行つて休んでから、お前が久三によく譯を訊いて、早く家へ歸すやうにして呉れ。……こいつ、一文にもならないのに、おれの胸にこたへるや

うな不吉なことを云やあがつて。(獨言のやうに云ふ)

久三は目を閉ぢ兩手を胸の上で組合せてちつとしてゐる。

治助 君も滑稽な真似をしたものだね。身体は何ともないんだらう。サア、起きたまへ。僕の部屋へ行つてユツクリ話をしようぢやないか。

久三 僕の心を亂さないやうにして呉れたまへ。薬の利目が出かゝつて、僕は今死と闘つてゐるんだから。

治助 君のその變挺な目付や口付が、死と闘つてゐる證據なのか。そんな風ぢや、生と死の争ひも、莊嚴でも凄惨でもないね。道化た眞似はい、加減で止したらどうだ。……今君の狂言自殺の原因はどんなことなんだい。僕の親爺に要求したことが入れられなかつたためなのか。……僕が紅茶でも入れるから、起きて話したまへ。……サア、僕が今生に加勢して、死を追拂つてやるぞ。

治助が元氣よくさう云つて、久三の手を捉へて、勢ひ強く引起すと、久三は、それと争つたはずみにベンチから轉げ落ちたが、

立上つて、憤怒を顔に現はす。

久三 君は殘酷な人だ。僕に無用な口を利かせようとするんだね。……僕は伯父さんなんかにも要求すりやしないよ。親類のよしみで、君の家で、僕の死骸の跡片付をして呉れればいと思つてゐるだけなんだ。僕の死生の問題に立入つて貰はなくてもいよ。

治助 君は氣が狂つてゐるやうにも見えないが、妙だね。まあ椅子にでも腰を掛けて、落着いて見たまへ。君がそんなに怒つた顔したのを見るのは、今ははじめてだが、不思議なものだ。

そこへ、おちかが、久三の内縁の妻夏江(二十六七歳、世摩れのしたらしい卑しい女)と、一しよに入つて来る。

おちか ア、よかつた。久三さんはまだいらした。(と、夏江に向つて云ふ)

久三は夏江を見て驚く。

おちか (久三に向つて) 今そこであなたの奥さんにお目に掛りましたの。此方の家をお捜しになつてゐて、偶然わたしにおねになつたのです。(夏江に向つて) さあ、お上んなさいますいな。

おちかは、買物の風呂敷を持つたまゝ上り

口に腰を掛ける。

夏江は應接室へ上つて、恭しく治助に挨拶する。治助は訝しげな顔して會釈する。今まで、憤つてゐた久三は俄かに打萎れてマゴ／＼する。

久三 お前はこんなところへ何しに來たのだ？(力なく云ふ)

夏江 あなたこそ何しに此方へいらつしやつたの？ あたし、どんなに心配して方々を捜したか知りやしない。(ふと、ベンチの側に置かれた薬瓶に目をつけて訝しげに) あなた、そのお薬を召上つたの？

久三 今日になつて飲む時が來たのだ。(感慨を籠めたやうに云つて、よるけるやうにベンチに腰をおろす)

夏江 なぜ、そんなお薬を飲む時が來たのです？……今朝あなたが出でいらしつてから、ふつと氣がつくと、その薬瓶がいつも置いてあつたところに見つからないでせう。ぢや、あなたが持つて行つたに違ひないと思ふと、こりや、打ちやつて置けないと、あたし慌てましたんですよ。(袂の中から、同じ形をした小さな薬瓶を出して) でも、よかつた。かういふことがあらうと思つて、中味をすり變

ね。御親切さまだ。

夏江 (悠然として) あなたは死にさへすりや責任がのされるやうに思つていらつしやるんでせうけれど、若しもあなたが、今自棄な死方をなすつたら、お國の御兩親をはじめ、諸を知らない方は、みんなあたしの所爲になさるに極まつてるぢやありませんか。あなたが御自分でどうしても死にたいのなら、それは御勝手なだけけれど、あとの事はちやんと置いて下さらなさいませんよ。

久三 それで、僕を調まへにこんな處までやつて來たのか。……お前の借金拂ひが出來るくらゐに、金の工面がついたなら、僕だつて死ぬ氣にならなかつたかも知れないよ。へおちかに向つて) おちかさん、お茶を一杯飲んで下さい。水でもよろしい。あんな薬を飲んだので、胸の中がむか／＼して來ていけない。

おちか入つて行く。

治助 兎に角、君は物騒な男だね。出鱈目に自殺なんか企てるやうなヒステリックな男には、婦人病の薬が利目があるかも知れないね。細君と二人でその薬を持薬にしたらいふかも知れない。

久三(前と違つて元氣づいて) 僕はさつき伯

へて置いて。……あなたが飲みになつたのは、あたしが松下先生から頂いた持薬なんですよ。……あなたは、また何だつて此方のお家でそんなものを召上つたんです？

久三 ぢや、さつき僕が飲んだのは、婦人病の薬だつたのか。(苦笑を洩らして唾を吐出す)

治助、聲を立てて笑ふ。夏江は侮蔑した笑ひを洩らす。おちかも何となしに笑ふ。

久三 僕にあんな薬を飲まして、僕を笑ひ物にしようとしたのか。

夏江 でも、あたしがお薬をすり變へたお薬で、あなたの生命は助かつたんぢやありませんか。此方のお宅にも御迷惑が掛らなくて済んだのぢやありませんか。

治助 (相手を見下した態度で) 僕は此處の家族の一人です。

夏江 ぢや、あなたに聞いて頂いてもよろしいんです。お身内の方に立合つて頂いて、わたくしたちの間の最後の解決をつけたいんで御座いますから。

治助 さういふ面倒な話には、僕なんかが關係しちやいけません。

夏江 たいお身内の方に聞いて頂きさへすれば、あたし、氣がすみますのよ。

久三 お前が持つて廻つた口を利くにや及ばない。僕が簡単に云つちまはらう。簡単なことなんだから。

夏江 (慌てて逃つて) いゝえ、あなたはどうかすると根も葉もないことを仰有るからいけないわ。あたしに云はせて下さい。(口調に重味をつけて) あたしは自分の身體を引當てに、五百圓の借金をしてゐるんです。久三さんが保證に立つてゐて、そのお金は二人の生活に費つたのですから、期限までにどうにか極りをつけて貰はなきや困るんで御座いますの。

久三 それで、その借金を拂つちまふまで、僕に魔薬を飲ませないやうに警戒してゐるんだ

父さんの顔を見てゐるうちに、ふつと死にたくなつたんだが、自分でも變だ。……しかし、もう大丈夫、もう決して死なない。人が僕を殺さうとしたつて殺さうやしない。(自分力をつけるやうに云つて) 治助さん、僕はね……昨夕いく度、これを(夏江を指差して)殺さうとしたか知れないんだよ。いや殺さうとしたのぢやない、殺した方がいゝと昨夕いく度思つたか知れないんだよ。……ところが、敵をでも、悪人をでも一思ひに殺せるやうな昂奮状態が、僕の心にはどうしても起つて来ないんでね。

治助、久三の言語と態度とを研究的に見聞してゐる。夏江は、何を云つてゐるのだと思つてゐるやうな冷笑を洩らす。

久三 僕が柄にない過激なことを云つたのを變に思つてゐるんだらう。(誰れに云ふともなく云つて) こいつが戀人をほかに拵へてゐるとか、僕を欺いて僕を踏付けるやうなことを企んでゐるかしてゐるのなら、僕だつてムカムカとして極端なことが出来るんだが、さうぢやないんだからな。

夏江 何を詰らないことを仰るの？  
久三 そりや詰らないことさ。……だけど、昨

夕から今朝へかけて、二人であんないやらしい喧嘩をしつゝけたことを考へて見るがい。色男でも出来かゝつてゐるやうなことを云つて、僕の氣をひいて見たり、僕の側を離れたら、世間がちゃんとお膳立をして、お前を待つてゐるやうな蟲のいゝことを云つたりしてゐるのを、お前は淺間しく思はなかつたのか。僕がお前の借金を綺麗に拂つてやつたにしたらところが、拂はないで死んだにしたらところが、お前の落行くさきは大抵分つてらあね。

夏江 (腹立たしげに) それは大きにお世話よ。そんなことを他人の前で云つて、事情を知らない人は、あたしといふ女をどんなに誤解するか知れないぢやありませんか。

久三 だつて、お前の方から望んで云ひだしたことぢやないか。……お前は僕を離れさへすりやどうかすると、さきを樂みにしてゐるか知れないが、僕は……  
夏江 (相手の言葉を慌しく遮つて) 何をくどくどと寝言見たいなことを云ふんです？ あなたの身内のお家に来たからつて、急にえらさうな口を利いて。……あたしは當然取るべきお金は取らなきやありませんよ。えらさう

ある。  
久三 小きくなつてゐるなんて、不慮のお前にも似合はないな。顔を上げて伯父さんに御挨拶して行け。一生にまたと伯父さんにお目に掛けることはないだらうから。(夏江を引抱へて、明三の方へ無理に顔を向けさせて) これがお断りお断りしてゐた伯父さんだ。(明三に向つて) これが、かねてあなたの横斥していらつしやつた女です。  
夏江は萎れた顔して挨拶する。明三は苦しい顔して會釈をする。  
その時をいゝ機會として、おちかは、夏江と久三にお茶を出す。

久三 (茶を飲んで) おちかさん、面白かつたでせう。あなたは結婚してもこんな馬鹿な眞似はしないやうに、今から氣をつけていらつしやい。(明三などに向つて) 御迷惑を掛けて済みませんでしたね。……我々二人のほんたうの芝居はこちらの門を出てからなんですよ。……左様なら。  
久三は附け元氣でさう云つて出て行く。夏江は、薬瓶をベンチの隅に置いたまゝ、それに氣づかないで、コソ／＼と出て行く。

明三 二人ともあつかましい奴だ。これからあ

な口を利いて、人前であたしに恥を掻かせたきや、出すべきお金を出したあとでなさい。  
夏江は久三を小突きまはす。久三はそれに抵抗して相手を突飛ばす。  
久三 昨夕のやうにお前に負けてばかりはゐないぞ。おれが能無しで小汚い男なら、お前だつて薄汚い女だ。  
夏江、昂奮して、身を起して、無我夢中になつて武者ぶりつく。  
おちかは奥からお茶を運んで来て、さつきから二人の様子を、呆氣に取られて見てゐる。

治助は、おちかを見て、ニヤ／＼笑つて、久三夫婦の醜態を見ろと目顔で知らせる。そして、打遣つても置けないので、二人を引分けて、

治助 僕の家へ来て夫婦喧嘩のおさらひなんかされちや迷惑だよ。  
久三 いや、どうも濟まなかつた。(頭を下げて面目ないと云つた表情をする)  
夏江はテーブルに寄りすがつて泣く。  
明三、足を引摺りながら奥から出て来る。

明三 (威厳を見せて) お前たちは直ぐに歸つてくれ。……人の家へ来て自殺の眞似したり、

んな奴は寄せつけちやいけない。(我れともなくベンチに腰をおろして、治助を見て、稍機嫌を直して) さう云へば、さつき島田が来ていろ／＼話をして行つたよ。  
治助 (冷淡に) さうですか。  
明三 先方では非常に氣乗りがして、一日も早く話を極めたいと云つてゐるさうだよ。此方でもあんまり迷はないで、早く極りをつけた方がいゝだらうね。

治助 さうです。(冷淡に云つて) お母さんは何處かへ出掛けたんですか。(おちかの方を見て) 兄さんの家へ行つたのかい。  
おちか ええ。何だか急に思立つてお出でになりました。  
彼女はさつきから、奥へ行かうとしながら、父子の話に心残りかしてゐるらしく躊躇してゐる。

明三 お母さんがゐなくてよかつたのだ。あれがゐたら、久三やあの女の不しだらな様を見てどんなにいやな思ひをしたことか。目を見ましたかも知れないよ。(おちかの方を見て) お前は早く午餐の支度をしなさいよ。いよ。おれも腹がへつた。  
おちか、不承々々に奥へ入る。

夫婦喧嘩の眞似したり、恥知らずにも程があると云ふものだ。おれから金を引出すための狂言だらう。馬鹿め。それがおれに分らなと思つてゐるのか。……さあ、早く歸つてくれ。(久三の背を突く)  
久三 これは驚いた。……わたくしは芝居氣なんかちつとも持つてゐない人間だから、そんなことは夢にも思ひつかかなかつたのですが、伯父さんにさう云はれて見ると、成程狂言のやうでした。わたくしも生れてはじめて、人の前で芝居をしたのですね。  
明三 それに氣がついたのなら、今日は大人しく歸つて呉れ。  
久三 歸りますとも。(キツパリ云つて) 大變御迷惑を掛けて申謝がありません。……しかし、伯父さん、わたくしは今日此方へお伺ひした時とはまるで違つた人間になつてお暇することが出来さうですよ。だから、狂言もわたくし自身に取つちや無駄でなかつた譯です。……(夏江の肩を叩いて) オイ、兎に角歸らう。伯父さんがあゝ仰るんだ。  
夏江は、さつきから、自分の顔を明三に見られまいとしてゐる。明三は夏江の顔を見ぬ振りをしながら、コソソリ見ようとして

ある。  
久三 小きくなつてゐるなんて、不慮のお前にも似合はないな。顔を上げて伯父さんに御挨拶して行け。一生にまたと伯父さんにお目に掛けることはないだらうから。(夏江を引抱へて、明三の方へ無理に顔を向けさせて) これがお断りお断りしてゐた伯父さんだ。(明三に向つて) これが、かねてあなたの横斥していらつしやつた女です。  
夏江は萎れた顔して挨拶する。明三は苦しい顔して會釈をする。  
その時をいゝ機會として、おちかは、夏江と久三にお茶を出す。

明三 お母さんがゐなくてよかつたのだ。あれがゐたら、久三やあの女の不しだらな様を見てどんなにいやな思ひをしたことか。目を見ましたかも知れないよ。(おちかの方を見て) お前は早く午餐の支度をしなさいよ。いよ。おれも腹がへつた。  
おちか、不承々々に奥へ入る。

治助 お父さんもお被れになつてゐるやうだから、あちらでお休みななつちやどうですか？

明三 ウン。おれも今日はひどく被れたよ。心の疲れが顔にまで現はれてゐるのだから。久三がおれの顔を見ていやなことを云つた。おれの顔に死人の相でも現はれてゐるやうなことを云つた。それに、あいつ、おれの胸にギョククリ應へるやうな氣持の悪いことを云つた。

治助 そんなことを云ひました？

明三 そんなことつて、別段珍らしいことぢやないんだが、……珍らしくないことでも、時と場合でひどく胸に響くこともあるものだ。

治助 あの人は無能で金もないんだから、自棄な口を利くやうになつたんでせう。信託會社の方も免職になつたらしいですね。

明三 さうだらうとおれも思つてゐたよ。身内にあんな男があると、おれたちの信用に關はつて困るんだが……

治助 さうですね。(冷淡に云つて、ふと調子を變へて) わたしは今朝、木村さんの家へ寄つて頼まれたんですが、あすこでは、この頃手不足で困つてゐるから、少しの間、おちかさんを貸してくれないかと云つてゐました。貸

して上げる譯に行きませんか。

明三 いや、それは困るよ。家では一日でもおちかに出て行かれや困るよ。あれがゐなくなつちや、おれも飯も食へなくなるぢやないか。

治助 他所から手組つて来ておちかさんがゐなくなつてさへ、お父さんの日常生活に差支へがあるのなら、なぜ兄さん夫婦を外へ出して置くんですか？ この家に住はせて家の用事をさせたらいいぢやありませんか。(責めるやうに云ふ)

明三 理窟はさうだが、春雄はこの家にゐたくなのだから、どうも爲方がないよ。

治助 むたくなののは、兄さんばかりぢやないでせうね。

明三 お前も結婚したら、直ぐに別居するつもりだらう。それはおれも覺悟してゐるんだよ。

治助 結婚の話はまあ待つて下さい。……それよりも、たび／＼わたしが云ふやうに、この家は人に賣るか貸すかして、郊外にでも住みいゝ家を新築したらいいぢやありませんか。……この家がいけないんですよ。お父さんの身體の加減の悪くなつたのも、一つはこ

すか。

坂本 わたくしはよく存じませんが。

治助 (ふと、奥の方を見て微笑を洩らして) 姉さんが此方へ来たなら直ぐお知らせしますから、あなたは外の心當りを捜して下さい。

坂本 ぢや、さういたしません。

治助 抛つといつても心配なことはありませんよ。迷ひ兒にはなりやしません。

坂本 は、心配してゐる明三の顔を見上げて、挨拶して出て行く。

明三 (安心して) くには其處にゐたのか、いつの間に来てゐたのだ？

くの子 あたしさつきから、あしこに立つてゐて、立脚をしてゐました。こちらにはお客様がいらつしやるやうだつたから、裏からソツと家の中へ入つたんです。久三さんが女のひとと一しよに歸つて行くのを、氣の毒な思ひしで見つてゐましたのよ。(と云つたあとで、直ぐに侮蔑したやうに) あんな人なんですかね、久三さんが同様してゐるといふ人は。

明三 人の事よりも、お前はどうして無断で家を飛出して来たのだ？

の家の所爲なんですよ。舊弊な言葉だが、この家が築るのかも知れませんが……山師の悪徳醫者のために治療法をやまつて死んだ者の怨みが、この家に残つてゐるのかも知れませんよ。我々がこの家に移つてから、破なことはたいんだから……今日だつて久三さんを晒ひ物にしてすんだやうなもの、危いところだつた。この後またどんな不吉なことがないとも限りませんよ。

明三 久三もお前の云ふやうなことを云つてゐたづけ。……お前たち若い者がそんな迷信を有つてゐるから不思議だ。この年齢で新奇に家を建てたりなんか、そんな面倒くさいことが出来るものか。此處は廉價で買つて、あの大地震にも焼けたやつやうな運のいい、家ぢやないか。お前たちがどこへ行かうとも、おれはこの家の空気を吸つて、生きてゐられるだけ生きてゐるつもりだ。新奇な家を建てたつて珍らしいのは當座ばかりだよ。……いや、かう身體が悪くなつちや、家の新しいか古いかよりも柔しい人間の手が欲しいよ。だから、おちかのやうな柔しい氣の利いた女に、出て行かれりやしないかと、おれは氣遣つてゐるのだ。お前たちもあの女に邪慳なことは

くの子 それがお父さんにはお分りにならないの。……治助はよく察してくれるわね。

治助 僕にも分りやしないさ。

くの子 さう？ あたしには……あたしだけに、治助が鳥田さんの持つて来た薬談に不同意なことはよく分つてゐるのに。

くの子 は不平らしくさう云つて、ベンチに腰をおろして、夏江の置いて行つた薬瓶を何氣なく手に取つて、指の先でいちぢくりながら、

くの子 あたし、此處へ来たなら慰めて貰へるだらうと思つて、家を飛出して来たのだけれど、お父さんの顔を見たら、とても望みの叶ふ見込みのないことがよく分つたの。治助が云つた通り、この家がいけないんですよ。改築するか、移轉するかしたらいゝでせうのに。

明三 どういふも勝手なことを云つてる。……それよりもお前が此處に来てゐることを、早く伊東へ知らせなきやなるまいな。

くの子 打ちやつといつていゝのよ。

おちか、奥から顔を出して、

おちか お購立が出来ました。くの子さんも召上りなせう。

くの子 あたしはよろしいのよ。……おちか

しないやうにして呉れ。一日でも長くゐて貰はにや、第一おれが不自由な思ひをするんだから。

治助 お父さんは、そんなにおちかさんがお好きなんですか。

明三 あれが明日でも出て行きやしないかと、氣遣はれるのだが、お前はどう思ふ。

治助 (面差しに) 何をですか？

明三 (あたりを憚るやうに) おちかにもこの頃は、心に思つてる男があるのぢやなからうか。急におめかしに身を入れだしたりして、様子がどうも變だ。……年齢が年齢だから無理もないが。

そこへ、坂本某(二十代の男)が訪ねて来る。

坂本 伊東さんの奥様は、お宅へいらつしやになかつたでせうか。

明三 いえ、来てゐません。くに子はこちらへ来ると云つたのですか。(足を引揚つて訪問者の方へ行く)

坂本 奥様は今朝からお家にいらつしやらないので、何處へお出ましになつたのかと、旦那様がおさつきから心配していらつしやいます。

明三 どうしたんでせう。何か事があつたので

くの子 あたしはよろしいのよ。……おちか

くの子 あたしはよろしいのよ。……おちか

くの子 あたしはよろしいのよ。……おちか

くの子 あたしはよろしいのよ。……おちか

くの子 あたしはよろしいのよ。……おちか

んは相變らず一人で臺所仕事をして、お忙  
しいでせうね。お母さんは今日の日曜にもま  
た兄さんのお家へ行つてゐるらしいのね。煩  
がられに行かなくつてもいいでせうにね。  
治助 やうやく飯が食へるんだな。  
明三 くにも一しよに來い。食べながら話をし  
よう。

くに子 ほんたうにあたしは何も食へたくあり  
ませんの。…皆さんの御飯のすむまで、あ  
たしはこゝで玄關番をしておますわ。  
明三と治助とが奥へ入る。今まで快活な  
口を利いたくに子も、俄かに萎れた様子  
をして、ベンチから立上つて椅子に腰をお  
し、物を思つてゐるやうに空間を見詰  
める。

そこへ、伊東秀雄(三十餘歳、不慮着で着  
こなしが亂れてゐる)下手からアタフタと  
出て來る。くに子を見つけると、悦しさが  
胸から込上げる様にして上へあがる。  
秀雄 やはり此方へ來てゐたのか。…坂本は  
お前を捜しに來なかつたか。(くに子の側に  
腰を掛ける)  
くに子 (顔を上げて) どうですか。…それよ  
りもあなたは何しにいらつしやつたの。あ

たしに何か御用がござりなさるの?  
秀雄 空呆けてゐるね。…昨夕お前がヒステ  
リーを起して、絶望的なことを云つてはゐた  
が、まさか世間の物笑ひになるやうなことは  
しないだらうと思つてゐた。  
くに子 あたしはいくらあなたに侮辱されて  
も、どうもしないで、泣寝入りしてしまふ  
女だと思つていらつしやるの?  
秀雄 まだそんなことを云つてるのか。おれは  
お前を侮辱した覚えはないよ。…此處の  
お父さんやお母さんに訊いて頂かうか。おれ  
は、たゞつゆ子といふ不仕合せな女を庇つて  
やつただけなんだ。それでもお前の氣に障る  
のなら、今後絶対にあの女を家へ入れないや  
うにしてもいいのだ。つゆ子はおれが世話を  
してやらうとやるまいと、どつち道不幸に落  
ちる女なんだから、此方で世話をするのも無  
駄骨折見たいなものなんだよ。これから知り  
ん知してゐてもいいんだね。

くに子 此處へ來てまで、そんな言談なんぞ、  
聞かして貰はなくつてもいいのよ。…今に  
お父さんが出て來て、あなたと一しよになつ  
て、微臭いお説法を聞かせるのだと思ふと、  
あたしたまらななんです。(相手を脅かすや  
うに)

明三 早く醫者を。早く。  
明三、痛む足を引摺りながらウロウロする。  
おちか奥へ入る。  
くに子 (ますく、苦みながら) あたし、お父  
さんの不慮の持薬かと思つて、戲談に飲ん  
だんです。…あたし、死ぬ氣ぢやないんで  
す。…ア、苦しい。…早くお醫者を呼んで  
來て下さい。あたし、今死ぬるのはいや。…  
助けて下さい。

うな目をして、言葉に力を籠めて、あたしは、  
親兄弟に恩讐をこぼしたくつて、今日此處へ  
來たんぢやありません。あなたが、勝手にき  
う極めないやうにして下さい。…あたしの  
死體は、伊東家の世話にならないで、兩親の  
手で跡片付をして貰ひたいと思つて、今日此  
處へ來たんです。…あなたはそつちへ行つ  
ていらつしやい。  
彼女がヒステリックにさう云つて、秀雄を  
押退けるやうな手付をして、椅子を離れて  
ベンチに横はつて、かの藥瓶を取上げて  
飲む。

くに子 これは、この家の前の持主だつたお醫  
者から、兄さんが貰つたモルヒネなんです。  
眠りながら、氣持で死ねるやうに調合して  
あるんですわ。あたし、兄さんの机の引出か  
ら盗んで、死にたくなつた時に、氣持で死  
ねるやうに、しよつちう自分の身につけて  
ました。今丁度このお藥を役に立てる時が來  
たんです。(感傷的な口調で) あたし、こん  
な冷酷な人生に生きてゐるよりは、早く夢の  
世界へ行つた方が幸福なんです。…あたし、  
今い、夢を見かけてゐるんだから、誰れもあ  
たしの側へ來て、あたしの夢を搔亂さないや  
うに)

秀雄 戲談もい、加減にしろよ。(氣遣はしげ  
に傍へ寄つて) まさかモルヒネぢやあるまい  
な。芝居の眞似をして脅かすなよ。(くに子  
の身體に手を觸れる)  
くに子 芝居なら、さう思つて機軸に坐つて觀  
ていらつしやるといふ。…それはいい、夢を  
あたし見かけてゐるの。  
彼女は目をつぶつてさう云つてゐるうち  
に、ふと苦痛を感じたらしく、  
くに子 あたし變だわ。どうしたのだらう。  
オ、苦しい。  
胸を押へて藻掻きながら、ベンチからすべ  
り落ちる。

秀雄 馬鹿な眞似をするからだ。(と、小言を  
云つてから、奥の方を覗みて、大聲で、慌し  
く) 誰れか來て下さい。早く。(と叫んで、  
くに子を抱上げる)  
くに子、秀雄にしがみついて苦悶する。治  
助を先きに、明三とおちかお奥から出て來  
る。

秀雄 くが今變な藥を飲んだのです。早くお  
醫者を呼んで来て下さい。  
治助 (藥瓶に目をつけて) それは、久三さん

の細君が忘れて行つた毒藥ぢやないか。どう  
して、そんなものを飲んだのだい。…おち  
かさん、大急ぎで醫者を呼んでお出で。…  
どうしてそんなものを。…今日はどうも變  
な日だ。  
明三 早く醫者を。早く。  
明三、痛む足を引摺りながらウロウロする。  
おちか奥へ入る。

くに子 (ますく、苦みながら) あたし、お父  
さんの不慮の持薬かと思つて、戲談に飲ん  
だんです。…あたし、死ぬ氣ぢやないんで  
す。…ア、苦しい。…早くお醫者を呼んで  
來て下さい。あたし、今死ぬるのはいや。…  
助けて下さい。  
治助 指を喉へ突込んで、腹のものを吐出した  
らいいでせう。  
治助と秀雄と力を合せて、くに子を部屋  
端へ抱へて行つて、飲んだものを吐かせよ  
うとする。  
明三 何といふことだ。(溜息を吐いて) お母  
さんがおたら目まはすだらう。  
足を引摺りながら、皆の側へ寄つて行  
く。  
くに子、うめき横ける。

秀雄 馬鹿な眞似をするからだ。(と、小言を  
云つてから、奥の方を覗みて、大聲で、慌し  
く) 誰れか來て下さい。早く。(と叫んで、  
くに子を抱上げる)  
くに子、秀雄にしがみついて苦悶する。治  
助を先きに、明三とおちかお奥から出て來  
る。

秀雄 くが今變な藥を飲んだのです。早くお  
醫者を呼んで来て下さい。  
治助 (藥瓶に目をつけて) それは、久三さん

の細君が忘れて行つた毒藥ぢやないか。どう  
して、そんなものを飲んだのだい。…おち  
かさん、大急ぎで醫者を呼んでお出で。…  
どうしてそんなものを。…今日はどうも變  
な日だ。  
明三 早く醫者を。早く。  
明三、痛む足を引摺りながらウロウロする。  
おちか奥へ入る。

くに子 (ますく、苦みながら) あたし、お父  
さんの不慮の持薬かと思つて、戲談に飲ん  
だんです。…あたし、死ぬ氣ぢやないんで  
す。…ア、苦しい。…早くお醫者を呼んで  
來て下さい。あたし、今死ぬるのはいや。…  
助けて下さい。  
治助 指を喉へ突込んで、腹のものを吐出した  
らいいでせう。  
治助と秀雄と力を合せて、くに子を部屋  
端へ抱へて行つて、飲んだものを吐かせよ  
うとする。  
明三 何といふことだ。(溜息を吐いて) お母  
さんがおたら目まはすだらう。  
足を引摺りながら、皆の側へ寄つて行  
く。  
くに子、うめき横ける。

パラック建の伊東秀雄の住宅の客室。前  
の幕の大山明三の應接室よりも粗雑である  
が、現代風で明るみがある。  
油輪の額が掛つてゐて、蓄音器も置かれ  
てある。  
秀雄は獨りで蓄音器の側に坐つて、陽氣な  
西洋樂を聴いてゐる。そこへ、くに子が衰  
弱した様子をして入つて來る。顔の面に現  
實離れのした、稍凄味のある、普通人でな  
いやうな粉飾を施してゐる。  
くに子 今日はお天氣がいいのに、何處へもい  
らつしやらないの?  
秀雄 今朝からさう極めてゐるぢやないか。  
くに子 でも、一週に一度の休日にはばかり  
いらつしつちや、身體のためによくないぢや  
ありませんか。  
秀雄 ハ、今日に限つてそんなことを云つ  
てる。…お前が外出したい氣持になつた  
のなら、夕方から一しよに散歩に出ていい  
んだがね。  
くに子 あたしに遠慮なさらなくつてもいいの  
よ。…どうせ、あたしはもう人の中へは出

て行けなくなつたんですから。  
 秀雄 下らないことを氣に病む必要はないぢやないか。新聞に出された評ぢやないし、一時の談話としてもう済んでしまつてゐるぢやないか。  
 くに子 あなたがそんな空々しいことを仰つたつて駄目よ。あたしにはちやんと分つてますわ。あたしが自殺なんか出来る人間ぢやないつてことを、あれ以来、あなたは見破つて安心していらつしやるんでせう。  
 秀雄 そんなことはどうだつていぢやないか。自殺の出来る人間がえらいつてことはないだ。  
 くに子 あなたの思惑は兎に角、あたし自身、自殺の出来ない人間だつてことが自分によく分つて、急に世の中が淋しくなりました。  
 秀雄 馬鹿なことを云つてゐる。自殺の出来ない人間こそ、世の中が面白く暮らせるんぢやないか。……あの目のことは、もう忘れておしまひよ。  
 くに子 忘れようとしても忘れられるものですか。あたし、身體がよくなければなるほど、あの時のごとがハッキリ思出されますわ。お父さんも治助もあなたも、おちかさんでさへ、みんな

な蔑視んだ目であたしを見てゐましたわね。  
 秀雄 蔑視んだのぢやない、心配して見てゐたのだよ。  
 くに子 本當は、あの時あたしはあのまゝで死んでた方がよかつたの。  
 秀雄 ぢや、以前のお前はあの時死んだことにして、新しくに子が生れ出たことにしたらいいぢやないか。  
 くに子 新しくに子？ こんな頭の中に塵屑の詰つてる様な氣持をしてゐて、新しくに子も何もあつたものですか。  
 秀雄 善音器はまだ響いてゐる。  
 秀雄 へ、下女が名刺を持って入つて来る。  
 秀雄 兎に角此處へ通してくれ。  
 下女、出て行く。  
 くに子 どなたが訪ねていらつしたの？  
 秀雄 あんまり會ひたくない人間なんだが、斷る譯にも行くまい。お前はあちらへ行つてゐたらいいだらう。  
 くに子 あたしが會つちやいけないの？ (言葉失せて) それ御覽なさい。あなただつて、あたしをお客様の前へ出すことをいやがるやうになつたぢやありませんか。あたしを

劣等な人間扱ひして。  
 秀雄 (不快を忍んで) ぢや、此處にゐてもいいよ。……染井久三が来たんだよ。あいつ何の用事があるのか。  
 くに子 (不快らしく) 久三さんが？ 何しに来たんでせう。  
 秀雄 へ、久三が入つて来る。服装は序幕と同じなのだが、顔面に現實離れのした、普通の人間でないらしい印象を與へるやうな粉飾を施してゐる。  
 久三 今日はよく御在宅でしたね。(と、秀雄に挨拶してから、微笑を浮かべてくに子の方を見上げて) くに子さんは身體がスツカリよくなつたの？ 二三日前に、往來で治助さんに會つて、薬造ひの話を聞いて大笑ひをしたんですよ。  
 くに子 (不機嫌らしく) あなたはあたしを擲きにいらしたの？  
 久三 飛んでもないことだ。大笑ひしたことがくに子さんのお氣に障るのかね。僕の獨り心中のしそこなひも大笑ひなんだから、お互ひさまです。  
 秀雄 (ますく、不機嫌らしく) 君は滅多に僕の家に来たことのない人だが、今日は何か用

事があるんですか。  
 久三 特別に用事がある評ぢやありませんがね。一應くに子さんにお詫びをして置かうと思つて。……あんな薬をうっかり置かれたために、飛んだ御迷惑を掛けて済みませんでしたね。  
 くに子 治助が餘計なお喋りをするからいけない。自分の同腹のことを面白くで人に話すなんてひどい奴ね。……(鼻奮して) 頑固なお父さんでさへ、あれから神經を病んで、一刻も早く家を變りたといふ云つてゐるんぢやありませんか。兄は兩親を嫌つて外へ出てゐるし、治助はおちかさんに誘惑されて兩親の勸める縁談を嫌つてゐるし、あたしの實家は早晩破滅するでせうよ。  
 久三 なに、彌生町のあの家は破滅してもしなくつても、大山家は大丈夫だ。第一資産があるんだからな。  
 くに子 僅かな資産なぞ、手頼りになるものですか。  
 久三 ところが、僕は今、その僅かな金のためにも、百圓足らずの金のために苦勞してゐるんです。……僕はね、自殺をしそくてから、生れ變つた人になつて、世間に対して威張つて

ゐたつもりだが、やつぱり駄目だつた。空威張をしたつて、Aといふ人間は何時までもAといふ人間で、BがAに變ることはないのかな。……(酔漢のクダ見たいに) いや、しかし、僕はあの時、薬の間違ひで、生命が助かつたと思つたのは間違ひで、本當は死んで、異つた世界に入つてゐるんぢやないかと、時々思はれることもあるんだ。……僕の飲んだのが眞實の毒薬で、くにさんの飲んだのが、毒薬だつたのかも知れない。ハ、ハ、ハ、秀雄は不機嫌だつた顔に笑ひを浮かべる。くに子も機嫌を直して淋しく笑ふ。久三、自分が何處に來てゐるのかを見定めるやうに室内を見廻す。  
 くに子 さう云へば、久三さんは、今日は人が違つたやうに陽氣になつてゐるね。お金に不自由してゐるやうなところはちつとも見えないぢやないの。  
 久三 さう思はれるだけでも有難い評だわ。でも、生れ變つたにしても、異つた世界に入つてゐるにしても、僕といふ人間はなさない評だ。……あの後は、僕が戶外へ出るたびに、僕のあとに、影が形に添ふ如くに僕にくつついて來る者があるんですよ、危険人物が刑事

調査に尾行されてゐるやうなものでせうな。  
 秀雄 (生眞面目に) 君が警察の注意人物になつてゐる評ぢやないんでせう。  
 くに子 あたしには分つてゐるわ。あなたの影も此處へ連れていらつしやるといふわ。あなたの影には、あたし一度お目に掛つたことがあるのよ。  
 秀雄 それは何のことだ。  
 久三 僕は自分の身をばばさうとしたことはあつても、まだ殺人も強姦もしたことはないのだから、警察に御厄介は掛けないでせう。その點は安心して下さい。  
 くに子 その影はどこにゐるんでせう。(入口に目を注ぐ)  
 秀雄 二人で誰見たいなことを云つて、どうしたのだ。(來れたやうに二人を見詰めて、二人の現實離れのした顔にキクツと胸を蕩かす)  
 久三 (くに子を注視して) 不思議だ。自分の本當の影を眼前に見てゐるやうだ。(獨言のやうな感嘆を洩らす)  
 くに子 (胸に應へたらしく) そんな目で人の顔を見るもんぢやないわ。(顔を外らしたがつと、秀雄の注意深い目にぶつつかつたの



で)あなたもそんな目で人の顔を見るもんぢやないわ。  
久三 僕はやはりあの時死んでゐたので、今地獄に住んでゐるのかも知れない。  
くに子 (強ひて戯談らしく)地獄に住んでゐる人間に訪問されちやたまらないわね。  
そこへ、下女が入つて来たので、三人の緊張した態度が破れる。  
下女 お客様のお連れ様がいらつしやいました。

久三 (夢から醒めたやうに、そして當惑してゐるらしく)僕の云つたのは本當だつたでせう。  
くに子 こちらへお通ししてお呉れ。  
下女、出て行く。

久三 御迷惑でも爲方ありませんね。  
秀雄 さつきから影々と云つてゐたのは、君の細君のことですか。僕はまだお目に掛つたことはないんだが、君は細君と此處で落ち合ふやうに打合せをしてゐたんですね。それなら早くさうと云つて呉れよばよかつたのに。  
久三 打合せなんかしてゐた調ぢやないんですか。  
くに子 あたし、此間彌生町で、奥さんの後

姿をちよつと覗いて見たつもりで、どんな方だか、よくは知りませんのよ。  
久三 僕に取つて、名譽なことぢやない。(調子のやうに云ふ)  
三人がそれらの思ひを注いで入口を見てゐるところへ、夏江が前よりもつと見事らしい服装をして入つて来る。しかし、来馴れてゐるところへ来たやうに、含羞んでゐる。  
くに子 さあ、此方へいらつしやい。  
夏江、挨拶する。秀雄は侮蔑を含んだ目を向けて答へる。  
久三 お前の住みたい家はこんな家なんだらう。……よく見て置くがいよ、……だけど、お前はおれに喰つついてゐるやうとも、おれの側を離れて行かうとも、こんな當世の文化的な家で、現代的の華やかな生活の出来る見込みはないだらうぜ。  
夏江 あなたは人様の前であたしに取を掻かせようと思つて、こんなところへ連れていらつしやつたの? (強ひて微笑を浮かべながら云ふ)  
久三 誰れが隨いて来いと云つた? お前が勝手に隨いて来たのぢやないか。

夏江 誰を仰有い。……あなたはあたしが隨いてゐなければ、一人歩きは出来ないぢやありませんか。今日此方へ来る途中でも、何處往來で倒れたか知れない。あたしが、抱起して介抱したからこそ、此處まで無事に來られたのぢやありませんか。  
久三 お前こそ誰つ吐きだ。  
夏江 あなたは伯父さんのお家で死にそこねた時から、記憶力が悪くなつて、御自分のしたことや言つたことさへ忘れるやうになつたんです。……今日はお前の望み通りに、身内の者に立合つて貰つて、最後の解決をつけてやると仰有つたぢやありませんか。……彌生町から彌生町に、彌生町から天神町に、あちらこちらと、あなたのお身内の家へ一軒々々引張り廻されて、此方のお家でああなたの御親類が品切れになるぢやありませんか。  
久三 最後の解決は金のことか、金なら何處へ行つても、おれのために出してくれる處はなさうだよ。此處には蓄音器もあるし本箱もあるし、油輪の類もあるし、いづれ、金庫には金が一椀詰つてゐるだらうが、それはお前やおれには何の關係もないのだ。誰めるがいよ。(秀雄やくに子に向つて)この女の身

來で轉んだのぢつたのと、僕の歩き振りにまで倣いおせつかいを云ひ出すのだから不思議だ。……どうも最後の解決が金銭だけで付きさうぢやありませんよ。  
夏江 付くか付かぬか、當然あなたの出すべきお金を出してから仰有るといふ。人のことよりも、あなたこそ影のやうな人だわ。あたしはこの通り丈夫な身體をして、ちやんと生きてゐるぢやありませんか。  
くに子 煩さいね。……影でも形でもあたしたちの構つたことぢやないから、早く歸つて下さい。……あたし、この人の置いて行つたあの薬を飲んだのかと思ふと、今でも胸が苦しつてならないんです。この人、あたしに飲ませるつもりでわざと置いて行つたのかも知れなかつた。そして、あたしがどうなつたかと、今日二人で様子を見に来たのかも知れないんだわ。(身ぶるひする。そして、秀雄に向つて)あなた、この人たちを歸して下さい。怖くつて、あたしの頭が變になりさうだか

夏江 誰れが隨いて来いと云つた? お前が勝手に隨いて来たのぢやないか。  
久三 誰れが隨いて来いと云つた? お前が勝手に隨いて来たのぢやないか。  
夏江 誰れが隨いて来いと云つた? お前が勝手に隨いて来たのぢやないか。  
久三 誰れが隨いて来いと云つた? お前が勝手に隨いて来たのぢやないか。

の代金が五百兩になつてゐるんださうですがね。全體それくらゐの値段がこの女にあるんでせうか。  
くに子 久三さんの言葉はまるで無稽漢のやうね。自分のことでもなくつても、あたし聞きづらくつてならない。何だか怖いやうだから、もう歸つて下さい。  
久三 あなたの怖がるのは、僕よりも、僕の連れのこの女のことなでせう。でも、怖がるには及びませんよ。こんなに見えても、この女はあなたに敵意を有つてはゐやしませんよ。  
秀雄 用事がなければ、今日はこれで歸つて下さい。  
久三 何處へ行つても歓迎されない僕だ。叩きだされぬさきに歸りますがね。僕は強請に來たのぢやありませんよ。……本當は僕に影の如く隨き纏つてゐるこの女から綺麗に離れようとしてまご／＼してゐるんですよ。自分の家にゐる間は、二人がでんでに勝手な獨言を云ひ合つて、お互ひに相手があるなかつたらと思つてゐるくせに、僕が他所へ出ると、此奴は乾度あとから隨いて來るんだから不思議だ。そして、さつき云つたやうに、僕が往

來で轉んだのぢつたのと、僕の歩き振りにまで倣いおせつかいを云ひ出すのだから不思議だ。……どうも最後の解決が金銭だけで付きさうぢやありませんよ。  
夏江 付くか付かぬか、當然あなたの出すべきお金を出してから仰有るといふ。人のことよりも、あなたこそ影のやうな人だわ。あたしはこの通り丈夫な身體をして、ちやんと生きてゐるぢやありませんか。  
くに子 煩さいね。……影でも形でもあたしたちの構つたことぢやないから、早く歸つて下さい。……あたし、この人の置いて行つたあの薬を飲んだのかと思ふと、今でも胸が苦しつてならないんです。この人、あたしに飲ませるつもりでわざと置いて行つたのかも知れなかつた。そして、あたしがどうなつたかと、今日二人で様子を見に来たのかも知れないんだわ。(身ぶるひする。そして、秀雄に向つて)あなた、この人たちを歸して下さい。怖くつて、あたしの頭が變になりさうだか

夏江 誰れが隨いて来いと云つた? お前が勝手に隨いて来たのぢやないか。  
久三 誰れが隨いて来いと云つた? お前が勝手に隨いて来たのぢやないか。  
夏江 誰れが隨いて来いと云つた? お前が勝手に隨いて来たのぢやないか。  
久三 誰れが隨いて来いと云つた? お前が勝手に隨いて来たのぢやないか。

されるの? (久三を睨ますやうに云つて)あなたはおつちでもこつちでも追出されて、しまひには、地球の外へでも追出されなければ收まりがつかない人なのね。……意氣地がないつたらありやしない。  
久三 此處もおれの家ぢやないから爲方がないさ。  
久三は座を立ちかけたが、その際、冷笑憎悪を含んだ顔付をする。秀雄はふとその現實離れのした相手の顔に恐れを感じたらしく、我知らず久三の側を離れて、逃げるやうに奥へ入る。くに子も同じやうな態度で隨いて行く。  
久三 どうしたのだ? 可笑しな人だ。追出さうとした人が逃げた行つたぢやないか。  
夏江 あなたが彌生町の伯父さんの顔を見て死にたくなつたやうに、あの人たちはあなたを恐れたのよ。(ふと、悪辣な目を光らせて)さあ、この隙間に金庫のお金をさらつていらつしやい。(權威をもつて命令するやうに云ふ)  
久三 金庫なんか何處にも見えないぢやないか。  
夏江 あなたは目まで役に立たなくなつたの?

金庫はそこにあるぢやないの？

一方を指差すと、久三は小さな皮文庫を見て、そちらへ寄つて行く。

いやらに。彼女はスツと出て行く。久三はさつき開けた皮文庫をソツと開けて、中を覗いて合點の行かない額付をして、それを閉ぢる。

夏江 それを持つて、早く庭から逃げていらつしやい。

くに子入つて来る。

久三 おれはまだ泥棒をしたことはないよ。お前はおれに泥棒までさせなければ承知が出来ないんだ。地球の外へ追出される人間だと、お前に云はれたおれだ。泥棒を遠慮するには及ばまい。

くに子 あなたはなぜお歸りに来らないの？ 僕も物欲しさうな目をして、あつちこつちの身内を訪ねて行くものだから、乞食か強請のやうに思はれて、僕も落されたものだね。(くに子の額を見上げて) だけど、あなただつて随分憔悴したやうだ。治助さんは何もでもないやうに云つて突つてゐたつげが、毒がまだ抜け切らないぢやないかしら。不眠のくに子さんは思はれないほどに寝れてゐる。大山家の一族のうちでは、類のないほど美しくかつたくに子さんと思はれないが、僕の目がどうかつたのか。

同時に紙包を抛出して引込む。

久三 男の僕は鏡を見ないから、自分の顔がよく分らないのだけれど、女のあなたに自分の顔を分らないのは變だね。僕の連れ女の顔が荒んで来たのだけれど、あなたのウチやない。

久三 金か。紙包の方へ寄つて覗込む。夏江も不思議さうに覗込む。

久三 それは秀雄さんは仕合せだ。僕には、あの女が行つちまつても、僕の道連れになる候補者は一人もないんだ。そして、あの女は、僕の體力でも過去の記憶でも、みんな奪つてしまつたのだから、新しい外に女に捨てる力は、僕には何も残つてゐないんだよ。

久三 おれは泥棒の代りに乞食にされたのか。お前が欲しいのなら、それを持つて歸れ。

久三 あの女には未練は残つてやしないつもりだが、僕のいやな記憶のありつただけを持つて

夏江 (喜んで) 持つて行つてもよくつて？ : あなたも早くお歸んなさい。途中で轉ばな

れど、それよりも、あたしの知らない女で、誰か譯のある女が、外にありさうに思はれるの。

久三 それはあなたの邪推ぢやあるまいか。僕の女などは、外に手頼りになる男は、はしくれもありやしないのに、さもありさうなことを云つてゐるんだよ。

久三 男の僕は鏡を見ないから、自分の顔がよく分らないのだけれど、女のあなたに自分の顔を分らないのは變だね。僕の連れ女の顔が荒んで来たのだけれど、あなたのウチやない。

外に行かれるのは、僕のやうな男でも不愉快に思はれるね。

久三 どうもこれらしいな。……讀んでもいいんだな。(と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら) なる程、女の文章だ。

くに子 あたしだつて、自分の身はどうなつてもいよとしても、秀雄と秀雄の思つてゐる女とが一しよになつて、あたしを囁ひ話の種にすることが、いましくつてならないの。

久三 どちらもこれらしいな。……讀んでもいいんだな。(と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら) なる程、女の文章だ。

二人は釘付けになつたやうに、相對して坐つて、相手の顔を見詰めるが、取りすまして話をしつゝゐる。

久三 どうもこれらしいな。……讀んでもいいんだな。(と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら) なる程、女の文章だ。

久三 くにとさんと差向ひで話をするのは、何年振りだらうな。

久三 どうもこれらしいな。……讀んでもいいんだな。(と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら) なる程、女の文章だ。

くに子 さうね。……でも、そんなことはどちらでもないぢやありませんか。

久三 どうもこれらしいな。……讀んでもいいんだな。(と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら) なる程、女の文章だ。

久三 成程、それはどちらでもいい。譯だ。僕は昔から、誰れにも歡迎されない男だつたのだから、他人に、思出の夢を描かせる力もあ

久三 どうもこれらしいな。……讀んでもいいんだな。(と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら) なる程、女の文章だ。

りやしない。……それで、今くにさんが僕に話しかけてたことは何だつたかな。……あ、さうか。(取りすました調子にかへつて) 秀雄さんは品行方正だと聞いてゐるが、あなたの外にも、愛してゐる女があるんですか。

久三 どうもこれらしいな。……讀んでもいいんだな。(と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら) なる程、女の文章だ。

くに子 どうもさうらしいの。こなただまであたしの家へよく出入りしてゐる若い女もあつたのよ。その現代的な女も少し怪しいんだだけ

久三 どうもこれらしいな。……讀んでもいいんだな。(と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら) なる程、女の文章だ。

久三 さうですか。あいつ、まだそこらウロウロしてゐるのか。

久三、詰らなさうに出て行く。秀雄、笑ふ。くに子も、今まで黙へてゐた笑ひを洩らす。

くに子 あんな人たちに恐れて逃出すなんて、あなたも意氣地がないのね。あたし、押搦つて見たのよ。反古籠同様の皮文庫を、金庫とか秘密の手紙入れとか思つて、頻りに目をつけるんだから、滑稽でならないわ。

秀雄 あの人は貧乏ばかりしてゐても、不潔物を考へてゐるやうな男だから、突詰めて氣でも狂つたのかと思つてゐたら、何のこつた。元來が骨までも愚鈍な人間だつたのだね。

(笑ふ)

くに子 はじめからそのつもりで、もつと押搦つてゐればよかつたのに、あんな人たちの云ふことを生真面目に聞いて、いゝ加減、頭を痛めたことぢやない。(笑ふ)

秀雄 でも、お前、あの人に金をやつたのぢやないか。

くに子 五圓のお札をたつた一枚。……あの人はあんな紙幣を百圓札とも思つてゐたんでせう。(笑つたが、ふと氣になつたやうにして、いゝだらうけれど、あたしのことを、面白づくで久三さんなんか言觸らしちや困るよ。あたしが馬鹿にされるやうで……)

秀雄 そんなことはまあ、どうでもいいぢやないか。そして、彌生町へはお前も今夜出掛けることにしたらいいだらう。

くに子 彌生町の麻接室のことを思ふと、あたしゾツとするわ。當分あしこへは行きたかありませんよ。

秀雄 だつて、お父さんの遺言を聞きに行かない譯には行くまい。

くに子 あたし、まだ家の外へ一歩も出る氣にはなれないの。

治助 ぢや、姉さんはまだ身體が回復しないから來れないと云つて置からうか。

くに子 何とでもいゝやうに云つておくれな。

治助 それで、用事は相済みだ。今日は急ぐから、これで失敬しよう。

秀雄 治助は突立つたまゝそんなことを云つて、秀雄に會釋して出て行く。

秀雄 あの男も不潔とは違つて、いやにそれはしてゐる。今日は來る奴がみんな變だよ。……おれも何だか頭が絞れて來たから、氣晴

に)でも、あの人、あたしの顔を侮辱したやうな口を利いてゐたけれど、あたし、そんなに見つともなく寝れてゐるんでせうか。

秀雄 そんなことはないよ。もう四五日も休養してゐたら元のやうになるんだから、安心しておいでよ。

くに子 さうかしら。

そこへ、治助が案内も乞はず、帽子を被つたまゝ、突如として入つて來る。

秀雄 君はそこで染井に會つたらう。

治助 染井? 久三さんにか。いや、會はなかつた。どうしたのだ?

秀雄 今まで此處にゐて、今家を出たばかりなんだが。

治助 あの人(君の家)なんかへ遊びに來るのは變だね。(それには興味を感じないらしく軽く云つて、それからくに子に向つて)それよりも、今夜姉さんに、彌生町へ來て貰へまいか。……お父さんが、われ／＼四人の兄弟を集めて、遺言見たいなことを云ひたがつてゐるんだよ。

くに子 遺言? お父さんはそんなに病氣がいけないの?

治助 なに、遺言の必要があるほど悪かあないらして、そこらを散歩して來ようか。いゝだらう。(くに子の同意を乞ふやうに云ふ)

くに子 あたし、今日は一人でゐるのが、何だか淋しくなつた。

秀雄 ぢやお前も一しよに散歩するさ。

彼れがさう云ひ来て、奥へ入つて行くと、くに子も後から入つて行く。

間もなく、久三が庭の裏手から入つて來て、破れた態度で、部屋の上り口に腰を掛ける。「誰れもゐないのか」と、獨言を洩らす。そしてふと、蓄音器に目を留めて、上へ上つて蓄音器をかける。偶然選んだのは悲調を含んだ音楽であつた。それに耳を傾けながら、彼はその前に寝そべる。

と、そこへ、くに子が顔を出す。

くに子 (吃驚して) あなたはまだお歸りにならなかつたの? 一つの間は何處から此處へいらしたの? ……そこにあるのは、眞實の久三さんなのかしら。(夢に醒されてゐるやうに云ふ)

久三 僕も、自分で本當の久三のやうに思はれないのだよ。本當の久三はやはり、あの時に死んだのだね。さつき秀雄さんの話だと、僕の連れの女が、僕を門の外で待つてるといふ

んだがね。われ／＼兄弟が親の言ふことを聞かなかつたり、いろ／＼親困らせをしたりするものだから、親爺も失望してゐるんだらう。

くに子 だつて、あたしは親困らせなんかしないわ。結婚だつて親の命令に逆はなかつたのぢやないか。

治助 ぢや、遺産は姉さんに全部やると遺言するか知れないよ。

くに子 まさか。

治助 とこで、兄貴なんかとも相談してゐるんだが、親爺が若し財産配けの話でもしたしたら、みんなが口を揃へて、財産なんか入りませんと返答したいんだよ。衆議一決してゐるんだから、姉さんもさう云つてお呉れよ。

くに子 (不思議さうに) なぜそんな話らない相談をしたの?

治助 親爺が舊弊な頭でわれ／＼を見くびつてゐるから、皆なでさう云つて思ひ知らせるのだ。……第一、姉さんは金なんか入らないだらうし。

くに子 あたしだつて、使ひ切れないほどのお金を持つてやしないよ。……それよりも、お前は、結婚でも何でも、自分の事は自分の勝手に

ことだから、そのつもりで出て見ると、何處にもゐないんだ。それで、家のまはりウロウロ捜してゐるうちに、またこの部屋へ入り込んだ譯なんだが、……

くに子 早く歸つて下さい。

久三 (泰然として) さういふくにさんも、本當のくにさんかい。あの時、彌生町の家で二人は同じ薬を分け合つて飲んだのだ。昔の久三とくに子の抜け殻が此處にゐるんだね。抜け殻同士が並んで昔の夢を見てゐるんだよ。

くに子 あたし、あのお薬はあなたのために飲んだのぢやないわ。

久三 僕だつて、あの薬をくにさんのために飲んだのぢやなかつた。……でも、自然にそんなことになつたのだよ。この蓄音器は、二人の夢を弔ふのに相應しい音楽だ。

くに子 は骸骨が倒れるやうに、久三の側に倒れて、非現實な顔を並べる。

蓄音器は鳴りつゞける。

光秀と紹巴

人物 明智光秀、明神左馬助、同次右衛門尉、齋藤内蔵助、藤田傳五、清尾勝兵衛、野武士三人、侍者、飛脚など

(一)ノ一

時は、五月二十八日夜。所は、愛宕山の西の坊。書間の連歌興行に用ひた文臺が、書類筆視などを載せたまま置かれてある。その側にほの暗い燈火が置かれてあつて、寢床を並べて寝てゐる二人の姿をかすかに照らして

ゐる。一人は明智光秀(五十五歳)で、一人は連歌師里村紹巴(五十歳)である。光秀、ふと何ものかに脅かされたやうに起上つて、室内を見廻し、やがて窓を開けて外を見る。紹巴も頭を上げて、近づくさうい目で光秀の方を見る。光秀、何か考へながら寢床へ戻つたが、横になるのを忘れてゐるやうに、蒲團の上に乗る。

紹巴 紹巴は御氣分がお悪いので御座いますか。

光秀 いや、氣分は悪くはない。(慌てて打消して)おれは面白い句を考へてゐたのだ。

紹巴 面白い句と仰有るの？(光秀の顔を見守つて)今日の百韻の連歌のうちでも、殿様のお作りなされた發句はこの外凛然としてゐるのに驚きました。それに飽足りないで、もつと奇抜な面白い句をお考へ遊ばしてゐるので御座いますか。

光秀 いや、年甲斐もなくあんな血氣に逸つた

やうな句を作つたことを、おれは後悔してゐる。古格に通じた其方などの氣にも入らないに違ひない。

紹巴 (感慨を籠めて)わたくしどもの守つてゐる連歌の道はもう末で御座います。誰れも彼れも、前人の模倣ばかりをして、千篇一律無味乾燥になりましたから、近年ますます連歌の衰へるのも無理は御座いますまい。山崎宗鑑や荒木田守武の聞いた俳諧の道に心する者を、一概に下賤な好みとして嘲る譯にはまゐりません。

光秀 其方がそんなことを云ふのは不思議だ。廣安の新式目とか、宗祇や兼良の新式追加とか、舊來の連歌道の講評を後生大事に聴かせて呉れてゐた紹巴先生が、今日の車俗な流行を是認するのは可笑しいぢやないか。

紹巴 さう仰せられると一言も御座いません。……わたくしも今夜は眠つてゐながら、いろと物を考へて居りました。

光秀 其方はさつきまでよく餅を擡いでゐた。紹巴 でも、あなた様がをり／＼溜息をお吐き遊ばすのを、夢のうちに耳に入れて居りました。

の闇の中に、鼻が鳴いてゐるが、其方の目が鼻の目のやうにおれには見えるよ。

紹巴 どうか左様なことは仰せられないで、お心を鎮めておやすみ遊ばしませ。夏の短夜は明けに間も御座いますまいから。

光秀 おれはさつきは、夜の明けるのを待焦れて、窓の外を覗いて見たのだが、今其方の顔を見てゐると、もつと夜が續けばいいと思はれるのだ。

紹巴 あなた様の仰有ることが、わたくしにはどうも合點がまゐりません。

光秀 おれも合點が行かない。(燈火の方を見て)その弱々しい燈火を、おれの溜息で吹消したら、部屋の中も眞暗だ。外の暗さにまけない闇の夜になるのだ。おれと其方との二人きり、闇の世の中に差向ひでゐることになるのだ。

紹巴 どうか燈火はお消しなさないやうにお願ひ申します。

ふと、窓から洩れ来る風で燈火が消える。舞臺眞暗になる。

紹巴 (震へ聲で)殿様、どうなされました。光秀 おれはどうもしない。燈火は自ら消えたのだ。……其方とおれとは暗闇の中に向ひ

光秀 おれが溜息を吐いたかしら。それは其方の夢ぢやないか。……おれは今日、連歌を終へたあとで、直ぐに丹波へ歸城すればよかつたのに、皆々の風流な話に引込まれて愚圖々々してゐるうちに歸りそこねてしまつた。こんな静かな處で考へ事をすると、却つて頭が疲れるものだな。其方などは氣樂で羨ましいよ。

紹巴 それはあなた様は中國節御出陣の目が迫つて居りますから、何かとお心遣ひをしていらつしやるので御座いませう。

光秀 おれも長い年月、戰場では艱難辛苦して來たのだ。今度の門出に格別に心を遣はす譯はないのだが、この頃の蒸暑い鬱陶しい空模様がおれの頭を壓しつけるやうで爲様がないう。今も外の爽かな夜風に吹かれて頭を冷すつもりだつたが、今夜は外の風もじめ／＼していけない。……かういふ時には氣持のいい晴々とした句は思はずばないものだ。

紹巴 左様で御座いませうか。でも、一時は今天が下知る五月哉……御元氣過ぎるほどのいき／＼とした名句では御座いませんか。

光秀 あんな句が何で名句なことがあるものか。徒らに文字を並べただけのものだ。西の

坊の脇も平凡であつたが、其方の附けた第三の句だけは、何だか譯がありさうだ。意味深長に思はれるよ。おれは、さつきも、獨りでその句の意味を考へてゐた。……花落つる流れの末を關とめて。

紹巴 (慌てて)打消すやうに)わたくしの句には何の意味も御座いません。

光秀 いや、さうであるまい。連歌興行の折から、其方の目がおれに何か云つてゐるやうに思はれてならなかつた。不歸は鬱陶な風流人の其方の顔がおれには眩しくつてならぬのだ。

紹巴 どうか左様なことを仰せられないやうに。(恐怖に打たれたやうに)わたくしには、今日はあなた様のお眼力が胸に響いて怖う御座います。

光秀 いや、其方の眼力が恐ろしいよ。耳を留めて聞いて見ろ、何處かで鼻が鳴いてゐるやうに。

紹巴 (耳を澄まして)なるほど鳴いて居ります。それに一時止んでゐた雨の音がまた微かに聞えだしました。

光秀 外は眞暗だ。おれが生れてから見たことのないほどに氣味の悪い眞暗な闇の夜だ。そ

合つてゐるのだが、鼻のやうな其方の目では光秀の心が見えるのか。紹巴 わたくしはあなた様の御息所預つてゐる平凡な連歌師で御座います。どうしてあなた様のお心の中が分りませう。：：：わたくしは燈火を持つてまゐりませう。

光秀 まあ待て。：：：其方は書問、連歌興行の最中に、おれが本能寺の清の深さ浅さを訊ねたら、勿體ないお訊ねだとおれを咎めたではないか。この頃降りつゞく五月雨に、何處の溝も水量が増したであらうのに、それを訊ねたのが何故いけないのだ？ 紹巴、答へず。

紹巴 (おどろししながら) お殿様は何故今日に限つてわたくしをお呼び遊ばすので御座いますか。光秀 安心しろ。只今は決して其方を憎んでゐないよ。躊躇遠慮してゐたおれを其方は刺戟して、行くところまで行くやうに決心させて呉れたやうなものだ。今書いた發句と、晝書いて神前に収めた連歌の發句と、同じ文字でも、おれの心の現はれが違ふのが、其方に分らないこととはあるまい。：：：書問はまだ文字に遊びがあつた。紹巴 何の御決心で御座いますか。光秀 空呆けるな。：：：其方の首を出陣の血祭りに備へるかはりに、其方を召連れて、闇の夜を廻るのだ。おれの發句がおれの出陣の旗じるしだ。：：：さつき其方に云つたやうに、人眞似ばかりして古くさい文字の並べつこをしてゐる連歌師も、生命懸けの戰場を往來したなら、少しは活氣のある句が作れるやうになるだらう。

紹巴の姿は見えない。光秀 紹巴は何處へ行つた？ 小姓 わたくしどもの臥所へまゐつて居ります。光秀 紹巴を此處へ呼べ。それから、夜明け前に出立するから、其方どもも今から支度に取り掛れ。小姓 はい。：：：まだ真夜中で御座いますが。小姓は燈火を點ける。光秀 暗ければ松明の用意をさせろ。闇にも雨にも構はないで急いで丹波へ歸るとおれは決心した。

小姓 お供の衆に左様申傳へます。小姓、次の間に入る。光秀、文臺を引寄せて、連歌用の懐紙に向つて、發句を書きつける。紹巴は恐る／＼入つて来る。光秀 これを讀め。紹巴、懐紙を受取つて讀みながら、光秀の顔色をぬすみ見する。光秀 (時は今天が下知る五月哉) (豪然と言放つて)：：：おれは闇を冒して雨を冒して歸城する決心をしたよ。それで、其方をも一しよに連れて行かうと思つてゐる。

光秀 自分で望まなかつても、其方はおれと一しよに行くところまで行かなければなるまい。其方はおれの目の届くところから放す譯には行かないよ。覺悟をしな。紹巴 (さうやく決心したやうに) ハイ。：：：では、何處まででもお伴いたしませう。光秀 おれは馴染の深い其方を決して苦しめようとは思つてゐないよ。たゞおれの心に最初疑ひを挿んだ其方を打ちやる譯に行かないのだ。だから其方も覺悟をして、行く先々で面白い句でもつくつて、おれを慰めて呉れ。そこへ、小姓入つて来る。小姓 御出立の用意が調ひました。光秀 さうか。：：：紹巴先生も丹波へ御同行なさるのだ。(紹巴に向ひ) さあ、行かう。一しよに闇の中をつゝ走らう。光秀、紹巴の腕を取つて引立てる。

紹巴 (當惑して) わたくしに龜山までお供しろと仰るので御座いますか。光秀 いやとは云ふまいな。紹巴 御仰せ付けは有難う御座いますが、旅の用意はいたして居りませんので、一度歸宅いたしました上で。光秀 それはいかんよ。用意も何も入るものか。：：：其方の目付顔つき言葉つきの一ツツが、おれの心を動かしてゐるのだ。鼻のやうな其方の口がおれの心を突つてゐる。おれは其方を離す譯には行かない、龜山へも連れて行く。戰場へも連れて行く。おれの發句の意味が實際にどう働か、其方のその目でよく見るやうにしな。

紹巴 臆病者のわたくしは、戰場は恐ろしい御座います。光秀 今日のおれの心の動きをいろ／＼に監視してゐた其方だ。これから先きも、おれの側に附添つてゐて、よく見てゐるといふ。(脇差を手を執つて) おれはお前と寢床を並べて、連歌の話をしてゐる間に、いく度この刀に手を掛けようとしたか知れなかつたのだが、今は其方に對して毛頭害意を持つてゐないから安心してゐる。

なりかけたよ。東の空もいくらか白んで来たではないか。今日は久振りで五月晴のうららかな空が見られさうだな。紹巴 御意に御座います。(苦しげに云ふ) 光秀 光秀はもう、昨夕のやうに喘息ばかり吐いてはゐないぜ。(ふと、向うを見つけて馬を留める) みんな馬を留める。向うから怪しい奴がやつて来る。：：：紹巴、其方の目ではあれが何だと思はれる？ 紹巴 さあ、何で御座いますか。光秀 吉か凶か。先見の明のある其方に分らないのか。：：：燈火を持つて夜道を急いで此方へまゐる奴は、おれの前途の運に關はりがありさうだ。紹巴 御座様の御運に關はりのあるかないかは分りませんが、今時こんな淋しい野道を通つてゐる人間は、たゞものでは御座いますまい。：：：さう云へば、わたくしも、何のために殿様にお聞き申して、こんな夜道を通つてゐるか、われとわが身が分らなくなりました。(泣き言のやうに云ふ) 光秀 歌詠みといふ者はよく／＼意氣地がないものだ。(笑ふ) そこへ、飛脚某が急足で入つて来て、ふ

と、光秀の一行を見て驚く。會葬して遺  
を避けようとする。  
光秀 オイ、待て。其方は何者だ？  
飛脚 龜山のお城へまゐる者で御座います。  
光秀 龜山の城へ？…おれはさつきからさう  
だらうと思つて見てゐた。…其方はいと  
こゝろでおれに會つたのだ。龜山まで行くには  
及ばん。用事を云へ。聞いてやらう。  
飛脚 (相手の顔を注視して) あなた様は龜山  
のお殿様でいらつしやいますか。  
光秀 おれが光秀だ。おれの顔も知らないやう  
な雑兵を使者に寄越したのか。…そんなこ  
とは兎に角、早く用事を云へ。  
飛脚 森お殿所様からの御書状を持参いたし  
ました。  
光秀 何、蘭丸からの手紙？ (昂然として云つ  
て) 見せる。  
飛脚 背負つた包の中から文箱を取出す。  
從者の一人、それを光秀に捧ぐ。光秀それ  
を開けて、從者の差出した松明の光にて讀  
む。  
光秀 承知した。  
讀終ると、さう云つて、ふと、手紙を松明  
の火にて燃す。

飛脚 (それに驚きながら) お殿所様への御返  
事は 承らせて頂く時にはまゐりますまい  
か。お殿様へ確にお届申上げた證據を  
頂きたら存じます。  
光秀 おれの返事が欲しいといふのか。欲しけ  
れば返事をしてやらう。  
飛脚、唯唯に飛脚を斬殺す。細巴、その他  
の從者驚く。  
光秀 信長公の御上意に、中國出陣の用意が  
出来たなら、人数のたきつき、家中の馬など  
の様子を見たいから、早速引連れて京へ上れ  
と仰せられたと、蘭丸からおれに知らせた  
のだ。主君の御寵愛を笠に着て、權柄づく  
でおれに物を云ふ森の小作の手紙を焼いて、  
使者を斬つた。(泰然として云つて) 細巴に  
はおれの心が分つてゐるだらうな。  
細巴 虚弱なわたくしは、疲勞して夢のやうで  
ございます。  
光秀 もう一走りだ。みんな急げ。  
秀馬を走らす。

愚なことであつた。  
内蔵助 殿には先日來、ひどく物を案じていら  
せられたやうに思はれました。愛宕山御參籠  
を終へて御歸城なされた時には、殿の御顔色  
はひどくお驚れなされたやうに拜察いたしま  
した。  
光秀 愛宕山中の一夜は、おれも気が狂つたか  
と思はれるほどの苦勞をしたよ。一夜のうち  
に頭の髪も白くなつたかと思はれる。(苦笑  
を渡らして、ふと調子を變へて) さつきこの  
關境で人数調べをした時に、内蔵助は、大丈  
夫一萬三千人は揃つてゐると斷言したが間違  
ひはあるまいな。  
内蔵助 それに相違は御座いません。皆よく  
食つて十分に休息してゐる元氣者ばかりで御  
座いますから、中國へ押出しても、戦場の騒  
ぎは、羽柴殿の軍勢に勝るとも劣る氣遣ひは  
御座いますまい。  
光秀 それは頼もしいな。(喜色を浮べて向う  
を見る)  
次右衛門尉 (もどかしさうに) 我々五人の者  
への内密の御談合は何事ぞ御座いますか。  
出陣の手配りはすでに出来上つてゐるので  
御座います。

光秀 ……まあ、おれの申すことを落着け  
てよく聞いて呉れ。…おれも上様の御取立  
で、三千石の小身から、俄かに二十五萬石も  
拜領いたすやうになつたのだが、岐良女で三  
月三日の節句には、大名高家列座の前で、面  
の皮を割られるやうな目に會はされたし、そ  
の後、信州上諏訪の御本陣では、千干に頭を押  
付けられて殿り飛ばされて、衆人御座の中で  
取を掻かされた。今度は今度は、徳川殿御養  
應のことから、無残なお叱りを受けて、俄か  
な西國出陣を仰せつけられた。こんな有様  
では、この次には、どんな我身の大事に及ぶか  
も知れないと、おれは案ぜられるよ。  
次右衛門尉 殿の御胸中は御推察申上げて居  
ります。  
傳五 わたくしども、人知れず無念の涙を呑ん  
だことも御座いました。  
光秀 この年齢になつて、子供か何ぞのやうに、  
打罵されてゐるのを見た者は、さぞ胸甲斐  
ない奴だとおれを嘲るだらうな。  
勝兵衛 上様はかやうな御氣性だとお思ひに  
なつて、御忍耐遊ばしたらよろしからうと存  
ぜられます。上様は特別に殿に對しておに  
しみを持つていらせられるのでは御座います

光秀 細巴は城内の何處にもゐないと云ふの  
だ。  
小姓 午の刻までは、あの方は死人のやうな顔  
して寝てばかり居りましたが、暫らく立つて  
部屋を覗くと、何處へか行つて姿が見つか  
りません。  
光秀 出陣の準備に取りまきれて、あの男の  
ことは忘れてゐたのだ。…あの臆病者、逃  
げたつてどうもしないだらうが、念のため、  
も一度捜して見る。  
小姓 出て行く。光秀床几に腰を掛けて、  
五月晴れの夕空を仰ぐ。そこへ、別督左馬  
助、同次右衛門尉、香澤内蔵助、藤田傳  
五、溝尾勝兵衛が人つて來る。  
左馬助 皆なを召連れてまゐりました。  
光秀 (ふと元氣づいて) かうして五人の揃つ  
たのを見ると、おれも非常に心丈夫だよ。  
左馬助 殿には人拂ひをなされて、我々五人の  
者に、火急な御談合があると云ふのだ。…他  
の仲間に向つて云ふ)  
光秀 おれ一人できよく物を思つてゐるより  
も、早く其方たちに相談すればよかつた。長  
い間おれと觀戰を共にして呉れた其方たち  
に、おれの心中を打明けるのを躊躇したのは

まい。  
光秀 勝兵衛はおれを忍耐力の薄弱な男とで  
も思つてゐるのか。  
勝兵衛 決して左様のこととは。…  
光秀 いや、今はくどくどと眞腹をこぼすため  
に、其方どもを寄集めたのではないよ。おれ  
は非常な決心をしてゐる。  
五人は目を張らして光秀を見上げる。光秀  
は床几を下りて、敷皮の上に居直り、五人  
の者に近く接す。五人は光秀の言葉に待設  
けてゐる。  
光秀 ……老後の思出に、一夜なりとも天下を  
おれのものにしたたいと決心をしてゐる。(獨  
言のやうに云ふ)  
五人の者驚いて言葉を發せず。  
光秀 有爲轉變、榮枯盛衰の世の習ひだ。一日  
たりとも望みを違ければそれでいと覺悟を  
極めた。…其方たちが同意して呉れたけれ  
ば、おれ一人で本能寺へ斬込んで、腹を掻切る  
までのことだ。…其方たちは何と思ふ。  
少時沈黙の後、  
左馬助 殿御一人の御胸中で左様思召された  
上は、天知る地知る我知ると申すたとへの通  
り、そのまゝでは済みますまい。まして、五

人の者にお打明けなされたのだから、御實行遊ばす外はあるまいと思はれます。内蔵助 これほどの大事をよくも御決心遊ばしました。

次右衛門尉 お日出たら存じます。わたくしども、多年の駒のつかへが下つたやうに存ぜられませぬ。

傳五 わたくしも雙手を擧げて御同意申上げます。

光秀 (勝兵衛を見て) 其方は何と思ふ。おれにもつと忍耐しんと申すか。

勝兵衛 どういたしまして。明日から、わが殿を上様として仰ぎ奉られるやうに相成りました。こんな喜ばしいことは御座いませぬ。この上の御談合は御無用かと存ぜられませぬ。

光秀 五人が五人とも同意してくれて、おれも満足だ。こんな時には、一人や二人は、唐人の古い言葉など持出して諷言立てをしたがるものだが、皆なが符節を合はせたやうに意見が一致したのは愉快だ。

左馬助 この頃は夜が短う御座いますから、これから直ぐに發足いたしませう。ほのくんと夜の明けると本能寺をひたくと取巻い

て、成るべくなら、五つより前に本能寺を片付けて、それから妙覺寺の若大将を討果すやうに手順をつけることにいたしました御座います。

光秀 おれもさう思つてゐた。人数の少い本能寺を片付けるに手間暇は入らないが、何よりも味方の士卒に二心を起させぬやうに注意するのが肝心だよ。

左馬助 その御心配は御無用で御座います。右へ向はうと左へ向はうと、士卒どもの出陣の氣持にかはりは御座いませぬ。毛利の軍勢へ斬込むのも、本能寺へ矢を向けるのも彼等の氣持に差別は御座いませぬ。京近くなつてから、殿が天下様にお成り遊ばすと觸れ廻らせませう。下々の者草履取以下にいたるまで、手柄次第で知行を興へると願はれま

たら、皆な揃つて喜び勇むに相違御座いませぬ。

内蔵助 から続つたら一刻も時を遅らせてはならない。速に出陣のお暇れを廻さなければならぬ。

光秀 氣おくれをするな。あつから立上る。

(二)ノ一  
六月十日の日暮頃、  
下鳥羽の陣屋、  
光秀、入浴後の體裝にて、例の陰鬱な顔して獨酌でチビ／＼やつてゐる。

侍者 紹巴どのがお日通りを願つて居ります

侍者 紹巴どのがお日通りを願つて居ります

侍者 紹巴どのがお日通りを願つて居ります

侍者 紹巴どのがお日通りを願つて居ります

侍者 紹巴どのがお日通りを願つて居ります

去しまして、申譯のいたしやうも御座いませぬ。

光秀 それはもうすんだことだよ。しかし、今度の事には、其方も關係があるのだから、時々はその方を思い出してゐたよ。

紹巴 恐れ入ります。(や、安心して) 上様がわたくしを憎んでいらつしやるやうに思はれましたので、お城を抜出して、丹波の山中に二三日清んで居りました。路用の金は持つてゐませんので、食ふや食はずのひどい思ひをいたしました。

光秀 馬鹿な奴だ。其方には骨折賃を興へようと思つてゐたのに。

紹巴 上様の御大業に何一つお役に立たなかつたわたくしにまで、御勝利をお慰分けをして下さるので御座いますか。天下様におなり遊ばしたお暇を、山中で承りまして、それでは、お祝ひに上らなければならぬと思ひまして、急いで京へ戻つてまゐりますと、洛中の地子御免恕の有難い御高札を拜見いたしました。御仁政に感涙を催しました。

光秀 泉のやうな目をした其方も、おれの側に隨いてゐなかつたから、眞相はなんにも分らないのだな。まあ一杯やれ。愛宕山

の西ノ坊の一夜のことが、おれには遠い昔の夢のやうに思はれるよ。

光秀 成程さう思ふだらう。おれもこの頃は連歌をつくる氣持にはなれず、外に憤憤晴らしの手段がないから、酒でも飲むことにしたのだよ。

紹巴 さすがは風雅の道を辨へていらせられるので、尊い御身分で、お手柄を楽しんでいらせられるのは恐入ります。

光秀 ところが、かうしてゐても、なか／＼風流な氣持にはなれないのさ。酒といふものは人の心を浮立たせるものと極つてゐるので、その名前に惚れて無理に飲んではゐるもの、ちつともうまくなまいよ。心が浮立ちもしない。酒と云へば、おれは七杯入りの大杯を内府殿に押付けられたことがあつたのだ。御耐辱すると、酒を飲まんのなら、これを飲めと、鼻先へ白刃を指しつけられたので、おれは夢心地で大杯を飲干したが、内府殿は

さては生命は惜しいものなんだと冷笑なされたよ。

紹巴 内府様は殘忍な方で御座いました。光秀 最早おれに、飲めない大杯を押し付けるものは、天下に一人もなくなつた譯なんだが、それがおれに取つていゝことだか悪いことだか、おれにサツパリ分らなくなつた。

紹巴 それはお身分が尊くお成り遊ばすほど、お心遣ひも多う御座いませう。わたくしどもは、上様御仁政の下に安穩に日が過ぎれば、それで満足いたすので御座います。

光秀 其方はおれの力で天下がさまると思つて訪ねて来たのか。愛宕の山の間に突抜けて来たおれの名が天下に輝きだしたのを慕つてやつて来たのか。

紹巴 もはやわたくしに對するお疑ひは解けたことと存じまして。

光秀 其方があの時おれの事を本能寺へ注進するか知れないと氣遣つてゐたのだが、それはもう済んだことだ。これからおれの側にゐて呉れ。決して無慈悲な取扱ひはしないよ。たとひ、まだ連歌の遊びをする氣にはなれなくつても、其方のやうな男が側にゐて呉れると、おれは好きでもない酒をチビチ

チビチビ

ど飲むよりは、氣晴らしになつていゝのだ。  
紹巴 上様のお側に置いて頂ければ、これほど  
仕合せなことは御座いませんが、戰場のお役  
に立たないわたくしが、お側でまご／＼して  
ゐましては、却つてお目障りになりさうに思  
はれます。

光秀 いや、其方も知つてる通り、おれは、内  
府殿や以前の朋輩とは好みが違つて、女子共  
を側に置いて酒宴を催すことには、あんな  
り興味をもつてゐないのだよ。其方のやうな  
男と、とぼけた話でもしてゐる方が、おれの  
柄に合つてゐるのだらうな。……ところで、  
紹巴、おれはひどく人氣の悪い男だよ。大望  
を遂げた今日、しみ／＼それに氣がついたよ。  
松永彈正でもおれほどには世間から毛嫌ひさ  
れてはゐなかつたらうな。

紹巴 わたくしには左様存せられません  
が……

光秀 其方は愛宕の山でおれの心を見破つた最  
初の男だが、今日以後のおれの運勢をどう思  
つてゐる？（相手を見つめる）

紹巴 わたくしはたゞの連歌師で御座います。  
上様の御運勢のよろしいやうにと願つて居り  
ますばかりで、世上の事は何事も分りません。

光秀 ウ、ン。（氣乗りのしない返事をする）

内藏助 出て行く。光秀はなほ、盃を飲め  
てゐる。顔には愛宕の色が加はる。ふと側  
の團扇を取つて煽ぐ。やがて、隣室から唸  
りかゝる。光秀、不思議さうに耳を傾  
けて座を立ちかける。

光秀 誰れだ？ 唸つてゐるのは。

紹巴 わたくしで御座います。紹巴で御座いま  
す。

光秀 どうしたのだ。腹痛でも起したのか。

紹巴 只今内藏助様に手足を縛られました。

光秀（微笑して）内藏助に縛られたのか。な  
ぜそんな目に會はされた？

紹巴 生死の騒ぎの場合に邪魔つたか、不吉な  
奴だとお怒りになつて、あの榮螺のやうな拳  
でわたくしの頸骨をお殿りになりました。そ  
れでわたくしを柱に縛りつけて、此處を動け  
なく仰有つて行かれました。

光秀 内藏助は素早い奴だ。……龜山ではおれ  
が其方の身體を自由にさせて置いたから逃げ  
られたが、さうして置けば大丈夫なんだ。

紹巴 どうかお揃ひ遊ばさないうで、お小姓衆  
でもお呼びになつて、わたくしの縛めをお解  
きなすつて下さいまし。

光秀 今まで神隠しに隠されてゐたやうな其方  
が、今日出抜けにやつて来たのは、何か深い講  
がありさうにおれには思はれるのだが。……  
兎に角、今夜から おれの陣所へ留めて置く  
から、その覺悟をしておいて呉れ。荒武者ばか  
りに取りまかれてゐるので、おれの息が詰り  
さうなのだ。

紹巴、當惑してゐる。そこへ、内藏助が入  
つて来る。

内藏助 紹巴殿か。悠長らしく酒のお相手など  
して。……早くお立ちなさい。

光秀 さう六ヶ敷く云ふな。この男は陣屋に留  
めて置いて呉れ。この男はおれの運を左右す  
る魔力を持つてゐるさうに思はれてゐないの  
だから。……今日出抜けに訪ねて来たのが、  
おれの仕事に關係がありさうに思はれてな  
らないのだよ。この男を歸さないで留めて置  
いて呉れ。……紹巴、其方は暫らく次の間に  
控へてゐる。

紹巴、おど／＼して入つて行く。

内藏助 あんた坊主をなぜお相手になさいま  
す。（機械的に云つて）……只今、郡山から  
使者が歸りましたが、筒井順慶はお味方  
に加はる望みは全くなりませんでした。郡山

光秀 連歌興行の折、おれの旗上げの心を最  
初に讀んだ其方だ。おれが、ドン詰りまで行  
つて腹でも切る時には、辭世の發句を詠むか  
ら、其方が脇をつけて呉れ。……連歌師は花  
見月見の句は詠めても、死生の境にはそれど  
ころでないか云ふのか。……しかし、無意味  
に苦しめては可哀さうだ。おれが縛めを解い  
てやらう。

光秀、座を立たうとしてゐるところへ、使者  
某アタフタと入つて来て、驚くや否や、  
使者 羽柴筑前殿の營裏の人数が、横州境に近  
づいたとの御注進が御座いました。

光秀 なに、秀吉が、……秀吉がもう此方へ向  
つたのか。

光秀、慌しく立上る。  
他の使者某入つて来る。平伏して、  
使者 上様には速刻御評定の席にいらせられ  
るやうにと、内藏助様がお願ひ申して居りま  
す。

光秀 只今出掛けるところだ。  
光秀、出て行く。  
「どうぞ、わたくしの縛めをお解きなすつ  
て下さいまし」と、紹巴の聲。  
「それどころではないのだ」と、光秀の聲。

の城内に兵糧を貯へて、我々に敵たふ準備  
をしてゐるさうで御座います。此方から持  
出した有利な條件さへ受入れる見込みはなさ  
さうで御座います。

光秀 あ、打算的の男がさう思つたのは、い  
よいよわが軍勢に勝目がないと見込んだのだ  
な。

内藏助 どうせ他人は頼みになりません。われ  
われだけでやれる所までやるより外爲様が御  
座いますまい。

光秀 婿の忠興にさへ憎まれたおれだが、かう  
まで四方八方から愛想を盡かされようとは思  
はなかつた。……しかし、内藏助、其方たち  
はまだおれに背かうとはしないか。

内藏助 何を仰せられます。衣服に火のついた  
やうな只今の場合に、無用な口を利いてはゐ  
られません。

光秀 それもさうだ。速刻評定を集めて置く。  
今夜の方針を極めよう。……どうせ、龜山出  
立の際のやうに、衆議一決といふ譯には行く  
まいな。

内藏助 しかし、仲間内は生死を一つに  
する覺悟がついて居りますから、それだけは  
御安心遊ばしませ。

(二)ノ二

陣屋の一室。あたりは薄暗い。  
紹巴、紙で縛られてゐる。  
齋藤内藏助、清尾勝兵衛と一しよに評定  
の室から出て来る。

内藏助（鼻を擧げて）此方が堅まつてゐないと  
ころへ、から早く秀吉に乗込んで来られちゃ、  
味方に勝負はないよ。……先づ坂本へ退却して  
籠城して工夫を凝らすのが差當つての良策  
だが、おれの説を用ひないと、大将もあとに  
なつて思當るだらう。

勝兵衛 しかし、秀吉に恐れて退却したやうで、  
味方の意氣が沮喪するかも知れないよ。どう  
せ此方には世間の人氣がないのだから、破れ  
かぶれでやつつけるより外爲方があるまい。  
上様も腹の中はさうなんだらう。お前も我儘  
して、多数の意見に従つて、やれるまでやつ  
て見て呉れ。

内藏助 どうせ、おれ一人で退却する譯には行  
かないからな。

二人はさう話しながら、ふと、紹巴の方を  
見る。

紹巴 内藏助様、お慈悲で御座います。この縛



めをお解きなすつて下さいまし。  
 内蔵助 坊主、まだそこにゐたのか。  
 勝兵衛 紹巴どのぢやないか。何をして縛られたのだ。  
 内蔵助 こいつ、大将のところへ胡麻を摺りに来やがった。それで忌々しいからおれが縛つたのだ。  
 勝兵衛 可哀さうに。  
 内蔵助 連歌師だの繪師だの禪坊主だの、今日の世に煩さい奴だ。大将もこんな奴に取合つてゐるから、勇気が減つて気が迷つていけないのだ。  
 勝兵衛 しかし可哀さうだな。風流といふ名は立派だが、鼎足の旦那がなければ生きてゐられないのだから。  
 内蔵助 此處の大將が天下を取つたから御機嫌何ひに來たのだらうが、今に、秀吉の軍が勝ちでもしたら、今度は猿奴のお籠の座を拂ひに出掛けることだらう。  
 さう云ひながら行過ぎる。勝兵衛も一しよに出て行く。紹巴、怒めしきうに見送つて、自分で縛めを解かうとして藻掻く。  
 そこへ光秀が考へ事をしながら入つて来て、紹巴に氣付かないで行過ぎようとする。

紹巴 上様、お慈悲で御座います。  
 光秀 ふとその方に氣がつく。  
 紹巴 どなたにお願ひしても細をほどいては下さいません。  
 光秀 其方がもう少し辛抱してゐれば、戰場に連れて行つてやらう。  
 紹巴 さつき、上様は縛めをほどいてやらうと仰有つたのを忘れになつたのです。……さつきお手づから酌をして下すつたやうに、恐れながら、お手づから縛めをほどいて下さいまし。  
 光秀 さつきと今との間に、光秀の胸には槍の穂先が突きつけられたのだ。其方の縛られた身軀はおれの身軀見たいだ。  
 紹巴 わたくしの目の前にも白刃が突きつけられてゐるやうに見えます。どうぞお許しなされて下さいまし。  
 光秀 なに、おれは其方を斬りも突きもしないよ。お前が秀吉の間者になつておれの軍の準備を索りに來たのぢやあるまいし。  
 紹巴 わたくしは上様の御勝利をお祝ひに上つたので御座います。  
 光秀 上様だの、御勝利だのといふ其方の言葉

は、冷かしのやうにおれには聞えるよ。……其處に坐つてゐて、おれのために辭世の句の用意でもしてゐろ。  
 光秀、行過ぎる。紹巴、怒めしきうに見送つてゐる。  
 紹武者幾人も通過する。怪訝、輕蔑、さまざまの表情をして紹巴を見ながら行く。  
 紹巴 わたくしも戰場へお伴いたします。縛めを解いて下さい。  
 皆な黙つて行く。あたりは暗くなる。暫らくして、覆面した野武士三人忍んで來る。  
 甲 大丈夫、この陣屋は空つぽだ。(次の室へ入つて行く)  
 乙 オイ、誰か縛られてゐるぜ。(紹巴の方を見る)  
 紹巴 助けて呉れ。  
 乙 お前は罪人か。  
 紹巴 お前たちは野伏か。それなら、この細をほどいて呉れ。おれが案内して一儲けさせてやらう。  
 丙 そんなことを云つて、この男を信用出来るだらうか。  
 乙 刃物を持つてゐないから大丈夫だらう。古

ぼけた弱さうな奴だ。  
 紹巴 おれは歌詠みだ。安心して縛めを解いて呉れ。  
 甲 待て。今の世に人間の云ふことが信用出来るか。此處の大將は大恩のある信長公を暗打に會はせたのだ。さういふ世の中に迂闊に他人の云ふことが信用出来るか。  
 紹巴 なに、羽柴前どのが其處まで攻寄せてゐるのだから、此處の大將の壽命はもう知れたものだよ。  
 甲 どちらが勝たらうと、おれ達の知つたことぢやないよ。負け軍の落武者どもの物の具を制するのが目のつけどころだ。  
 丙 全體お前は何をして縛られたのだ？  
 紹巴 (氣取つた口調で) 此處の大將を打取るつもりで、頭を刺つて連歌師になつて入込んだのだ。  
 乙 それがばれて縛られたのか。誰れに頼まれてそんな危いことをやる氣になつたのだ？  
 紹巴 信長公のお身内の方のお吩咐だよ。  
 甲 お前は見掛けによらない太い奴だな。信長公の仇討を一人でやらうとしたのか。  
 紹巴 おれを助けて呉れ。あとで御主君に御褒美を買つてやらう。

乙 そんな方なら、兎に角お助け申さう。  
 乙は手早く紹巴の縛めを解く。  
 甲 さあ、おれたちを案内しろ。  
 紹巴 おれに聞いて来い。  
 紹巴、あわたくしとしく脱出す。  
 (二)ノ三  
 十三日の夜、深更。  
 小栗栖の田舎道。  
 野武士三人。紹巴、疲勞した様子で一しよに歩いて來る。  
 甲 おれたちの目を忍んで逃げようたつて駄目だ。信長公のお身内の家來だと云つたのが、誰でもまことでも、光秀公の御陣所へ突出すことにしよう。大罪人を引捕へたのだから、いくらかの御褒美が貰へるだらうよ。  
 乙 いくらかの御褒美になるもんぢやあるまいが、二三日騙されてゐた腹癒せに突出してやらう。此處でぶち殺したところ一文にもなるもんぢやなしさ。  
 丙 何か由緒のありさうな男だが、おれたちの仲間に入らせる譯には行かないし。  
 紹巴 お仲間にも何にでも入りませうから、どうぞ生命はお助けなすつて下さいまし。

甲 天下様を暗打に會はさうとした奴が弱い音を吐きあがる。  
 紹巴 本當はわたくしは、詰らない連歌師で御座います。  
 甲 さう云つて、おれたちを誤魔化さうとするのか。お陣所へ連れて行つて調べて貰つたら分ることだ。……おれたちもこの頃は、一日に會はなかつた。  
 乙 何處かへ御奉公しようとしたつて、今日の世ぢや、何處の大名が勝つか負けるか分らんのだから。  
 丙 いや、強い方を選つて行つたつて、戰場へ出て殺されちや三文にもならないからな。どうせ生命がけなら、追ひつかはれないで、隙間を見て野糞をした方が氣が利いてゐる。  
 乙 それにしても、この頃のやうに不漁が續いちゃ爲様がない。  
 甲 まあ、こんな坊主でも飯の種にして見るか。  
 丙 しかし、此奴は本當に、藥刑になるほどの大罪人だらうか。空栗ねらひのコソコソ泥棒だつたら、陣所へ連れて行つたつて、三文にもなりやしない。  
 乙 この面魂はどうしてもたゞの者ぢやない

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

# 人生五十年

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

「自分がかつて感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場であつたらう」と、

を纏はつて小さい娘に引張らせるやうな滑稽な遊戯をしては、みんなでキャツキャツ笑つたりすることもある。

丸尾は私よりも三つほどの年上で、學課の出来は悪かつたが、快活で人がいゝので、私は入學當時から親しくしてゐた。丸尾自身には信仰はなかつても、基督徒の家庭に育つた爲めか、男女關係の話は決して口へ出さなかつたが、彼れが無氣だか有氣だか、二人の娘に戯れてゐる有様は無言のうちにも私の官能を刺戟した。宣教師の娘が姉妹で、庭に設けられてあるシートとかいふ遊戯機械に乗つて、冴えた聲で何か歌りながら遊んでゐるのを見ると、天國の天使の戯れのやうに思はれたが、丸尾が私の宿の娘たちと戯れてゐるのを見ると、下等ないやらしいものやうに思はれた。けれど、私は一しよになつて笑ふやうな氣になつて目を注がないではゐられなかつた。初夏の頃で薄着をした娘たちは遊戯に興じると、自然に肉體のあちらこちらを露出した。

私は減多に打解けた口を利かなかつた姉妹とも、丸尾の動作によつて自然に親しまされるやうになつた。「丸尾さんは今日は来なさらんのか知らん」と、姉妹のおきよは時々待受けて

して轉居することにした。其家には口數の多い主婦と、平生はムツツリしてゐて時々は癡癡を起す亭主とが、二人の娘と住んでゐた。その頃の私の目には、姉妹は餘程歳を取つてゐるやうに思はれたが、その實二十を左程過ぎてはゐなかつたのであらう。

私は物置部屋の側の半分は板敷で、畳は二疊しか敷かれてゐない處を借りたのであつた。自炊する筈であつたが主婦が、當分は此方で一しよに御飯をお上んなさいと云つて呉れたので、さうすることにした。前の宿にゐた醫學生はよく、「米が十錢すりや唐米は臭い。ノウちよさ」といふ流行唄を唄つてゐたが、まだ諸式の應い頃だつたので、賄付で宿料が一ヶ月二圓であつたと覚えてゐる。尤も食物は粗悪で、朝晩の副食物は鹽辛い漬物きりのことが多く、晝飯にだけ野菜か豆腐くらゐがついてゐた。(前の宿にゐた時も同様だつたことを思ふと、その頃日本人の生活程度がいかに低かつたかが察せられる)ある日、亭主は晝飯の副食物を焼豆腐にしると命じて置いたのに、たゞの豆腐を用ひたといつて、主婦を叱りつけたが、主婦はそんなことを聞いた覚えはないと強辯して、恐ろしい夫婦喧嘩がはじまつた。側で食事をしてゐるやうに云つてゐたが、ある日珍らしく一人で私の部屋へ入つて来て、

「貴方は今夜××のお祭を見に行きませんか。丸尾さんが来たら連れて行つて貰ふことにして居るんですけれど」と云つた。××は宿から半里ほど離れた田舎であつた。

「行つてもよろしい」と、私はこの時に躊躇しないで答へた。

待つてゐた丸尾は夜になつても来なかつたが、私は姉妹と連立つて祭見に出掛けた。蛙の鳴いてゐる田圃を渡る初夏の夕風は、太鼓の音を聞かずに傳へて来た。神社の森から洩れる御火が遠く見られた。田舎育ちの私にも、その夜の田舎景色が何とも云へず面白かつた。姉妹の顔までも不斷に美しく見られた。私は打解けた話を仕掛けることは出来なかつたので、讚美歌を唄つたり、半歳ばかり田舎の漢學塾にゐた間に習ひ覚えたい詩吟をやつたりして、獨りで浮れてゐた。

「丸尾さんよりもお上手ちや」と、姉妹は感心してゐた。

神社に近づくとつれて、參詣の人々で小徑も

た私は迷惑しながら腹の中でこの夫婦を侮蔑してゐたが、今三十年目にその夫婦喧嘩の有様を思出すと、必ずしも笑ひ事ではないやうに思はれる。(大抵の人間の家庭生活にはこの夫婦の言合ひ見たいことがつねにあるのであらう)

私は中休暇に郷里へ歸つたら新鮮な魚がウンと食べられると期待してゐたので宿の食物の良否に心を悩ますことはなかつた。それに學校の歸り途に、しばしば、御膳屋や汁粉屋へ獨りで立寄ることもあつた。机の引出へは賣來豆や氷砂糖をよく貯へてゐた。さういふ物をボリ／＼噛みながら、教科書その他の書物を讀んだ。

その家の者は何によつて生計を立ててゐたのか分らなかつたが、亭主は大抵半日ぐらゐは畑を耕してゐた。二人の娘は、宣教師の娘とは人種が違つてゐる如くに容貌風姿も違つて醜かつた。私は彼女等と減多に話を交へることはなかつたが、同宿の丸尾——この宿の紹介者——は、遊びに来るたびに娘たちと面白うに話をしてゐた。私の部屋へ連れて来て、私の煩さがるのを構はないで、讚美歌を教へてやつたり、指角力を取つたり、あるひは自分の首へ紐

じめて敬愛の念を寄せて異性を眺めたのであつた。後年外國の小説を讀んで、アマンチヤタなど美しい若い女に接する時にも、屢々岡山で見た宣教師の姉妹を思出すほどに、彼女は深く私の幼い胸に刺された。

しかし、私は在學中一度も彼女に接して彼女の言葉をハッキリ聞くことが出来なかつた。私たちが教へを受けた會話の教師は、鼻ばかり高い精氣の極めて醜い老嬢であつた。「西洋人にもいろ／＼あるんだなあ」と、私は二人の女を比較してゐた。

學校は傳道を目的としてつくられてゐたので、學生は五年級を合して三十人に足らなかつた。半ば信者の子弟であつたが、その他は官立の中學へ入れないやうな少年であつた。大抵の學生は自宅から通學してゐたが、私は素人下宿に泊つてゐた。一年間の在學中私は四五度も轉居した。そして一度は轉居によつて危いところを免れたのであつた。

二

はじめは軍人の未亡人の家に下宿してゐた私は、同宿の二人の醫學生が屢々酒を飲んで騒ぐのに惱まされたので、同宿者のない家を探

はじめは軍人の未亡人の家に下宿してゐた私は、同宿の二人の醫學生が屢々酒を飲んで騒ぐのに惱まされたので、同宿者のない家を探

はじめは軍人の未亡人の家に下宿してゐた私は、同宿の二人の醫學生が屢々酒を飲んで騒ぐのに惱まされたので、同宿者のない家を探

ちがつてゐた。  
 私の心身にも、異性に對するある拘りが出来  
 かつた。丁度その頃市中を散歩してゐるうち  
 に、ふと思ひついて、父の知合ひで私の保護人  
 になつてゐる人の家へ寄ると、其家の近所に、お  
 となしの學生を置きたいといふ家があるから、  
 移つて来ないかと勧められた。連れられて行つ  
 て見ると、家の中は所かで部屋は小綺麗であつ  
 た。私は難居したくはなかつたのだが、保護人  
 の熱心な勧めを拒ける理由はなかつたので、わ  
 れにもなく難居することになつてしまつた。  
 「私の家に何かお氣に入らんことがあるんです  
 か」と、姉は不平らしく云つた。  
 「××さんの言ふことを聞かん譯には行かん  
 の娘には會はなかつたし、さして思ひの残る  
 ことはなかつたが、もう十日か二十日でもその  
 宿を動かさないでゐたら、私の一生は變つて  
 ゐたに違ひないと今回顧すると痛切に感ぜら  
 れる。

男女關係について思慮が出来たのは、その後  
 二三年経つてからであつた。私は宣教師の私  
 塾には一年ほど學んだだけで退學して、あと一  
 年ばかりの間は、病氣のために、また故郷でブラ  
 ブラして目的のない日を送ることになつたが、  
 その間は絶えず陰鬱であつた。日に觸れ耳に響  
 れるものがみんな呪はしかつた。二十歳の發育  
 盛りに病患に傷つけられたものは、人間の有つ  
 て生れた幸福の芽も、後で取返しつかないほ  
 どに萎けてしまふやうに思はれる。十五六歳ま  
 では晴々としてゐた私の頭が、その後は絶えず  
 曇つてゐるやうに思はれる。爲方なしに宗教の  
 方へ入つて行つたのであるが、私の宗教には明  
 るい幸福はなかつた。いつも曇つてゐた。  
 不治の病氣に罹つたものが、急に宗教心を起  
 して、病氣は神の恵みであるとか、あるひは神  
 を見たとか云つて、自ら慰めてゐるのはいた  
 いたしくはあるが、私は早くから自己の経験に  
 よつて、さういふ自己欺騙をやつてゐる人たち  
 に對しては寸毫の敬意も寄せられなくなつてゐ  
 る。…他人のことは兎に角、私は次第に素直  
 に伸びかゝつてゐた異性に對する情念が、病  
 氣と暗い宗教とのために、行手の路を杜絶され  
 てしまつた。

近年流行してゐる新進作家の自傳體の長篇  
 小説を讀むと、どれも極つて功名心と戀愛との  
 交錯が一篇の筋立となつてゐる。ある青年は貧  
 家に生れて學費に苦み早くから生活難を経験  
 し、ある青年は富家に生れて順路を通じて世間  
 へ出てゐるといふやうな差別はあつても、誰れ  
 もみな文學その他の事業で、自己の天分を發揮  
 しようと思つてゐる。それとともに必ず、殆  
 んど例外なしに異性との交渉をつくつて喜樂し  
 てゐる。それ等の異性は小間使であつたり、女  
 學生であつたり、あるひは下宿屋の娘であつ  
 たり、さまざまであるが、彼等はそれ等の異性  
 のために若い心を左右されてゐて、しかも自己  
 の戀愛の妨害になる周囲の人々や事件に對して  
 は必ず怨恨の目を注いでゐる。時世がいく  
 ら變つても、昔の世でも人間の心は同じこと  
 なので、斬新なことはなささうである。  
 しかし、かういふ長篇小説を讀んだあとで自  
 分の過去を顧みるに、青年期の私は學問慾や  
 功名心こそ人並に有つてゐたのであらうが、  
 面白いエピソードとなるべき戀愛沙汰には少し  
 も拘らないで通り過ぎたのであつた。少年時代  
 には萌してゐた異性に對する好奇心も、二十前  
 後には却つて衰へてゐたらしい。清教徒を理想  
 として、情慾を排斥し、色慾の話など耳に觸

れるのも極はしく思はうと努めてゐた。それが  
 私の一生から見て幸福であつたか不幸であつ  
 たかよく分らないが、私の心は少くも異性に  
 對して柔しい素直な感じを寄せることの出来な  
 いやうになつてしまつた。新進作家の自傳體の  
 戀物語にあるやうな、心の高けるやうな甘い  
 戀の醜態を味ふ力は私にだつてはつてゐ  
 たであらうのに、二十前後に自分で努力して、  
 それを感し潰してしまつた。學塾を出た後、自  
 由の苦みを解いて、自由に五感の動くに  
 任せるやうになつても、まだ二十代の若い時分  
 でさへ、私は永久に春を失つた人間のやうで  
 あつた。

「即興詩人」を讀んで、アモンチャタを戀した  
 アントニオの柔しい心持に涙ぐむ思ひして惹  
 入れられながらも私には美しいアモンチャタ  
 も、醜いアモンチャタもなかつた。現實の女  
 性に對して私が敬愛の念を寄せて仰ぎ見たのは、  
 少年時代に見た宣教師の姉嬢に似るものであ  
 つた。さう思ふと、あの頃が私の一生の中で  
 最も心が清くて純であつたのかも知れない。  
 世間へ出て自分で働いて口を糊するやうになつ  
 て、女性に接する機会も多くなつた時分の私  
 は、婦人を尊ぶといふ氣持は、どこかへか置き

忘れたやうに失つてゐた。かういふ心を持つ  
 てゐる作家の書いた小説が若い婦女子に喜ばれ  
 ないのは當然である。男子を天國へ導くのは婦  
 人の愛であるとか、日本の社會を救ふのは婦人  
 の力によらなければならぬとか、歐西の大詩人  
 や日本の流行作家の云つてゐるやうな数々のや  
 さしい文句は、私の胸からはいくら捻つても  
 出て来ないのであつた。  
 婦人といふものは、罪深きつて誰つ吐きで、  
 お祈りで空世辭だけが上手で、いやに涙流く  
 つて、さうまでもなく虚無心が強くて、…女  
 の何處に尊いところがあるものであらうと私は思  
 つてゐた。大智大能の神が人間を造つたと假定  
 したら、男子を地球上の男子のやうに造つたの  
 が間違ひであつたよりも、女子を現實の女子の  
 やうに造つたのが一層多く間違ひであつたのだ  
 と、私は思つてゐた。シェイクスピアの書いた  
 女性や、ダンテの書いた女性の尊いのは、大詩  
 人の空想に描かれた造り物であるためなので、  
 この點ではエホバよりも彼等詩人の方が一層す  
 ぐれた創造者なのである。神は現實に生きてゐ  
 る神でもない女を造つた。詩人は尊い、美し  
 い女を造つた。さういふ神で、シェイクスピア  
 は舞臺の上では、オフェリアだのロザリンだ

會ひたいと思つたことはない。私の知つてゐる女は、特別にヤクザな女ばかりだつたためであらうか。舊知の現實の婦人よりも少年時代の愛讀書中の人間の方がどれほど懐かしいか知れない。

私は、一つの仕事にかじりついて何年も續けて来たため、時の廻り合せがよかつたためとで、豫想外の名聲が得られたので、時々思ひ上つた重見を起すこともあつたが、常人に保たれた素質を有つてゐるのぢやないと、日常反省してゐる。容貌や言語動作に婦女子の心を惹くところのないことは、なほ更早くから知つてゐたので、賣色の女以外に、戀の口説はまるで知らないで通つたのであつた。

ところが、さう謙遜するには當らないのであつた。成るほどこの頃の若い者が、世の風潮が寛大になつたのに乗じて、人間の本性を露はして節りに色を穢いでゐるのはそれが買ひの人も知れない。私に思ひを寄せてゐた女が二人や三人はあつたことは、後になつて、私の靴に白毛が出来てから、自ら知れて来たのである。

何年か前秋雨の降つてゐた日、私は腹こなしに飯倉の通をアラク／＼歩いて、次手にある雑誌をつたが今はたゞ笑つて讀むことが出来た。原稿執筆以外には文字を書くことの嫌ひな私は、返事をさへ出さなかつた。

四十にもなつてこんな色文を書く女はいやらしいやうにも思はれたが、しかし、他の女だつて他所行の白粉を落して、心の中をさらけ出したなら、大抵同じことなのぢやないかと思はれた。兎に角若い時分に私の方から一歩踏出しさへすれば懸を得る機會はあつたことが知れて、自分があまりに用心ぶか／＼つて、青春の幸福を取逃したことが後悔された。

私は學校を卒業しても家庭などつくる氣はなかつたし、自分のやうなものには、妻子を十分に養へないだらうと思つてゐた。そしてどちらを向いても、一軒の家には夫があり妻があり子供があるのを變な事のやうに感じてゐた。多くの男子は妻子を養ふために營々として働いてゐる。確かな容色でなくつても女房といふものは可愛いものなのだらうか、子供といふものは可愛いものなのだらうかと、社會人類の常識にさへ、私は疑ひを挿んでゐた。一人の男一人の女と、相手を固定してしまつた生活が幸福なのだらうかと疑つてゐた。

二十代の私がさう疑つてゐたのは、他の青年

店へ寄つたが、そこで買物をしてゐた色の白い細そりした三十代の女が私の方を顧みると、ふと微笑した。何だか見たことのあるやうな女だとは思つたが、頭を絞つて思出すほどの價値のある女でもなささうなので、それに拘らな

いで公園を一周した。そして再び飯倉の通へ出たが、すると再びその婦人が向うから來るのに出會つた。彼女は微笑して足を留めて會話した。私もお辭儀をして、そちらを見詰めたが、すると、彼女は、

「私は××にゐました辰子で御座います」と云つた。

「あ、さうでしたか」  
私は十数年前の彼女の顔を出しながら、その後の事を二三言訊ねたきり行過ぎた。その後どういふ生活をしてゐたのか、もつと詳しく訊きたかつたが、自分から進んで近所のカフフェIなどへ誘ふのは變だつたので、簡単に別れたのであつた。以前はフツクラと肥つてゐて顔立が愛くるしかつたのに、かうも變るものかと、私は薄ら寒い雨の中を興もなく歩きながら、女の容色のはかなさを考へた。辰子といふ人は昔も碌に話をしたことはなかつたのだが、顔は始終見てゐて、友人間の談話まじりの噂に

年のやうに眞實の戀愛を經験しなかつたためかも知れない。  
私が、新聞社へ入つて、辛うじて下宿料を拂へるくらゐな月給の得られるやうになつてから間もなく、故郷へ歸ると、兩親の知人の大村といふ老人が、私に向つて頻りに結婚を勧めた。「獨りで食つて行ける収入がありや、夫婦の生活が立たんことはない。困つたらお父さんに助けて貰ひなさいや、いぢやありませんかと云つて、彼の縁續きのある女を、適當な候補者として話した。その女は倉敷の可成りな資産家の長女なのだが、繼母と折合ひが悪くつて、この頃は大阪へ行つて従兄の家に寄寓してゐるといふことだつた。

「私が手紙でさう云つてやりますから、東京へお歸んなさる時に大阪へ寄つて當人を御覽になつちやどうですか。あの女なら苦勞してゐるから家持は至極よろしいに違ひありません」  
大村はそのことを私の両親によく話した。「お前の氣に入つたら嫁に貰へばいい」と父は私に向つて簡単に云つた。深く考へもしないやうだつた。

「ぢや、次手だから大阪へ寄つて見ようか」  
私は軽い興味をもつてさう極めた。大村は

上せてゐた。  
「君があんな女が好きなら、僕から××さんに話して周旋をして貰ひたまへ」と、眞面目で云つた友人もあつた。  
しかし、一人の女に對して熱情を寄せられなかつたその頃の私はかういふ話にはいつも身を入れないで通り過ぎてゐた。そして、宛んど記憶にも留まつてゐなかつたのであつたが、久振りに行會つたあと、二三日して意外にも辰子から私へ手紙を寄越した。  
懐かしさうなことを書いて、自分の住所をも知らせて、「お通りがかりの際にはお寄り下さい」なんて書いてあつた。それに對して私は葉書で簡単な返事をした。彼女に夫があるのかなのかさへ私は知らなかつた。

六

それから年買狀が來たり、旅先から繪葉書が來たりした。私に職業の周旋でも頼まうとする下心があるのか知らんと思つてゐたが、すると、ある日彼女からの厚ぼつたい手紙が届いた。それには、色つばいことが遠慮會釋なく書法されてあつた。十年前の私であつたら、こんな手紙に接したら、多少ドキマギしたかも知れない

私の事を豫め先方へ吹聴して訪問の日取りをも打合はせてくれた。曆の上の吉日が選ばれたらしかつた。  
その時は年末であつた。私は豫定された日に故郷を出立して、大阪で下車すると、停車場の前の宿屋へ寄つて晚餐を食べた。そして食後の散步として暮の街を以物しながら大村から聞いてゐる玉造の北島といふ家を訪ねて行つた。

この見合ひと云ふことについて、私は嚴肅な考へも抱いてゐなかつたし、色つばい理想をも描いてはゐなかつた。たゞ通り掛りにある女の顔を見つるといふ安易な氣持で訪ねたのであつたが、其家へ入つて二階へ導かれて部屋の中の様子を目につくと、少し驚いた。先方では私の訪問を重く見てゐたのであつた。狭くつても整頓された部屋の真中には、綺麗な炭火の盛られた丸い桐の火鉢と絹の座蒲團が置かれてあつた。私は不斷着のまゝで着流しだつたが階下から上つて來た主人は羽織袴の改つた服装をしてゐた。主人が大村の手紙を見て非常に喜んでゐたことを改つた口調で述べ立てるのが私には撲つたく思はれた。

やがで盛裝した主婦が酒肴を持込んで、夫婦は左右から私に向つて従妹の身の上を話した

は

り、私の東京の生活について語られたりした。強ひられるので、下戸の私も知らず／＼杯を重ねて、苦しいくらゐに酔つたところへ、女が静かに階子段を上つて来た。

七

笠のやうな大きな扇、白粉を塗りこくつた平たい顔、ガツシリした逞しい體格の女が目の前に現はれたが、はじめから多くの期待を寄せてゐなかつた私は、失望もしなかつた。「ようお出でんさつた」と女は平然として挨拶した。

「田舎よりや大阪の方が面白いでせう」と私が云ふと、

「此方へ来ても減多に外へ出ませんから」と、女は答へて口元に微笑を湛へた。

私はいゝ加減で眼を告げようとして、意外な御馳走になつたお禮を云つて、座を立ちかけたが、すると、急に胸が苦しくなつた。便所を借りようとしたが、階子段を下りる間の辛抱も出来さうでなかつたので、二階の障子を開けて、屏風の上へ食べた物を吐出した。皆なが側へ来て介抱して呉れた。女は主婦の指圖によつて、階下から金盥と嗽ひ水を持つて来て呉れた。

私は初対面の人々に迷惑を掛けたので恐縮して、「少しお横におなりなさい」と枕を持出されたのを斥けて、慌しく挨拶して其家を出た。吐きたいものを吐きつくした後で、戸外の寒風が吹くので、スツカリ酔ひが醒めて元気が回復した。で、道頓堀の側まで俥に乗つて、俥を下りると、その表通や裏通を足に任せて歩いた。裏通の變な家へも立寄つた。

この見合ひの光景が、今夜は久振りに思出された。そして、北島といふ家の人たちに對して氣の毒な感じがした。私は東京へ歸ると、故郷の大村老人へ宛てて、「都合により結婚は見合せ申し候」といふ簡単な葉書を出した。酒を飲ませたり、嘔吐の後始末までさせられたりしたかの人々の心境を、私はこの頃になつて推察することが出来るのであつた。

それから間もなく大村老人が死んだので、私は大阪で警見した女の成行について何も聞かされなかつたのだが、その時分の私は、別に理想の女を頭の中に持つてゐたのではないから、兩親などが熱心に勤めて生活の保護をして呉れたなら、その女とでも結婚したかも知れなかつた。

「人間は、作者が好みのおま、作つた戯曲を演ずべき。俳優たるに過ぎない。我々は貧民となるも不具者となるも、支配者となるも素町人となるも、それは作者に極められた通りに扮しなければならぬ。極められた役をよく演ずることだけが、我々の爲すべき勤めであつて、役の選り好みは出来ないのだ」

はよろしくないと思ふ」と戦争好きの主筆は、私を説諭した。私は不心得を詫びた。自分でも戦争の是非に拘泥してゐたのではなかつたが、輻重輪卒として出征してゐた弟の手紙に接したので、それを讀んでふと戦争を呪ふ氣になつたのかも知れなかつた。

ローマの賢帝マールカス・オーレリアスの人生觀の根柢はかうであつた。ネロの延臣の一人に附隨してゐたエビクテタスの人生觀もかうであつた。びつこで、羸弱で、貧乏で、日長者として一生を過した奴隷の人生觀も、榮華の頂上にあつた帝王の人生觀も同様であつたのは不思議だが、一つの哲學に徹底したこの奴隷は、役不足を云はないで、甘んじて戲

新聞記者になつて日々熱心に勤めてゐた私は、僅かな俸給に有りつくのも容易なことではないと痛感してゐたのであつた。同僚の様子を見てみると、容易に妻子なぞ持つべきものではないと教へられてゐるやうな氣がした。「獨身ならどうでもなる。いよく困れば故郷へ歸ればいい。妻子のために恥を忍んで勤めに服するのはいやなことだ」と極めてゐた。が、それはすぐれた考へであるといふよりも、あまりに生活難を恐れ過ぎた卑怯な考へであつたのかも知れない。

私は本郷の下宿屋で五六たびも正月を迎へた。その間に日露戦争があつたが、私は自分の「死生の問題」といつたやうなことにのみ心を凝してゐて、毎日、新聞社で聴かされてゐる戦争話に何の感じをももつてゐなかつた。旅順陥落の祝賀會が、社の前の牛肉屋で開かれた時にも私は飲食の外に何の意味をも感じなかつた。たゞ一度戦争否定論を書いて紙上へ出さうとしたのを主筆に符められて没書にされたことがあつた。

「あなたの御意見はどうであらうとも、現在出征軍人は國家のために艱苦を嘗めてゐるのだから、その意氣を削ぐやうなことを新聞へ出すの曲を終始一貫して演じた。しかし、私は思ふ、極められた役をよく演じるのが、我々の義務であると信じて柔順に勤めようとも、それに不平を起してじたばか暴れ廻らうとも、どちらにしたつて、人間は、ある作られたる戯曲の一個優たるに過ぎないのではあるまいか。割當てられた役を演じないつもりのも、その生涯を後から顧みるとそれ／＼に自分の役を演じてゐるのだ。現在だけでは、明瞭に分らないが、歴史を讀むと、人間がそれ／＼に割當てられた役を演じてゐたことがよく分る。誰れがえらかつたとか、誰れがやりしくじつたとか云ふよりも、皆なが作者の傀儡となつて活動してゐたといふ感じがする。さう感じて、私は人類史を淋しく思ふが、私がそれを淋しく思ふのは、すなはち、私自身が「淋しく思ふ人」といふ役を振當てられてゐるためである。

(文壇劇團の「日記抄」より)

# 東京

私は大蔵に養育して、すでに二年の歳月を過ぎた。此處から東京へは汽車で略二時間の距離があるので、出掛けるのはちよつと億劫であるが、それでも月に三度か四度は用事を兼ねて出向くことにしてゐる。七八年前の私なら、さう長く都會を離れてはゐられない譯なのだ。が、年齢のせると、一生の仕事に専念したいと思ふ感じがしてゐるためとて、都會に對する執着が今は極めて薄くなつてゐる。養生を過すのに何か心を紛らす方法が、田舎にでもありさへすれば、今後都會生活はしなくつてもいいと思つてゐる。

東京へ行つても、雜誌社や新聞社へ入り、立寄つて、交遊その他の社會の噂を聞くことにはあるが、知人の私宅を訪問することは殆んどないと云つていい。簡単な用事を果したあとでは、當てもなくブラ／＼歩くと、食事をすると、興行物を見るとき、何とかかとかして、半日か一日を過ぎて、疲勞した身體を汽車に載せて歸つて來るのである。

東京に定住してゐる時よりも、時々暇を見て見ると、東京といふものが私の前にハッキリ浮かぶやうな気がする。品川から新橋までの間に、汚らしい粗末な家が線路に沿うて並んでゐるのを見て、東京驛で下車して、外へ出ると大蔵では鮮明であつた太陽の光が鈍くつて薄暗いやうなのに気がつく。だけど、都會の濁つた空氣や騒音は私の神智を刺戟して、生存の力を感ぜさせるのである。二十餘年も東京に住みつづけて、自然美や田園の雑事よりも人間美や人間美に興味を持ち、野趣よりも人工を好んでゐた私は、停車場から踏出すと、その瞬間は本當の故郷へ歸つて來たやうな気がする。海邊の色の黒い頑健な人々は蒼白い都人よりも生物として勝れてゐるのだらうが、私はどの點からもさういふ人々に伍して、共に樂み共に喜ぶことが出来なくなつてゐる。先方でも私たちが都會人視して、上へは尊敬して内實は私利を計らうとしてゐるので、眞實の親みは我々の間に成立つてゐないのである。私は田舎生れで、

生れた家は嚴として存在してゐるのであるが、その生れた故郷へ歸つても、他人と親むことは出来ないのである。一つは私の性格によるのであるが、都會生活で得た教養は我々をして田舎人と融和しがたくしてゐるのである。私は農村の疲弊をこの頃にはしみ／＼と感じてゐる。このまゝに放任してゐるには日本國家の前途が危いと思つてゐる。つねに田舎人の生活を氣の毒には思つてゐるが、しかし、私は個々の田舎人に對しては好感を持つてゐない。たまに田舎人を旅行して地方人に接するとか、机の上で筆を執つてゐる時には、自分の理想によつて、田舎生活や地方人を讚美することが出来るが、私の如く田舎生れで田舎者をよく知つてゐるものは、空想によつて、純朴眞實な田舎者を造り上げるなど、馬鹿らしく出来ないのである。かつて幸田露伴氏の「新浦島」といふ小説の一部を讀んで、都會生れの文學者は、こんなに突飛な空想をもつて漁夫生活を書くものかと呆れたことがあつた。「春は霞が靄んで蓬萊の島も何だとか」「雁めが飛んで磯の苦屋へ月が渡れて」「王公の樂みもおれたちの境涯に及ぶものかと」、長々と綺麗な文字で書立ててあつたが、歌詠みのお公卿様が夢に漁夫になつたのなら知らず、

道樂に釣魚でもする人なら兎に角、諸式の高い世に腕二本で稼いで生命を繋いでゐる眞實の漁夫に、蓬萊の島も磯の苦屋もあるものかと、その時の私には思はれた。

私は釣魚の樂みも知らない。土いぢりの樂みも知らない。田舎人と一しよに浪花節を喜んで聞くことも出来ない。居酒屋で會飲することもない。時々小學校の教室などで催される××中將や××子爵などの講演を聴く氣にもなれない。と云つて、先覺者氣取りで地方人を指導しようとするやうな大それた考へは毛頭持つてゐないし、煩さい思ひを我慢して地方の青年などに訓子を合せて人氣を得ようとする虛榮心をも持つてゐない。

で、私は、讀書や執筆や海邊や田圃道の散歩だけでは、頭が堪へられなくると、「東京へでも行つて來ようか」と云ふ氣になるのである。積積した息を吐きに掛ける氣になるのである。

電車の運輸の系統が随々變更されるので、たびたびまごつくことがあるが、電車の中で都會人の顔や、身振や動作を見てゐると、さまざまに人間の標本を見てゐるやうで面白い。野良に働いてゐる農夫や地曳漁などしてゐる漁夫の十

人一律なのとは違つてゐて、私をして人間生活に對するいろいろな想像を起さしめる。さういふ私自身も田舎の水に染んで、四十時代相應の感の深い田舎の小金持の標本にでも見えるやうになつたのか、古い手提カバンを抱へて、兜町の取引所のあたりを、先日の朝ブラ／＼歩いてゐると、仲買店の客引が次から次へと私に挨拶して話をしかける。

今日は少し高きうです。……私の店は直ぐそこですからお立寄り下さいなどと云つて、私の風塵をじろ／＼見る奴もある。

日暮頃雷門で電車を下りて、申請でも晩餐を食へようと思つて、中店の雜沓から横へ外れてブラ／＼歩いてゐると、宿屋の番頭が乾度聲を掛ける。後から追掛けて來たりする。田舎にゐると都人土あつかひされ、都會へ行くと田舎者あつかひされる。そのどちらつかずの中ブランチの人種に屬することは、今の多くの文學者が、プロレタリアとブルジョアとのどちらつかずのアヤフヤな階級に屬してゐると同様なのである。

私は足休めのためや、夜芝居の開幕を待つ間の時間つぶしのために、講釋場の裏席へ寄ることがあるが、此處で舊弊な顔した男の讀立てる

軍記などを聴いたあとで、デンパリストのヴァイオリンを聴いたり、アンナ某女の踊りを観たりすると、藝術の鑑賞にも頭の轉換の忙しさが感ぜられる。私は必ずしも外來の藝術に驚喜湧仰する氣になれないし、日本の舊藝術を樂むことも出来ないが、肉體の衰弱によつて食色の慾も衰へてゐる私は、かういふものによつても日々の單調な生活から來る倦怠を粉らさうとするのである。そして、私自身は密劇の寵下をアツついて外國の音楽や舞踏を六ヶ敷い言葉で批評し合つてゐる新進氣鋭の鑑賞家よりも密劇の定連の方に心持が似てゐるやうに思はれる。古めかしい講釋にでも、藝の巧拙はあるものだ、時代の反映があるものだ、私は文學の現状に比べて感ずることがある。典山の枯れた讀み口はうまいが、伯山の藝は油が乗つてゐて、話らない事柄を喋舌つてゐると思ひながら、私もふと聴き耳を立てることがある。露の光に打たれることがある。さういふ時の感動は、デンパリストやパロロの音楽の妙味を感じた時の氣持と、差別があるであらうかと私は疑ふ。三十錢で聴かれる安來節と、十圓近い入場料を要するデンパリストと、どちらにしても、曲の音に恍惚とした時の氣持は同じこと

ぢやないのだらうか。伯龍といふ若い講師が、死んだ落語家の小せん見たいに、新聞雑誌で学んだやうな當世の流行語を頻りに使つて、獨創のお喋舌をして人氣を持つてゐるところに、今の文界や美術界の現状に似てゐるところがあつて、私はひとりて微笑される。講師の畫席のやうな都會の一隅にも、日本現代の影は、ちゃんと宿つてゐるのである。

私は田舎に住むやうになつてからは東京へ出るたびに都會の風呂へ入るのを楽しみにするやうになつた。都會に定住してゐた頃、田舎の温泉を渴望してゐたやうに、この頃は、「東京の風呂へ入つて来たい」と思ふことがある。市中を歩いて、汗と埃に汚れたあとの入浴の快樂を、私はこの頃ほど感じることはない。

私は都會を歩いてゐて、労働者の汗の惱みを見る。そして田舎で見ると、もつと痛切に生存の苦みを見てゐるやうに感じる。ある日、久振りに川蒸汽に乗つて百花園の秋草を見に行つたが、その時牛島神社の大祭で、町々の山車が續いてゐた。大勢の若い衆は炎天に汗みどろになつて騒いでゐて、通り掛りの私でさへ、汗の臭ひに逆吐くほどであつた。自ら好んで自分の汗に浸つて喜んでゐる彼等、その汗の

臭ひを嗅いで喜んでゐる大勢の人物。私は人間生活の眞相がさういふ所にもあるやうに思つて見てゐたが、すると、ふと、前の夜見たアンナ某一座の舞踊が思出された。一座のうち若い踊り子どもの豊麗な背中に汗がにじみ出て、帯の光つてゐるのが艶かしくて何とも云へず快く見られたのであつた。「この汗わいの」と、博多小女郎が云つてゐる。私は労働者の汗、祭に興する若い衆の汗、アンナ一座の汗と、都會の彼方此方で流される汗について考へた。

私は退屈の氣晴らしをさせてくれる東京といふ大都會に對して好意を寄せてゐる。古今東西の種々雑多なものが、統一もなくそこに現はれるのが、傍觀者には面白い。整頓した文明國や文化社會が出来上らないでゴタ／＼してゐるところが面白い。舊幕時代のやうに、一般の思想や道徳が一致してゐないで、みんなが我は強して勝手な事を云ひ合つてゐる今の精神的狀態が、今日の東京市街の外観によく現はれてゐるのが面白い。

たまに街上や電車の中や劇場などである／＼な知人に出會ふことがあるが、時によつて、その人は資本主義撲滅論者であつたり、非愛國者

であつたり、あるひは勤儉貯蓄家であつたり、遊蕩兒であつたりする。人間の標本を見てゐるやうで面白い。  
「今に大地震か何かの大災難があつて一坪が千圓も一萬圓もするといふ東京の市街が無價値な灰塵になる時はないだらうか」と丸の内や日本橋あたりの七層八層の大建築を仰ぎ見ては、杞憂を感じながら、私は大磯の菓へ向つて飛んで歸るのである。

### クリスマスと正月

去年の暮、私が偶然東京へ遊びに出掛けると、その日はクリスマスであつた。京橋際の七階で午餐を食べると、平生の定食よりも皿数が多くつて、七面鳥だの、クリスマスケーキだのと、おいしい變つた料理が出た。食後餘興場へ行くと、福引があつて、私は玩具の馬を抽當てた。手品や物真似や、落語の餘興があつたので、私は子供達の中に交つて、暫らくさういふものに耳目を觸れて心を遊ばせてゐた。

其處を出ると、いやに量張つた玩具を提げて、クリスマス気分が從來よりも濃厚になつてゐる銀座通を歩いた。家へ持つて歸つても、玩具の土産を喜んで呉れる子供があるのではなし、散歩の邪魔にもなるのだが、と云つて、棄てる氣にもなれなかつた。クリスマスツリーのサンタクロースだのと、西洋の今日の祭を思出させる装飾を見たり、祭にちなんだ品物を若い男女が買つてゐるのを見たりすると、日本人の趣味がますます西洋くさくなるのが感ぜられた。昔は生死の問題に關はつてゐた宗教が、

肝心の信仰はそつちのけにされて、たゞ生活を色取る方便、娯樂の道具として用ひられるやうになつてしまつたことも感ぜられた。佛教だつてどの宗教だつて、大抵はさうなので、今更珍らしさうに感じるにはあたらぬ譯だが、私自身、キリストの降誕については、何等の感ぜをも起さないで、その祭の御馳走だけを食つたことが、人の心の變遷を思ふ所縁となつて、去年や一昨年のクリスマスの時とは違つた感慨に打たれたのであつた。私は二十餘年前にキリスト教に歸依して教會に加はつてゐた頃には、讚美歌や祈禱や説教や、日曜學校の生徒の唱歌や諸師演説などの催しのある祝賀會に列して、儀式的に主の降誕を祝した上に、自分一人の遐想に於て、この尊い記念日を祝したのであつたが、しかし御馳走と云つては、蜜柑に煎餅ぐらゐで、幾年かの信者生活の間に、今日の料理のやうな料理の皿をも、祝日に味ひながら、神の恵みを讚美したことはなかつた。私ばかりではない、あの教會の兄弟姉妹のうち

には、あの頃七面鳥の料理なぞ食べてクリスマス祝つたものは一人もなかつたであらう。七面鳥などの料理を、たゞうまいからと云つて食べるよりは、クリスマス御馳走だと云つて食べる方が、今日七階の食堂に一杯になつてゐた客人には興味があらうと思ふと可笑しかつた。  
私は日暮頃まであちらこちら散歩してゐるうちに、帝國ホテルでも毎年の例として、クリスマス祝賀の催しがあることを思出して、晚餐をそこへ食へに行くことにした。まだ胃の腑に飽満を感じてゐたので、入浴したり書店へ寄つたりして時間を過してから行つたが、導かれて餘興場へ入つた時は、踊りの「辰橋」の幕の下りる一瞬間前だつた。鬼女の顔は分らなかつたが、語り取めた太夫の顔を見ると、それは落語家の小さんであつた。小さんの常習津を聴いてキリストの降誕を祝するなんて、世の中も變つたものだと思ひしかつた。三味線を悪魔の音樂のやうに思つてゐた昔の口先生にでも聴かせたら、さぞ舊約の豫言者張りの憤慨をするであらうと思ふと、なほ更可笑しかつた。  
私は時間が遅れたために、小さんの美音の聴けなかつたのを残念に思ひながら、衆とともに



「食室へ入った。食事中絶えず管絃樂が奏せられたり、ハイカラに盛装した男女がこの夜を楽しんでゐるやうな顔してゐるのを見たり、うまさうな料理が運ばれるのを見たりしてゐると、質素な生活に馴れてゐる私には、贅澤至極のことのやうに思はれた。……しかし、煎餅と蜜柑とを食ひながら神の國などを空想してゐた昔の私と、この盛衰に列しながら、信仰の餘蘊をも起さないでゐる私と、どちらが幸福なのであらうか。

私の前には、鼻眼鏡をかけた結核の中老の紳士がゐた。多年歐米に滞在してゐたらしく、かの地のクリスマスのお話を私にして聞かせた。料理の説明をもした。

「クリスマスは料理として立派なものです。アメリカだつたら十倍以上のものですよ。このメニューにゲーム——とあるのは、今度で取つて来たばかりといふ意味で、鴨か何かの料理ですな。……彼地では、會ふ人ごとに、メリークリスマス、メリークリスマスと云つてお互ひに祝ふのです」と云つて、その紳士は、外國の風習を私に見せようとするやうに、外人が通るたびに、腰を浮かせたり、立上つたり、手を差出したりして、「メリークリスマス

ス、メリークリスマス」と、表情入りで頷りに叫んだ。

しかし、私は午餐に満腹したあとなので、此處の料理が十分に味はられなかつた。側にあつた角の包紙を破つて、辻占見たいなものを開けて見ると、「お前とならば何處までも」といふやうな色っぽい唄が英字で書かれてあつた。

食事を終へると、私は再び餘興場へ行つて、さまざまの奇術を見た。踊り場をも覗いた。この頃流行してゐる社交ダンスといふものは、輕井澤のホテルでちよつと見た外に、私は見たことはなかつたので、珍らしかつたが、さして面白いものとも思はれなかつた。かういふ踊りにも種類はいろ／＼あるのであらうが、私の見たのは、ことに日本人の踊り振りはノロノロしてゐて滑稽やうであつた。

「おはじめになつちやいかゞです。二三週間で覚えられますよ」と、ダンス好きの洋服屋のY君は、會ふたびに私たち夫妻に勧めてゐるが、私は社交的に陽気に世を樂むやうな気分を失つてゐるのである。私でも子供の時分には、盆踊りの仲間に入つたことがあつた。唄や踊りは子供の時分から好きであつた。が、さういふ遊藝の嗜好を、二十歳前後にキリスト教によつて壓

迫されたのであつた。

終列車に乗れないやうに、私は踊り場を出ると、急いで停車場へ向つた。玩具の馬は無事に家へ持つて歸つた。

年が押詰つても、私の家では迎春の準備は入らなかつた。庭には多少の樹木があるが、私のもになつてからは一度も手入れをしないで、散髪をやらぬ頭髪のやうに、松などがボウボウと葉が茂つてゐた。知合ひの植木屋は來るたびにそれを氣にした。

「松の緑は取つた方がよう御座んすよ。打ちやつといちや木が悪くなりませぬ。このくらゐな松は今時は安か買へません。此家をお拂ひになるにしても、植木の手入れをして綺麗にして置くと、それだけ高く賣れる譯合ですからね。なに、私が大あばれに働いたら、三日もかゝりやちやんと片付けてしまひませぬ。手入れをしとけば、葉が落ちないから、掃除にも骨が折れませぬよ」と云つたが、私たちは他所の家のことのやうに思つて取合はなかつた。葉が落ちたつて松の形が悪くなつたつて、いぢやないかと思つてゐた。

この頃世間が不景氣なため、植木屋の仕事も暇で、遊んでゐる日が多いのに困つて、些細な

んです。植木屋があとで、無駄な手間をかけやがつてと私に當てつけました。主人が使へといやあ、女竹だつて何だつていぢやねえか。おテナタ葉あが餘計なおせつかいをしやがる、自分で手間を一錢も出しやしましと、サン／＼云はれましたよ」と、興がつて云つて笑つた。

成程、外へ出た時に氣をつけて見ると、何處の門松にも、私との庭にあるやうな竹は用ひられてゐなかつた。萬事世間の習慣に従つて、家の内外を正月らしく装つていゝので、強ひて異を擧げるとは及ばないと思つても見たが、人手のない私の家では、さういふことをしてはゐられなかつた。門松以外には平生と異つたところもなくつて、新年を迎へた。

ある新聞に、ロシアの政府ではキリスト教に對する人民の盲信を打破するために、クリスマスといふ習慣的の催しを止めさせるやうにしてゐるといふ記事が小さく出てゐるが、さういふことが徹底的に實行されたら、世の生活はさぞ淋しくなるだらうと思はれた。盆も正月も、氏神の祭禮も、恵方詣りも、いゝんな祝日や祭日がみんな廢止になつたら、人間の樂みはそれだけ無くなるので、さういふ世は

備けにも有つつかうとあせつてゐる彼の目には、私の家の荒れた植木の本々々々が、紙幣か銀貨でもあつたやうに見えるるらしかつた。

「ぢや、あの人に門松を立てて貰ふことにしませう」と、私の妻は云つた。

門松も、節も私の家には無用なものなのに、家が大通りに面してゐるのに、一軒だけ松を立てないのは町内の者に疑はれる恐れがあつたので、世間の慣例に習ふことにした。別荘ばかりある山の手に住んでゐるのなら兎に角、私たちのやうに町家にまじつて家を持つてゐると、周囲の噂は實際にうるさいので、私は減多に接しないからいゝが、妻の方では神經に觸ることが絶えずあるらしかつた。此方へ越して來た當時、私が帽子も被らないで不潔着のまま汽車の三等へ乗つたと云つて、近所へ報告に來た女があつたと云ふのを一例としても、噂のうるさいことが察せられるであらう。門松を立てるについても、そのことを誰れかに話すと、その噂を聞きつけて、「安くするから是非立てさせてくれ」と、近所の者が早速申込んで來た。が、私たちは義理を守つて、知合ひの植木屋に頼むことにした。

「そんな大きなものを何にするんだね。家では門松はおしるしだけの小ぢやいものでいゝんだよ」と、妻が云ふと、

「これを門松の桃にしとけば、あとで垣根を直す時に役に立ちます」と、植木屋は崩れかけてゐる垣根の修繕に目をつけて云つた。

松に添へる竹は、庭の竹を用ひさせた。時出來上つた時分に、近所の人は迂散くさい日を此方に向けてゐるが、さうしてゐるうちに、八百屋の主婦が妻を手招きして道の向うへ呼んだ。事ありげな様子なのを、妻は不審に思つてゐたが、主婦は、小聲で、

「あの竹は女竹ですよ。女竹はお葬ひの時に使ふもので、お日出たい時に使ふものぢや御座いませんと教へてくれた。

妻は婦人の悪い思ひをして、早速植木屋に云つて、既に結びつけてある竹を取らさせた。

「女竹だつていぢやないか。冥途の旅の一里塚だから、葬ひに使ふ竹でいぢやないか」と、私は笑つた。

植木屋が仕事を済まして歸つたあとで、八百屋の主婦は野菜を肩に來た次手に、

「私も餘計なことを申上げなければよかつた

追されたのであつた。

終列車に乗れないやうに、私は踊り場を出ると、急いで停車場へ向つた。玩具の馬は無事に家へ持つて歸つた。

年が押詰つても、私の家では迎春の準備は入らなかつた。庭には多少の樹木があるが、私のもになつてからは一度も手入れをしないで、散髪をやらぬ頭髪

「松の緑は取つた方がよう御座んすよ。打ちやつといちや木が悪くなりませぬ。このくらゐな松は今時は安か買へません。此家をお拂ひになるにしても、植木の手入れをして綺麗にして置くと、それだけ高く賣れる譯合ですからね。なに、私が大あばれに働いたら、三日もかゝりやちやんと片付けてしまひませぬ。手入れをしとけば、葉が落ちないから、掃除にも骨が折れませぬよ」と云つたが、私たちは他所の家のことのやうに思つて取合はなかつた。葉が落ちたつて松の形が悪くなつたつて、いぢやないかと思つてゐた。

この頃世間が不景氣なため、植木屋の仕事も暇で、遊んでゐる日が多いのに困つて、些細な

何時までも讀かないだらうと思はれる。一つの迷信を破れば他の迷信がそれに代つて現はれるに極つてゐる。人間が何千年も何万年もかゝつて造り出した神や佛が、消えてなくなることはないに違ひない。「ジタバタして考へて見たつてはしてがない。成るべく世間の多数の人のするやうにして世を渡ればいゝ」といふのが、縁側で日向ぼつこしながら、私の考へた年頭の感であった。

近所の貧しき家の娘が、新調の春衣を着て髪を烏田に結つて、毛絲のショールを長く垂れて、歩きつ振りまでも氣取つて通つてゐるのが、垣根越しに見られた。それを見つけた妻が庭へ下りて、「××さん」と聲を掛けたが、娘は不審のやうに馴々しく近づいては來ないで、物體ぶつた會話をして行過ぎた。

「あの衣服を掛へるのが大變だつたんですよ。年頃だから、今年は錦袖でも一そろひ掛へてやりたいつてお母さんが意氣込んでみたんですよ。年末に反物を呉服屋から持つて來ると、あの娘は直ぐに八百屋へ見せに來たんですよ。あのお母さんも女の手で三人も四人もの子供を育ててゐるんだから、私不思議でならない」と、妻は云つた。

この近所にはどの家にも、子供の三人や五人ゐない家はなかつた。どうして生活を立ててゐるのか、私たちにはいつも不思議に思はれてゐた。

「八百屋の娘がこのごろ金主がついたので、せつせといふ衣服を掛へるから、隣の娘も羨ましくて溜らなくなつたんでせう。だけど八百屋にはかなやしないの。八百屋ではまた別荘の奥さんやお嬢さんの服装を見ては、その真似をしようとしてゐるんだから、金を出す人の身になつたら、大抵ぢやないでせう」

裏通を通つてゐる町の人々の正月姿を見ながら、私たちは噂をしてゐるが、やがて、私は年賀状を出さうとして玄関を下りて、ふと見ると、隣との界の垣根には、小使くさい蒲團や、鷲のはみ出た座蒲團がズツシリ掛けられて、元日の麗かな日に曝されてゐた。古くなつた垣根は、蒲團の重みですす／＼崩れかけるので、私の方では、隣の物干場になるのを免れようとしたが、口で諍を云つたつて目なことは分つてゐるから、年末に植木屋に頼んで、垣根の上に針金を張らしたのであつた。ところが、今見ると、針金の上に蒲團を掛けて、その上に蒲團を掛けてゐた。以前よりも建だけ重みが

餘分に加はつた譯だ。二軒つゞいてゐる隣家の右手の家には、ことに子供が多くて赤坊もゐるのだから、毎日汚れた蒲團や襦袢を干さねばならないのだらう。そして、私の家の垣根が壊れるのは隣家に取つては微塵も損になることではない。

### 追憶記

「新月死す」といふ電報に接して驚いたのは、五年前の晩秋の頃で、その頃私は麻布の我善坊に住んでゐた。死者S氏の演劇事業について關係の極めて薄かつた私は、氏の近状を知らなかつたので、その死因についていろいろに疑ひを起した。あるひは自殺ではなからうかとさへ考へた。

私は急いで横濱町の藝術俱樂部へ行つたが、その階上には、すでに大勢の先輩や知友が集まつてゐた。跡始末について何か話してゐられたI博士の顔面は、私がかつて見たことのないほどに峻厳であつた。他の人々の顔にも不意の死に動かされてゐるやうな感じが現はれてゐた。私はソと一瞬へ寄つて、話し易い人に向つて死因や臨終の様子を訊ねた。流行感冒から肺炎を起したのださうだが、S氏がかねて心臓が弱いつてゐたことを、私は思出した。そのために飲酒を慎んでゐるとある宴會の席で氏はいつてゐた。梅名山で出會つた時にも、心臓が弱いから上り送だけ駕籠に乗つてゐると

いつてゐた。

私は、文壇へ出掛けた當時は、氏の最初の門弟の一人といつてもいゝやうな關係で、氏には随分引立てられてゐたのであるが、近年は疎遠になつてゐたし、ことに先輩が數多ひかへてゐるのだから、死後の處置について、噂を入れられはしないので、人々の意見を聞くともなく聞きながら、そこらをマゴ／＼してゐた。氏が病氣に對して我慢強かつたこと、演劇の開演中だつたので、當時氏の情人として盛んに世に唄はれてゐたM女も氏の死に目に會はなかつたことなどを、私は傍人から聞かされたが、氏の遺骸に接して今生の別れを告げようとも、靈前に線香の一本を捧げようとも考へてゐなかつた。……電報で驚かされた心が憤まるにつれて、私はこの一事件について、自ら興味を覺えてゐるのに氣づいた。死を悼む思ひがいかに強くつても、それは卓上へ運ばれた鮎の味ひをまつくするほどではなかつた。藝術座の將來やM女の將來について囁いてゐる人々も、

腹の中では興味を感じてゐるやうに、私には思はれた。酒色の慾や榮華の誇りのみが人を樂ませるのではない。恐怖でも悲哀でも、それが身を破るほどに度が強くなければ樂みにならないのである。

「あちらへ御案内ませうか」とある人がいつて呉れたので、私は隨うて行つたが、そこはS氏の不斷の部屋であるらしかつた。遺骸は横へられてゐて、M女は上り口の部屋に坐つて涙に濡れて客に接してゐた。私はM女に目撃して遺骸の側へ寄つて、恐しく顔の蔽ひを取つて死者を一瞥したが、何ともいへない無氣味な感じをした。泥色をした小さな顔であつた。私は直ぐに側を離れたが、「××さん察して下さいよ」と、相手の女客に訴へて囁明してゐるM女の聲が、ふと私の耳を穿つたので、私は思はずそちらを顧みましたが、M女の顔は、いくら悲みに慟まされても美しかつた。

私は溺死人や犠死者を通りがかりに見たことはあつたが、知人の死面を見たのは此の時がはじめてであつた。そして生死の差の激しいの身に沁みて感じた。聰明であつて柔和な目をして居た生前のS氏と、あの小さな泥色をした醜い顔とが同じ人であらうとは思はれなかつた。

人間は一たび息が絶えたらそれつきり、靈魂も何もあつたものぢやないと、私は不斷考へて居ることを、S氏の死面の一瞥によつて確めたやうな気がした。一億年前に死んだ生物も、今死んだS氏も同じことなのである。

みんなが葬式その他のことで騒いでゐるのも、「S氏のためではない。自分々々の心に残つてゐるSといふ人の影を捉へて騒いでゐるのである。」

「Sさんは頭がいんだね。差向ひで話をしてゐると、此方の腹の底までも見破られるやうな気がするよ」と、私は昔未明君にいつたことがあつた。その時物に感動し易い未明君は、「さうかねえ」と同意して、さういふやうな、思詰めた表情を見せたが、近年になつてM女のことなどがあつてから、ある時同君は私に向つて「君はいつかS氏は相手の腹の底まで見破るなんていつてゐたが、そんなえらい人でもないぢやないか」といつて笑つた。

私も笑つた。軽々しく人を崇拜する癖のあつた自分の昔を思出して揆つたか感じた。しかし、私がS氏から眞に學ぶところのあつたのはその晩年の行爲からであつた。

氏が育英の職を執ることとなつた時に、最初

に教へを受けたのは私たちであつた。支那文學史と美學とが氏の受持の教課目であつたが、氏が教師としてまだ不馴れであつたのと、今から思ふとさういふ方面の學識が深くはなかつたためとで、私はさして氏の講義によつて得るところはなかつた。同窓の先輩であつて文名も高いといふのに免じて、我々はまだるいのを我慢して、不平もいはず反抗もしないで教授を受けてゐたやうなものであつた。氏は下しらべを怠つてゐたのか、屢々時間の半ばも過ぎないうちに講義を止めた。

しかし、私ははじめて文章を世に公けにするやうになつたのはS氏の講義によつたのであつた。それまで、私は懸賞金が欲しさに、一萬朝報（二度短編小説）——どちらも非常に苦んで、無骨な筆でコック——と實感を書きたもの——を寄せて落選した外には、同窓の同窓雜誌へも書かず、文筆で口を糊する氣にはなつてゐなかつたのであつた。ところが、その頃名士訪問をよくやつてゐた徳田秋江君が、ある日教室でひそかに私を招いて、「昨日S氏を訪ねたら、讀賣の月曜附録がこの頃はないので、どうかして賑はせるやうにしてくれと主筆に頼まれてゐるから、合評會でも拵へようと思つて

といつてゐた」といつて、同級生のうちから、四五人の人選をしたことを話した。私は文章は書けなくつても、學識の成績がよかつたので、その一人に選ばれたのであらう。私は氣おくれがしたが、兎に角出席することにした。

合評の最初は泉鏡花氏の「註文帳」であつた。私は再三熟讀したので、今でも懐かしみをもつてよく覚えてゐる。チュウ／＼タコカイナのチュウ／＼言葉が分らないので、宿の主婦に訊ねた。伊豫敷といふ下谷の料理屋の名前をこの小説によつて覚えて、あとでそこへ行つた。その時は鏡花氏が賣出した當時で、T博士も湯島詣を教室で推稱された。S氏も、紅葉門下では非凡な作家だといつてゐた。私は、いくら讀んでも、何處がいゝのやらどこが悪いのやら、サツパリ見當がつかなかつたが、とに角何か理窟を捏ね選して批評を書いた。S氏の筆で添削されて紙上に掲げられた。

一二年間、月曜附録への寄稿がつけられた。その間に田山花袋氏に反駁されたり、讀んでもゐないウオーターペーターのことを書いて、千葉鐵藏氏に酷く罵られたりした。さうして人に扱はれるうちに、私もやうやく文壇の一人として認められるやうになつたのであつた。

へ氏が訪ねて来たので私は意外な感じがした。何か特別な用事があるのではあらうかと思つてゐたら、高田さんの所へ行つたら留守だつたから、「……といつて、その歸りを待つ間、私の家へ寄つたらしい口吻であつた。

その後、間もなく、氏は再び私の家へ立寄つた。私の妻は挨拶に出て、「先生はお瘦せなすつた」と、何氣なくいふと、氏は、「さうですか」と淋しく笑つた。そして、何か御馳走をしようとすると、氏は押留めて、「水を一杯頂きます」といつた。

二度とも氏は十分も経たぬうちに歸つた。私は何だか變な氣がした。間もなく氏が奈良から京都の方へ旅行して、年末には湯河原まで歸つてゐることを、新聞の記事で私は知つた。氏の紀行文が讀賣に出てるが、そのなかには、大和の三山を例にして戀の三角關係が論ぜられてあつた。かつて「マダダ」が論ぜられた時、協會員の一人が、「MのマダダにはSの魂が入つてゐるんだよ。鎌古の時にでも、マダダを見詰めてゐるSの目付はあたりまへぢやないね」といつてゐたことを私は思出してゐた。耳に觸れるMとSとの戀は次第に激しかった。

私は年末も押詰つてから二三日小田原へ行つ

やがてS氏は歐州へ行つた。氏の不在の間に私は新聞社へ入つて、記者として氏の歸朝を迎へたのであつた。氏は家庭の生活状態においても文壇の方面においても、舊套を脱して清新なる自己を發揮しようと思ひ込んでゐたやうであつた。世間の期待も大きかつたし、早稻田の人々はこの氏を擁して事をなさうと思つてゐたらしかつた。久しく休刊してゐた「早稻田文學」が、氏を主筆として再興されて、雜誌の少かつたその頃では重きを置かれてゐたが、氏の一時の意氣も次第に衰へて倦怠の色が顔にも現はれた。花袋氏などが熱烈に唱へだした自然主義に和して、それに理窟をつけだしたのも、氏の内心の生命に觸れたためであつたにちがひない。西洋で學んだ事はむしろ皮相なことだつたので、日本で起りかけた新しい思潮は氏の内心の生きた要求を動かしたのである。沈滞した日常生活から脱して新しい生命を得ようと思つてゐたのにちがひない。「教師の生活は詰らない」と、私に向つてもをり／＼洩らしてゐた。氏の如く公人としては多数の子弟に圍繞され、家庭においては多数の兒女を有つてゐる人は、生活の面目を改めるのは容易ではあるまいと、私は思つてゐた。しかし氏はいつとなし

に教へを受けたのは私たちであつた。支那文學史と美學とが氏の受持の教課目であつたが、氏が教師としてまだ不馴れであつたのと、今から思ふとさういふ方面の學識が深くはなかつたためとで、私はさして氏の講義によつて得るところはなかつた。同窓の先輩であつて文名も高いといふのに免じて、我々はまだるいのを我慢して、不平もいはず反抗もしないで教授を受けてゐたやうなものであつた。氏は下しらべを怠つてゐたのか、屢々時間の半ばも過ぎないうちに講義を止めた。

しかし、私ははじめて文章を世に公けにするやうになつたのはS氏の講義によつたのであつた。それまで、私は懸賞金が欲しさに、一萬朝報（二度短編小説）——どちらも非常に苦んで、無骨な筆でコック——と實感を書きたもの——を寄せて落選した外には、同窓の同窓雜誌へも書かず、文筆で口を糊する氣にはなつてゐなかつたのであつた。ところが、その頃名士訪問をよくやつてゐた徳田秋江君が、ある日教室でひそかに私を招いて、「昨日S氏を訪ねたら、讀賣の月曜附録がこの頃はないので、どうかして賑はせるやうにしてくれと主筆に頼まれてゐるから、合評會でも拵へようと思つて

といつてゐた」といつて、同級生のうちから、四五人の人選をしたことを話した。私は文章は書けなくつても、學識の成績がよかつたので、その一人に選ばれたのであらう。私は氣おくれがしたが、兎に角出席することにした。

合評の最初は泉鏡花氏の「註文帳」であつた。私は再三熟讀したので、今でも懐かしみをもつてよく覚えてゐる。チュウ／＼タコカイナのチュウ／＼言葉が分らないので、宿の主婦に訊ねた。伊豫敷といふ下谷の料理屋の名前をこの小説によつて覚えて、あとでそこへ行つた。その時は鏡花氏が賣出した當時で、T博士も湯島詣を教室で推稱された。S氏も、紅葉門下では非凡な作家だといつてゐた。私は、いくら讀んでも、何處がいゝのやらどこが悪いのやら、サツパリ見當がつかなかつたが、とに角何か理窟を捏ね選して批評を書いた。S氏の筆で添削されて紙上に掲げられた。

一二年間、月曜附録への寄稿がつけられた。その間に田山花袋氏に反駁されたり、讀んでもゐないウオーターペーターのことを書いて、千葉鐵藏氏に酷く罵られたりした。さうして人に扱はれるうちに、私もやうやく文壇の一人として認められるやうになつたのであつた。

へ氏が訪ねて来たので私は意外な感じがした。何か特別な用事があるのではあらうかと思つてゐたら、高田さんの所へ行つたら留守だつたから、「……といつて、その歸りを待つ間、私の家へ寄つたらしい口吻であつた。

その後、間もなく、氏は再び私の家へ立寄つた。私の妻は挨拶に出て、「先生はお瘦せなすつた」と、何氣なくいふと、氏は、「さうですか」と淋しく笑つた。そして、何か御馳走をしようとすると、氏は押留めて、「水を一杯頂きます」といつた。

二度とも氏は十分も経たぬうちに歸つた。私は何だか變な氣がした。間もなく氏が奈良から京都の方へ旅行して、年末には湯河原まで歸つてゐることを、新聞の記事で私は知つた。氏の紀行文が讀賣に出てるが、そのなかには、大和の三山を例にして戀の三角關係が論ぜられてあつた。かつて「マダダ」が論ぜられた時、協會員の一人が、「MのマダダにはSの魂が入つてゐるんだよ。鎌古の時にでも、マダダを見詰めてゐるSの目付はあたりまへぢやないね」といつてゐたことを私は思出してゐた。耳に觸れるMとSとの戀は次第に激しかった。

私は年末も押詰つてから二三日小田原へ行つ

てゐたが、その間に一夜泊りで湯河原へ出掛けた。若しもM女でも来てゐたら變だと思つたが、幸ひに氏は一人で火鉢に寄り添つておぼた。食事と共に二人で火鉢を挟んで冬の宵を過ごしたが、お互ひに話はずまなかつた。

「紀行文はあれで中止になつたのですか」と訊くと、

「あれは旅費にするつもりで書いたのだが、原稿料がよくないので、それなり書きたくもないから止めたのです」と、氏は答へた。机の上には何かの洋書があつたが、氏はそれを讀んでゐるやうではなかつた。「楠山が熱海に来てゐるから電話で呼ばうか」と、氏は欠伸まじりにいつた。私は撞球場へ行つて長い夜の退屈をまぎらして、別の部屋で睡眠に就いたが、翌日様子をみると、氏は火鉢の側に正坐して、上へは何もしないでゐた。

氏は正坐して苦んでゐたのである。泡鳴氏のやうではなかつた。しかし、そのS氏が、話甲斐のない私に向つてさへ、一度くどくどと思つた。それは藝術座創立前のごとき、M女を中心の問題にして、早稲田の一部の人々が騒いでゐた。

頃であつたが、私がつと、郊外の氏の宅を訪ねて行くと、氏は例になく昂奮した顔して、T博士の主宰してゐる協会の落着きを懐疑した。「思ひ出」のやうな通俗劇を演じたことが借款の一つの理由になつてゐるらしかつたが、その劇は通俗であつても面白い芝居であつた。氏自身も以前「歌舞伎」誌上で、日本向きの面白い芝居として推稱したことさへあつた。

「T博士に宛てて僕は手紙を出して置いた。僕は責任を帯びて書いたのだから、後で問題になつた時の用意にと思つて、手紙の下書は保存してゐるといつたが、外交問題か裁判事件見たいに、T博士とS氏との間に手紙の控へを必要とするのは、私には變に思はれた。協会の仲間には陰謀のあることを氏は洩らした。その他、師弟水魚の交はりも、一婦人のために打砕かれるのを、この時痛感した。親子の間、兄弟の間、朋友の間も、婦人のために造作なく反目されるのである。主義の争ひ見たいにいつてゐたあの時の早稲田の人々の心持は可笑しい。」

泡鳴君はその點で露骨で正直であつた。K女史と親しくなつた時に、彼女を筆かき口で非難してゐたらしい柴田宗彦君と、精養軒であつ

たある會で椅子を並べると、いきなり突つ掛つた。

「君は婦人のいふことばかり聞いて、一概に夫人を罵倒するのはいけないぢやないか」と、柴田君が青い顔していふと、

「いや、女は弱いから、僕が辯護してやるんだ。君のいつてゐることはみんな出鱈目なんだ」と、泡鳴君は剛い顔して鼻を鳴らした。

私は側で聞いてゐて、女が弱いか泡鳴が強いのかを疑つてゐた。

藝術座が組織されて急に勢づいてからのS氏の行動は、新聞の記事や知人の話によつて、私は間接ではあつたが、つねに心に留めて、あは悲みあるひは喜びあるひは淋しい思ひに打たれた。藝術座の芝居よりも、氏の行動によつて、人生の本體を見せられてゐるやうに思つてゐた。

「先日伊勢の山田へ行つてゐた男が、藝術座の乗込みがあつて、S氏が廣告旗をたてた俥に乗つて町を引廻されてゐるのを見て、氣の毒な思ひをしたといつてゐた」と、ある知友が私に話した時には、私は、威嚴のあつた昔の氏と、今の氏とを思ひ比べてちよつと暗い思ひがしたが、それは皮相な同情ではないかと直

ぐに思ひ返した。早稲田の講壇で美學などの講義をするよりも、M女の「先生」として、廣告旗を翻して町廻りをした方が、S氏自身にとつては遙かに生存の興味が豊かだつたかも知れない。

私は打たれても殴られてもへたばりさうでなかつた泡鳴君の死顔は見ることは出来なかつたが、S氏の死顔は、今なほ明かに覚えてゐる。

私は梅雨降りたる今夜、故郷の家の二階で、薄暗いランプの下で、S氏の死面を目の前に浮かべながらこの原稿を書いてゐる。この古い舊屋には老父母が二人住んでゐるだけなので、家の中には勢のいふ一つ聞えず、淋しきは身に沁むやうである。舊知は近年相ついで倒れて、昔から少かつた私の知友はますます少くなつた。私の壽命も餘すところ幾干もないことは分つてゐる。私はしばしば筆を擱いては、さういふことを考へてゐる。

私は藝術至上主義を信奉したことはなかつた。書きはじめの頃島村氏に向つて、「私は物を書きだすと、頭が痛くなつて、夜はよく眠れないし、壽命が縮まるやうに思はれます」と云ふと、「いや、ぢやないか、倒れるまでやつたらいいぢやないか」と、氏は云つた。氏は見掛けによらない熱烈な所があつた。岩野泡鳴は、「物が書けなくなつた、頭が役に立たなくなつたら舌を嚙んで死ぬるさ」と云つてハツ／＼と苦もなげに笑つた。

私は、一つは思ふやうに筆が運ばないためでもあらうが、さういふ熱情を文學に對して持つたことはなかつた、何かの因縁で道連れになつた女を、振切ること出来ず、不承々々に一生の旅をしてゐるやうなもので、有馬武郎氏の如く女に殉じるやうな氣持には、私はつひになれないのである。

四十になつたら止めようと夢想してゐたので、その頃東京の家を引拂つて故郷へ歸つたのであつたが、自分の思ふやうにはならなかつた。自分の筆の稼ぎで巨萬の富を蓄積し

〔白鳥隠居の「私の文學修業より」〕

推敲を重ねた作品よりも、手軽に書かれた手紙や日記に於て、作家の本性はよく現はれるものである。ある傑出した作品を理解するために、批評家の説明によるよりも、作家自身の手紙や日記によつた方が確かで、明瞭だと思はれることが多い。私はこの頃、ツルゲネーフが佛蘭西の友人に與へた書翰文集や、フロウベルがジョルジサンに與へた手紙を讀んで、さう感じてる。この二大作家の日常生活が有り／＼と分つて面白く思はれるのみならず、彼等の創作の根柢までも見渡されたやうで面白い。

ツルゲネーフの晩年は故國を離れて巴里で過されたので、自然主義系統の文人とつねに親しい友情を保つてゐたと云はれてゐるが、異郷の人として、佛人に對しては氣氣してゐたやうなところが書翰集に見えてゐる。ツルゲネーフの死後に、彼が生前故國のある知人に寄せてゐた感想文や、筐底に藏してゐる記録が發表された時に、ドーデーなどはツルゲネーフに慕つた中からおれたちを取打つと云つて憤慨し、兄弟

同様に親しくしてゐたことを思々しく思つてゐたらしいが、私はこれによつて、異郷生活の不自由さを痛感した。ツルゲネーフもトルストイやドストエフスキーなどを筆直に批評したやうには、ドーデーやゾラを批評し得なかつたのである。日本に住んでゐる朝鮮人や亞米利加に住んでゐる日本人が、精神上の不自由を感じるのと同じ國人でも、他郷に居る定めると、周囲との妥協に心をつかはねばならぬのであらう。

私は一語をも人とまじへることなくして一週を過ごすことがある。そして、一週の終りにその期間の経過を回顧すると、取立てて云ふべき事件の一つもないのに氣付くことが多い。私は日曜毎に母と姉とに會ふだけである。屋根裏の鼠の群だけが私の社會である。雨や風の荒れない時には鼠どもが私の頭の上で氣味の悪い音を立てる。夜といふ夜は炭よりも黒く、私の周囲は沈黙のみである。沙漠に於ける如く無限にさうだ。人間の感覚はかゝる境界に於ては、

「私が人生に於て求めるものは、塵で汚すための幾重ねかの紙片のみである。私は果しのない沙漠を當てもなくさまよつてゐるやうに感ぜられる。しかも、私は旅人でもあり野郎でもあり、あるひは沙漠でもある。……私が支へてゐるだ一つの希望は、やがてこの世に別れを告げることであるが、私はあの世の存在は無いと信じてゐる。有れば一層苦しい世界なのであらうが。……否、否、悲愴はこの世だけで十分だ」これもフロウベルの手紙の中の文句である。

私は傑出した藝術を後世へ残して世界に名を知られてゐる此等の文豪の心にも、屢々不安の暗い影が差してゐたことを、あたり前のやうにも思ひ、不思議なやうにも思つた。迷妄に提はれない聰明鋭利な彼等の眼には、常套的な宗教観などで好意な安心は得られなかつたであらうが、しかし、自己が安んじて動けない所を、老の到るまでに見出し得なかつたのは淋しい。

ツルゲネーフはフロウベルに宛てて病苦を訴へ、「自分はつひに犬の如く死ぬるのであらうか」と歎じてゐる。フロウベルは死の近きを豫

感して、「影が手を包みつゝあり」と悲んでゐる。かうなると、その二偉人の歎聲が凡人の愚癡と同じやうに思はれる。私の少年時代に知つてゐた田舎のある耶穌信者は、神の御許へ赴くといふ確信を有つてゐたためであらうか、死に際して、歡喜を面に湛へて最後の息を吐いた。永遠の生命を信じた田舎者の心は遠天の果て、かの二偉人の如き心持が人世の眞相を捉へてゐるのであらうかと、私は考へ直して、胸けがたい詰りに暫らく悩まされた。そして、際立つた事業は何もしなかつても、絶えず平和な心を有つてゐて、笑つて死生の溝をも飛越えた田舎信者のN氏の方へ、いつか私の心は惹かれて行つた。

少年時代の私の日には、餘程の老人として映つてゐたN氏も、その頃五十にまだ間があつたので、今の私の年齢とさう違つてゐなかつたのであつた。若い時分から努力で可成りの身代を造り上げて、雜貨商として近郷に顔を知られてゐて、田舎の小さな教會では中心人物の一人になつてゐた。私は日曜ごとに會家通ひをした時分に、たび／＼N氏の宅で午餐を養はれた。暑い日には夕方まで其處で休んだこともあつた。時々教に關した話も聞かされた。元來單純な信仰をもつてゐるだけで、學問は幸う

じて聖書を讀み得るくらゐに過ぎなかつたN氏の話には、その頃の私は、あまり重きを置いてゐなかつた。ジョンソンといふ米國の宣教師が説教に來た時、N氏などがジョンソンといふのは日本の尊と同じ意味だと云つて有譯がつてゐるのを聞いて、私は嘆息した。

私が東京に留學して、はじめて、歸省した夏であつた。久振りで會堂へ行くと、N氏が病氣してゐて日曜の集まりにも暫らく出て來ないといふ噂を聞いたので、歸りがけに見舞に寄つたが、その時の彼れは、最早一ときも寢床を離れてはゐられないほどに病が重くなつてゐたのであつた。多分骨髄の病氣であつたやうに記憶してゐたが、氏は少しでも身體を動かすと疼みを疊ると云つてゐた。

「私も丈夫な時にや、兩賣のことや家の用事に氣が散つて、基督のお恵みを一心に考へることが出来ななだが、この頃は聖書を讀んで聞かせて貰うても、讚美歌を唄つて貰うても、身に沁みてお有難いことが分るやうになりました。……私は僅かな身代でも親から譲つて貰うたのぢやなし、誰れのお世話になつたのぢやなし、自分の腕一本で稼いだのぢやなし、威張つて居れると自慢したこともありましたが、やうも身

の程知らん體上なことを考へて居つたものぢやと、この頃になつて氣がつきました。御覽なされ、私は御飯を食ふことから、大小便の始末まで、みんな人に厄介を掛けて居りますのぢや。家の内や娘の介抱を受けるのは當然のことぢやと、誰れしも云つて居りますが、家内にも娘にでも情深い心が自然に備つて居るのはどういふ譯ぢやとお思ひなされる。神様がさうからぢやありませんか。播かんと種は生えはしません。……それぢやで、私は家内にでも娘にでも、この頃は頭を下げてお禮を言ひます。笑ひ事ぢや御座いませぬぞな。娘や家内の心に映つてる神様の惠深いお姿に私はお禮を申上げて居りますのぢや。……私の病氣がよくなりましたれば御恩報に教會の方へ身を入れて、永い間皆様も考へてゐなすつた教會の新築が出来上るやうな運びにしたいと思つて居ります。……神様が早く私をお側へお招きになるのなら、私はとやかうこの世の事に心を留めずまい。……私は時々夢の中で美しいあちらの世界を見ることがありますのぢや。……N氏は仰向きに寝たまゝ、落着いた調子でさ

う云つてゐたが、元氣のよかつた時分のN氏の  
田舎くさい信仰話よりも、どれほど深く私を  
感動させたか知れなかつた。私は病床の傍  
に、静しく坐つて黙つて耳を傾けてゐた。  
「私も身體の骨節が疼んでならん時にや、若い  
顔もするし、家の者にすら當りもしますのぢ  
やが、神様は私に辛氣のたふしをお叱りに  
はなりません。神様が見てお出でになるのに、  
體裁つくつて居るには及びますまい。泣きたい  
時にや泣いたらいいぢやありませんか」  
やがて、東京の事を訊かれたので、私は取留  
めなく學生生活の有様などを話すと、  
「私は貧乏な家に生まれましたで、読み書きも碌  
に出来んやうな人間で歳を取つた譯ですが、こ  
れからの若い人は學問せにやなりません。學  
問がありや、話らんことに迷はされないうで済み  
ますから、……と云つて、N氏は教師に説明さ  
れたヨブ記の話を持出した。ヨブの如き正しい  
者が苦しい試みに會はされたことが、多少身に  
落ちない暗い影を彼れの心に印してゐたのであ  
つた。

「僕にもよく分りません。あれには神學上の六  
ヶ敷い理窟があるんでせうね」と、私は答へた。  
「私も丈夫な時には、上の空で聖書を讀んで

居りましたが、私のやうな無學な者には分りか  
ねるところもあります」と、N氏はちよつと疑  
ひの眉を擡めたが、それは一時の曇として掃清  
されたやうに、「しかし、神様の御側へ行けば、  
何もかも分ることから、懺悔するには當  
りますまい」と安んじて、聖書のうちの有難い文  
句を被れ此れと口に上した。

その年、夏季休暇が終りに近づいて、上京  
の支度を取掛つてゐる時分に、N氏は過去の知ら  
せがあつたので、私は追憶の心を寄せるため  
にわざ／＼訪ねて行つたのであつたが、その時  
に私の目に映つた氏の死相には、苦しい病氣  
の果とは思はれないやうな平和が宿つてゐた。  
無智の平和と輕んじることは出来ないやうな氣  
がした。

爾後數十年間に得た私の書物の上の知識も、  
ヨブ記の謎を解くことが出来ないが、さういふ  
煩はしい疑問に多くの悩みを浪費しないで、平  
和な心をもつて死の扉を開けて行つたN氏の  
單純な信仰が羨ましい。

フロウベルの淋しい懷疑や、ツルゲネーフの  
不安な心算に共鳴する自分の濁つた心を私  
は憎む。……しかし私は今更どうすることも出  
来ない。

こともあるが、出稼ぎの漁夫の揃つて歸村して  
ゐる時節とは違つて、早朝の泉に人影を見るこ  
とは稀だ稀だだ。  
はじめの間は、私の顔が珍らしさうに見詰  
まれて、「何方へお出でなされる」と、途中で誰  
れ彼れから訊ねられることもあつたが、この頃  
は事情が滑道一帶の人々に分つたので、顧み  
るものもなくなつた。私は歸郷するたびに、  
日毎に山へ上り濱へ出るのであるが、村の人々  
と打解けて話をしたことは殆んど無かつた。自  
分の家以外の家の圓を跨いだことも殆んど無  
いと云つていゝ。

### 泉のほとり

私は日の出前に起きて、顔を洗ひに山麓の泉  
まで出掛けるのを毎朝の例としてゐる。水質の  
悪い井戸水を用ひるのは氣持が悪いからでもあ  
るし、朝食前の散歩が健康上に必要なためでも  
あつた。  
人家の間の汚らしい道を急いで通り抜けて、  
小川の橋を渡り、大根畑の側を横切り、墓地へ  
の通ひ路から取れて、石ころ道を數十歩も上る  
と、苔の蒸した石に圍まれた清冽な泉が目の前  
に現はれるのである。古い石地蔵が傍に安置  
されてゐて、後は繁つた竹藪が奥深く積んでゐ  
る。共用の大柄杓で弱く澄んだ清水を汲んで、  
口を漱ぎ顔を洗ひ、あるひは全身を拭つたりし  
てゐると、爽やかな朝風が身に沁みて氣持がいい。  
空を仰ぐと、残月が竹の葉越しに見えたり、少  
し時刻の遅れた時には、向ひの山の端が櫻紅く  
なつてゐたりしてゐる。  
少しづつ雨が降つてゐようと、霜が霞く  
ほど冷たい朝であらうとも、私はまだこの習  
慣を止めないでゐる。たまた水汲み女に出會ふ

したがつて、村の誰れからも懐かしげに話し  
掛けられることはなかつたが、たゞ一人仙太と  
いふ男は、何處でも私を見つけてと、いか  
にも懐かしさうに大きな聲で呼び留めて、傍へ  
寄つて来るのを例としてゐた。彼れの家の前を  
通るたびに、「お寄んなさい」と私を招かない事  
がなかつた。彼れの方で私の住んでゐる離れ座  
敷の側を通る時にも、をり／＼は懐越しに話を

根本の愛ひを拭はれて、暗夜に光を得るのは、  
宗教心に歸るより外にないであらう。亂世の  
人々が淨土宗に歸依したことや、中世に、  
修道院の榮えたことが私にはよく思出され  
る。文藝復興後の世界よりも、あの頃に本當  
の安心があつたのではないと思はれる。歴  
史家は中世を暗黒時代と稱して、いろいろ  
にケチをつけてゐるが、永遠に生命を確信し  
てゐた人には、他の増末たる日常生活の不足  
はどうでもよかつたのではないか。  
私は深夜に目醒めた時、すべての事について  
信念がない、風に吹かれる木の葉の如く、水  
に漂ふ浮草の如き、自分の生存について、情  
然として心の消え入るやうな思ひのされるこ  
とがある。神とか佛とかいふ時代の端のつ  
いた、既成の言葉で現はされるものを信じて  
信じて信じて得る境涯を望んでゐるのである。

（白鳥愛子集の「あの夜の夢」より）

てみた。

「已れでさへ、何年置きか故郷へ歸るたびに、村の様子の変つたのに気がつくが、お前は尚更さう思ふだらう。十六年も世間の風に吹かれないでみると、世間はすつかり變つて居るんだから、生れた土地へ歸つて来て、狐に狐に捕まれたやうな気がするだらう」と、数年前、彼れとの話の間に云ふと、

「さうですなあ。昔は皆なが親切だつたやうに思はれますと、彼れは細い目をパチ／＼させながら、胸に落ちぬやうな顔して云つた。

「今時の十六年は昔の百年よりも世の變りやうが烈しいんだから」

「しかし、若旦那、この村は昔の方がよう御座いましたなあ。あの時分には私一人が悪人で、他の人はみんなええ人であつたやうに思はれますが、今はみんなが意地が惡うなつたやうに思はれますがな」と彼れは感慨を籠めて云つた。

彼れはその後獨り住みに堪へられなくなつて、二度も三度も他村から女房を連れて來たが、どれも長くは居つかないで、徒らに村人の物笑ひとなつて居た。

歸郷後彼れの消息をはじめて私の耳に入れたのは、山の泉のほとりで手足を洗つてゐる

が、話は續けられなかつた。

幼い頃、仙太と私は屢々寢床を並べて眠つたことがあつた。

「月はあんなに小さく見えても大きいんだ。周囲が何百里もあるんだと私が教へると、

「阿呆云ひなさい。本にはさう書いてあるか知らんけれど、わしの日でどう見ても、そんなに大きいもんと思へる」と、彼れは例の細い目で澄んだ大空を見上げた。

仙太がゐないとすると、他に私を懐かしがつて聲を掛けて呉れるものはこの故郷に一人もゐないのだ。私は遺すから仙太のゐた家の方を見詰めた。其處の軒先からは朝露の煙が渡れてゐた。

時であつた。珍らしく早目に水汲みに來たある男は、私の側立に立つて擔桶に水を入れたが、

「どこのお人かと思ひました。あなたも歳をお取んなさつた」と話しかけた。

「君は誰れだつたね。忘れちやつた」

「私は蘇吉で御座います。この頃は西谷の方に家を持つとります」

「あゝ、さうか。私は相手の顔を見上げるともに、彼れが子供の時分に仙太に應丁で額を深く傷つけられたことを先づ思出した。額の傷は薄く痕を残してゐた。で、仙太はこの頃どうして居る？」と、咄嗟に訊ねた。

「あれは今年の四月からまた半へ入つとります。巡査さんの主婦さんの肩を斬つたんで、三年の懲役にやられました」

「相變らず無茶をやるぢやないか、巡査の身内を斬つちや罪が重いだらう」

幼い時から感情を壓へ得ない彼れの所行としては不思議とも思はれなかつた。

「去年の暮に、備後から二人も連れ子のある四十くらゐな女を連れて來とつたんですが、その女もはじめから承り辛抱する氣ぢやなかつたらしいんです。仙太の方ぢや今度逃げられちやかなはんと思つたと見えて、わしの居らん間に逃

### 生存競争

文壇に縁のないある知人が、私を訪問して半日を過ぎた間に、雑談に他んだ果の暇消しに、座側の新聞雑誌を見つてゐたが、「新潮」のこと興味ありげに話して、その讀後感として、「文學者もなかく煩さいものだね」と云つた。それは通り一遍の感想に過ぎなかつたのだが、私はその言葉を縁として、不斷自分が文壇の波に浸つてゐるために、ともすると氣づかないでゐることを、新に感じた。「新潮」といふ雑誌は、文壇の一面を窺ふには最も便利なるものであるが、その十二月號を手に取つて見ると、文學者としても、決して閑日月を樂んではゐられないことがよく感ぜられるのである。

私なども、自己の生涯を顧みると、文壇の風波を渡いでよく今日に至つたものだと思つた。感傷的な氣持にさへ襲はれる。自分で、一度かういふ生涯を繰返さうと思はないばかりでなく、年少の能が文學の社會に身を投じてることを、危うく、いぢらしく思つてゐる。人間は生きてゐる限りは、何處にゐても、運命

げでもしたら、何處までも追かけて見つけ次第叩き殺してやる、そのつもりで居ると商賣に出掛けるたんびに會はつたさうですが、そんなことを云はれるから、尙のこと氣味が惡うなつたと見えて、その女は巡査さんの家に手助けに行つて居る間に、主婦さんに頼んで村へ妻を隠したんでさあ。また女が逃げたなど、仙太の娘、前後見ずに巡査さんの家へ怒鳴り込んで、主婦さんが言譯するのを縁に聞きもせずに、側にあつたサーベルを抜いて斬りつけたんださうです。その時巡査さんは便所に入つとつたんださうですが、大變な騒ぎでした」

「そして、その女や連れ子はどうして居る？」

「それつきりこの村へ妻を見せません」

「以前米造を殺した時には、鹽に乗つて逃出したさうだが、今度はさうは行かなかつたらうね。今時分仙太の娘、あの細い目をパチ／＼させて後悔して居るんだらう」

「何しろ、五人の女房に逃げられたんですから一度は女の方で亭主と馴合ひて仙太の女房になつて、折角素本に借りて來るとる金をみんな持つて、逃げたことがありました」

さう云つてゐる間に、蘇吉は擔桶へ水を満たして、坂道を下りて行つた。私も歸りて下りた

に飼養されて生存競争に備まなければならぬのだが、文學藝術の社會だつて、決して風流平和の別天地ではないのだ。

「新潮」十二月號の文藝時評欄に於て、宇野浩二氏は、宮地嘉六氏の近作「果」を激賞してゐる。室生犀星氏も推讃してゐた小説であつて、私もそれを佳作として認めるに躊躇しないのである。私は数年前に、宮地氏のある、可成り長い小説を讀んだ時から、作家としていゝ素質を持つてゐることを知つてゐた。しかし、果を室生、宇野氏などの云つてゐるほどの傑作であるとは、私は信じ得ない。私に、この小説のことを持出したのは、過分の好評に反對しようとするためでなくて、文學藝術の鑑賞は、傍から見たら分に過ぎると思はれるほどに惚込むやうでなければ面白くないと感じたためである。過去の藝術作品が時代によつて毀譽褒貶に動搖の生じると同様、今日の作品も、時と場合と人によつて、高く買はれ過ぎたり、低く値踏みされたりするのを例としてゐる。そこが、藝術家に運不運のある所以であり、他の窺ひ知られない苦みと喜びとのある所以である。

(文壇時評より)

わが文學小觀

我々は馴れつこになつてあまり感じなくなつてゐるが、毎日の新聞の廣告の大部分が、雑誌と著書の廣告で埋められてゐることは、驚嘆に價ひするのである。一つ一つの賣高は僅少なのであらうが、兎に角こんなに頻りに發刊されるのによつて見ると、購讀者の数は、全體に於ては非常な數に達してゐることが察せられる。古文學の豫約出版が近年續出して留るところを知らないやうな有様であるのも、私には不思議な現象と思はれる。萬葉源氏の類も、過去十年の間に印刷された數よりも、最近五年か十年の間に印刷された數の方が、遙かに勝つてゐるかも知れない。神祕の珍本扱ひされ、むしろ神聖視されてゐた古典も、古ぼけた姿を明るみに持出された。そのためにより、眞價を發揮するものもあるだらうが、少數者が愛玩してゐた骨董品の價が押けて有難味の失せるものもあるであらう。

私なども、新聞の廣告面を見ると、絶えず購讀者を喚ぶのであるが、讀みたいと思ふものを一々讀んでゐたら際限がないので、成るべく讀まない分別をしてゐる。森岡外氏のやうに、三時間の睡眠で満足して、讀書三昧で一生を過したにしても、その讀破した分量は、古今東西の書籍に對しては、九牛の一毛にも當らないであらう。私は、この頃夏目漱石氏の作品を、暇々に讀んでゐるが、岡外氏と同様の多讀家であつた彼等は、その「文學論」の序文に於て、青年の學生に告げて、一春秋に當めるうちには、自己が専門の學業に於て、何者かを貢獻せんとする時、先づ全體に通ずるの必要ありとし、古今上下數千年の書籍を讀破せんと企つる事あり。かくの如くせば、白頭に至るも、遂に全體に通ずるの期はあるべからず、余の如きものは、未だ英文學の全體に通ぜず。今より二三十年の後に至るも、依然として通ぜざるべしと思ふ」と云つてゐる。

書物が容易に手に入る時代になつたのも、學者に取つて心ずしき弊病とは云はれない。落着いて、少數の書物を十分に味ふ昔の學者の心を

境には達せられなくなるかも知れない。藤井のやうな書物まで捜し集めて印刷するやうな世の中になつた。明治初年以來の新聞雜誌を全部蒐集し保存する計畫も出来たさうだが、世の中も煩しくなつたものだ。

徒らに讀書するのも精神の浪費である。いろいろなた物讀りになるだけでは詰らない。私などはどちらかと云へば、直接に人生に接觸するよりは、書物を通して人生を知ることが多かつた。作家としては、傾向であるまい。岡外漱石の天才にしても、その作品が書齋裏を帯びてゐるらしく感ぜられるが、私などは殊更さうであらうと思はれる。先頃の時事新報に「徳田秋聲氏が、文學者と小説家の區別を論じてゐたのを、東京灣在中に一回だけ讀んだ。續けて讀む機会を失つたので、氏の論旨が十分に分らなかつたが、さながらの眞人生を寫した小説と、學者の頭から割出した小説とを區別したのではあるまいか。論據をそこに置いて、一を是とし一を非としてゐるのなら、私も大體に於ては同意である。しかし氏の論中、漱石や岡外よりも紅葉の方が價れた作家であるらしい意見が露骨にされてあつたが、その説には、私は同意をすることを躊躇する。岡外の小説がいかに

書齋裏で濁つてゐても、その晩年の傳記小説「江抽齋」北條壽亭の如きは、幅に於ても深きに於ても、とても紅葉などの及びもつかないものであると確信してゐる。

書物を通じて世相人情を見ることの多かつた私などは、小説の材料を取扱ふに當つても、ある概念でそれを片付けてしまふことが多かつた。自分の過去の作品が濫判たる生氣を缺いてゐる所以である。

讀書に於ても、私はある一つの事を徹底的に研究する根氣を缺いてゐるが、人生に觸れるにしても、底の底まで入つて行くやうな氣力を私は有つてゐない。戀愛その他さまざまの人情でも、身を滅ぼすまでに突詰めて行つたら、そこに恍惚境が出現するであらうが、それは今までの私には達せ得られないものではなかつた。

しかし、性癖はいかんともし難い。私は人生の渦中に身を投ずることは嫌ひである。歳を取るにつれて、ますますさうなつて行く。が丈記や徒然草の作者や芭蕉など、日本の文學者の心には傳統的に清んでゐる微温的厭世觀、微温的無常觀に、私の心は浸つて行くばかりらしい。

私は、水火に震えられた實際生活を直寫し

た小説戯曲の類を好む。海産の砂丘に舞つて激浪怒濤を見るのを好む如く好んでゐる。しかし、自分がその波濤の中に突進しようとは思はない。幾十尺の海底に滑り込まなければ眞珠は掘んで来られないのだが、藝術の眞珠も、そのくらの苦難を經なければ手に入れることは出来ないのであらう。數十年の作家生活を經驗した今日、いくら鋭敏に目を働かせても、傍觀的態度だけを保存してゐる作家の作品は、體驗をぶちまけた作家の作品に及ばないところであることを、私は痛感してゐる。いろ／＼な作家があつて色彩がそれ／＼に異つてゐるから面白いのだが、悲喜哀歡の體驗が作中に滲つてゐないものは、讀者を捉へる力が乏しいに極つてゐる。他人の話を書くにしても、史上の人物を取扱ふにしても、自分がそれ等の人物と心を一つにしてゐるのでなければならぬ。それは分りきつたことなのだが、私は、自作に不誠を感じるときに、そのことを考へてゐる。眞人生について經驗の乏しい私は、作中の人物の心に入つて行くことが出来ないため、つねに自分の書齋的冥想で補綴するやうになり、従つて作品に生氣を失ふやうになるのだ。

私は更に一步を進めて、藝術と實行について

考へることがある。藝術至上主義などを唱へる人もあるが、藝術は實行の影見たいなもので、實行に没頭してゐる間こそ人間は全心的に生きてゐるので、さういふ人には、藝術なんかどうでもいふものではあるまいか。戀愛に耽溺してゐる人、職間に從事してゐる人に取つては、いかなる戀愛小説も、いかなる戦争劇も、種々な影に過ぎないのである。いかによく眞實を寫したと云つても、寫された眞實は眞實に含まれてゐる微妙な生命の脱皮見たいなものはあるまいか。私はそこまで考へて行くと、體驗を文字によつてぶちまけた作品だつて、畢竟それは體驗の影法師に過ぎないので、文字にうつす瞬間に、眞生命は逃げて行くのではないかと疑はれる。他の傑出した作家は、自己の體驗を遺憾なく現はしてゐるのかも知れないが、と自身は、時として自分の平凡な體驗を作品のうちに現はさうとしてさへ、思ふやうに現はし得られない憾みを何時も感じてゐる。文學上の技巧の不足もその一つの原因になつてゐるのだが、文學といふものは本來さう云ふもので、現實に對して畢竟、一掃そら言つたるに過ぎぬのではあるまいか。歌舞伎劇ばかりがそらん／＼しいのではない。近代劇だつて、文學上の遊戯と思はれない



ことはない。我々はいろく作家の拙く影  
を見、人生の影法師を見て、それを弄び、そ  
れを簡陋の具としてゐるのである。  
書を讀んで来た私は、自分の頭をさま  
ざまな作家の影法師の集にしてしまった。それ  
等のものが、人生の真相を知るにどれだけ役に  
立つたかと疑つてゐる。

### 強盜詩人

共同生活をする人間には、古來自ら道徳  
といふものが出来てゐて、それに反すること  
をするとは他人に斥けられるし、自分でも道徳  
的に良心の苦悶を感ずるやうになつてゐる。  
その苦悶が詩や小説や戯曲の重要な題材にな  
るのであるが、道徳と云つても、時代により  
國によつて異なるのみならず、同じ時代の同じ  
國に於ても、職業によつて寛嚴の差がある  
から面白い。政治社會教育社會文學社會  
など、それ／＼に道徳律の働き方が違ふ。乞  
食には乞食社會の道徳があり、賭博者にはそ

の仲間特有の道徳があるらしい。  
文學者の仲間では、世間の常識道徳の束縛が  
あまり感ぜられないやうで、教員界であつた  
ら、直ぐに免職になり世間に無向けもたらん  
やうなことを、作者が得々と書立てて、却つて  
世上の明采を博したりするやうなこともある  
が、しかし、文學者間にも、誰れが極めたとも  
なく一種の微妙な道徳はあるらしい。  
現在のどの國の文壇でも、盜賊は排斥される  
やうである。強盜文學者も盜賊文士も存在し  
ないやうである。泥棒の告白文學には私は、  
まだ接したことがない。  
ところが、昔はさういふものもあつた。この  
頃西洋文學大系を讀むと、中世紀の終りに  
François Villon といふ泥棒詩人のあつたこ  
とが出てゐる。その肖像はなかくいゝ顔を  
してゐて、私の知人に背てゐる。彼は佛蘭  
西人で、千四百三十一年に生れた。強盜をも  
し殺人をもした。巴里の刑場で世を過し、屢々  
入牢したが、奇蹟的に死刑を免れ最後には誰  
れにも分らないとこへ身を隠してしまつた。  
それで死んだ時が分らないし、墓所も分らな  
い。

(文壇新聞)

### ダンテについて

聖書は面白い書物である。基督教の神を信ぜ  
ず、基督教の教理に心服しない私も、一部の新舊  
全書を、一生座側にも置くべき愛讀書の一つ  
としてゐる。私はそれを古代史として、人生記  
録として、素材なる小説として、純然なる詩歌  
として、愛讀してゐるので、イザヤ、エレミヤな  
どの慷慨悲憤の豫言書や、ポロの傳道的書翰  
などには、左程の興味を寄せてゐない。エバが  
アダムを誘惑し、カインが嫉妬のために弟ア  
ベルを殺し、エサウが一杯の羹物のために弟  
に家督の權を譲り、ヨセフが自分を捕んだ主人  
の妻に欺瞞をくはしたために冤罪を背負つた  
ことなど、御世紀の古代人の物語は、さながら  
現代人の生活を映してゐるやうに、私には思は  
れる。出埃及記、刑吏記など、人類の集團的生  
活を寫した寫實小説のやうに思はれる。  
しかし、私は、近來、しみ／＼と古書に心  
を潜めたことがなかつた。毎日々々、日に觸れ

てゐる文章は多く新聞のそれである。雜誌のそ  
れである。新刊書のそれである。世に連れまい  
として現代の雜駁な知識をそれ等から得るのに  
急がしい。自然速讀の習慣がついた。一巻の書  
物を手にしても、汽車の窓から外を見るやうな  
態度で讀むやうになつてゐる。山を下り谷を渡  
り、一歩々々移り行く光景を靜かに眺め靜かに  
味ふやうなことは稀になつた。  
私は、時としては印刷術の幼稚だつた昔を  
羨ましく思ふ。歐洲の中世紀、日本の徳川期以  
前には、多數者は殆んど文字を解しないのであ  
つたが、その頃少數の讀書力を具へてゐた人々  
は、自分の趣味に適した書卷を一字一句反復熟  
讀して、そこに含まれた意味を残るところなく  
味得したのであつた。私なども幼少の時分に  
は、一篇の小説一巻の史傳を珍重して、殆ん  
ど讀誦するほどに耽讀したことがあつた。種々  
多量の書物の目まぐるしく出版される今日、  
書物の有難さや薄らいだ。

彼れは、古代の佛蘭西の詩の形を取つてそれ  
に新生命と新詩美を與へた。その詩には憂鬱  
がみなぎつてゐる。彼れは人生を嘲笑し、自  
己の誠を誇つてゐる。しかし、常に教員界の  
側で筆を執り、絶えず死の恐怖を感じてゐた。  
評者が彼れの詩を評して、ダンテの詩が中  
世紀の莊嚴美と大理想を具體化してゐる如  
く、またチョーサーが中世紀の幸福なる笑ひ  
を現はしてゐる如く、彼れの詩は中世紀の苦  
痛と恐怖とを具體化してゐると云つてゐるの  
は、私には甚だ面白く思はれる。この強盜  
詩人は、ダンテ、チョーサーの如き詩人と文  
學史上に照立してゐる譯だからである。  
スキンボーンは、その美しき詩に於てその強  
盜詩人を讚美してゐるからます／＼面白。  
「涙と火から作られし懐かしい唄の王よ。如  
婦は汝の乳母にして、神は汝の祖先なり」な  
どと。  
日本には、まだ泥棒からえらい詩人は出ない  
らしい、出ない方が仕合せである。

を懐に入れて、あちらこちらの一曲あるひは一章を、恣に讀誦してゐたのである。外國の書籍のうち、私がこれほどに親しんだものは他に一つもないと云つていい。……それに關はらず、私はまだダンテを十分に理解したとは云はれない。英譯「神曲」を一通り讀みこなしたと云ふのも誇れるくらゐである。

少年の頃すでに名前だけを知つてゐたダンテに關して具體的知識を最初に與へて呉れたものは、例のマコーレーのミルトン論であつた。

(それには、「失樂園」と「神曲」との比較論がされてあつた。ダンテの地獄の描寫は繪の如く、悪魔の身の丈を物差しで計つてゐるやうに筆が具體的であるといふ風に説いてあつたと記憶してゐる)それから、カーライルの「英雄崇拜論」であつた。内村鑑三氏の「文學講義」であつた。内村氏は、例の不敬事件に基いた迫害を誇張して考へ、自己を「國人に棄てられし人」としてしまつて、ひそかにおのれをダンテに比べてゐたらしく、鐵鏡の語調は、年少にして感じ易い、思慮の單純な私の心胸を、少からず刺戟したのであつたが、それにもまして、私をして、六百年前の外國の詩人に對して、正體を見ぬさきから、隨喜崇拜の掌を合せたものは、

獄の門の頂に、我れを過ぐれば、憂ひの都あり。我れを過ぐれば永遠の苦患あり。我れを過ぐれば滅亡の民あり。……永遠の物の外物として我れよりさきに遺られしはなし、しかしわれ永遠に立つ、汝等此處に入るもの一切の望みを棄てよ」と思ひ記されてゐる言葉を讀むあたりまでは、兎に角嘔き嘔いて行けたのだが、そこから私はへこたれて讀んだ。シェークスピアのハムレットなんかは隨喜崇拜したゲートは、ダンテの「地獄篇」は嫌悪すべく、煉獄篇は茫漠たり、天國篇は倦怠を齎す」と云つてゐるさうである。近代思想の權化であつたゲートには、中世紀の陰氣な思想や感情が厭はしく思はれたのであらうが、ゲートをも微の生えた前代人として取扱ふやうになつてゐる日本の現代人には、尙更ダンテなどの迎へられよう筈はない。全體被れば、西洋の文學者のうちでも、最も日本向きでない一人なのだ。

しかし、私自身は、中世の煩瑣なスコラ哲學には何等の興味をも感ぜず、ダンテの人生觀にも必ずしも共鳴してゐるのではないが、中世に對してある種の羨望を寄せてゐる。「神曲」をも今なほ、棄て難い良書としてゐる。……日本も文運隆盛の結果日本向きでない、ダンテ

例の「英雄崇拜論」中の、詩人としての英雄の一章であつた。今日はどうか知らないが、この論文は、以前は諸方の學校の英語の教科書とされてゐて、カーライルの著作中最も廣く讀まれたものであつた。「サルトルレザルタス」とか「フランス革命」とか云ふやうな難解な著書に比べると、遙かに讀易いためであつたが、第一、「英雄崇拜」といふ題目が、内容の如何に關はらず、日本の青年の心を動かしたのであらう。文學鑑賞の幼稚であつたその頃の讀者は、スコットを讀むにしても、まづ「湖上の佳人」を選んだ。

「英雄と英雄崇拜について」の講演は、當時の聴衆であつた鈍重な英人をも感奮させたであらうと思はれるやうな、言々風霜を含んだ峻烈な調子のものである。カーライルが自己の不平の鬱憤晴らしをしてゐるやうで鋒芒を現はし過ぎてゐる感じがあるが、兎に角、今でも、一氣に讀通されるほどの興味に富んだものである。「詩人としての英雄」の章下には、シェークスピアとダンテとを並置論じて、例の「印度帝國を失ふ」とも我々はシェークスピアを失ふ能はずなどと叫んでゐるのだが、ダンテについても「世紀間歇してゐた歲月がダンテによつてはじめて聲を放つた」と云つてゐる。

に關しても、その翻譯や研究書が可成り出版されるやうになつた。「神曲」の全譯も二つ世に出でゐるが、私は山川内三郎氏のそれを購讀した。譯者は多分カトリックの信者であるらしく、文學上の名譽心よりも宗教上の信仰を動機として、この神聖なる喜劇の翻譯に着手したのであらうが、譯文の態度は甚だ忠實である。原詩に含まれてゐると云はれる音楽の響きや詞句の風韻が缺けてゐるとしても、あんな難解な長詩を、日本語でこれだけに譯しこなすことは大事業である。近代小説の出舞日な翻譯とはその難易同一視すべきものでない。私は、ケリーの英譯本では曖昧模糊の感じのしたところを、山川氏の日本語によつて明かにした。ことに、首尾を通じて精細な註釋が附せられてゐるのは、譯者の誠意を推察することが出来る。ダンテばかりは註解に依らなくつては、いかに人も讀みこなし得られないのである。山川氏は、宗教以外に文學上の名譽心はないのか、これほど丹念に仕上げた譯書に於て翻譯の苦心談、あるひは自己のダンテ觀などを一言一句も述べず、ダンテの略傳さへも添へないで、たゞ氏の師である新井先生の、村學究然たる面白くない感想録を、毎巻の巻頭に有難さうに掲げ

「ダンテの神曲は、中世紀千年間の沈黙の聲なり」と云つたカーライルらしい評語は、はじめでそれを聞いて以來、數十年後の今日まで、神曲を讀むたびに、私は思出すのである。私は、基督教を信奉してゐた二十歳前後の當時から、基督教とその信者とを嫌惡してゐる今日まで、矛盾してゐるやうだが——歐洲の中世紀に對してある憧憬を寄せてゐる。早くから中世紀千年の人生を具體化した神曲の前に拜服する心を起したのは當然であつた。

信者であつた青年の私は、數理の繪解きのやうなバンヤンの「天路歷程」を面白く讀んだ。無學者の筆になつたこの書物は、通俗ではあるが、話上手が浮世囃を話してゐるやうな劇的筆致に富んだ傑れた宗教文學であつた。しかし、ダンテは六ヶしかつた。六ヶしいのが當り前なので、伊太利人でさへ、ダンテ後問もなく、神曲を讀むのに註解を必要としたほどなのであつた。

で、新著が讀くと現はれるさうだが、ダンテ自身は著作の数は少く、その實生活についても、調べ得られる限りは大體知り盡されてゐるのだから、さう新しい発見のあらう筈はないと私は讀まないで推察してゐる。しかし、この中世紀の詩人に關する研究が旺盛で、新著が頻りになるのによつて見ると、西洋でも、中世紀を夢想し憧憬する人々の尠くないことが推察されて、私は人生の歸趨について考へさせられるのである。「現世を苦の世界とし假りの住むとして、修道院に籠つて、天の一方を夢む中世紀氣質は、いかに強烈な近代の力、文明の光を以てしても人心から消亡させ得られないのである。私は歴史の表面では陰惨であつたらしい中世紀の人々を、羨望の目をもつて見詰めることがある。

阿部氏の「神曲とアララストラ」論は、氏の哲學的知識と聰明な批判力を示した大論文である。私はこれによつて、はじめて、ダンテに對する日本人の眞實な理解に接したので、學ぶところが尠くなかつた。翻譯して歐米のダンテ學者に示すに足るものである。……しかし、私は必ずしも氏の所説に贊同してゐるのではない。英國のダンテ學者の中、最も深遠らしい哲學的

考察を試みたムーアの所論と同様に、それに暗示されて出立した阿部氏の、ダンテの罪惡觀についての批判にも、左程の興味を感じ得ないのである。

私が、年少にしてケリーの譯本を手にして以來、ところ／＼拾ひ讀みしながら、感動した詞句には鉛筆やインキで線を引いたが、今その二三を選出して見ると、

淨火篇の第十一曲、傲慢罪を淨めつゝある舞家オドリジと、ダンテとの會話が、その一つである。

「あゝ、君はグッピオの舞と云はれた人で、巴里で色彩畫として持擧げられた名人のオドリジさんではないか」

「いや、兄弟よ。ボローニア人フランコの描いた繪の方が、僕のよりは華やかで勝つてゐる。今はあの人が名譽を一人占めにして、僕も生きてもゐない間は、頻りに人を凌がうとして、心がその方にばかり向つてゐたから、今のやうにこんなに人に譲る氣になれなかつたが、……あゝ、人間の力は空しい。先輩を凌駕する者が出て来ないやうな衰へた世なら兎に角、さうでない限りは、青々と茂つた名譽の頂上も、直ちに枯れつ葉になるのだ。……昨日までチマーブニが繪畫界で覇を唱へてゐたと思ふのに、今はジョットの呼聲が高くなつて、あの男の名譽は微かになつた。……それと同様に、一人のグイードが、他のグイードから文章の名譽を奪つたが、間もなくこの二人を果から逐出す者が生れて来るだらう。……浮世の名聞は、此方へ吹き、彼方へ吹いて、處次第で名前までも變るやうな風の一息に過ぎないのだ。……」

分り易い現代語に譯したから、こんな冗漫になつたが、ケリーの譯文によつても、實に簡潔に含蓄のある文辭で言現はされてゐる。西鶴の文章が思出される。ストリンドベリーの「ダマスクス」にも、毒家を例に擧げて、浮世の毀譽褒貶の難いことが詳しく述べられてゐるが、さう云へば、「ダマスクス」はストリンドベリーの神曲であり、神曲はダンテの「ダマスクス」である。一人は中世紀の末期に生れたために、いふ形に於て、おのれの心の記録を留め、一人は十九世紀末期に生きてゐたために、あいふ形に於て、おのれの心靈の記録を記したのである。古今の文人の中でも類を絶してゐたと云はれほどに高貴な相をして、沈鬱と思慮とが面に現はれてゐたダンテと、山嶽のやうな顔

して世を説んでゐたストリンドベリーとは、容貌からして非常に違つてゐる。それで私は、この二人の肖像を並べて見て、中世紀と近代と二つの時代の象徴の如くに感じてゐるのだが、この二人は、根本に於てはそんなに相違してゐないのだ。ストリンドベリーは、世評で極められてゐるほどの哲學家でも女嫌ひでもないし、ダンテもダンテ學者によつて理想化されてゐるほどの愛の權化ではないのだ。そして、かの北歐の近代詩人も、近代らしい形に於て、地獄と煉獄とを通過して自己の心靈を磨へてから、つまりはカソリックの宗教的恍惚境に老後の不安を求めたのであつた。

私は、また、「わが血は嫉妬のために湧きたり、われ若し人の幸福を見たらんには、汝はわれの憎惡の色に被はるゝを見たりしなるべし」(淨火篇第十四曲、グイード、デル、プーカの言葉)といふ詞句に線を引いてゐる。「不幸な境遇に於て、幸福だつた昔を思出すほど大いなる悲しみはなし」と云つたフランチェスカの有名な歎息に關聯をつけたのは云ふまでもない。

……いと深く愛する物をば汝悉く奪て去らん。これすなはち流罪の弓の第一に射放つ矢なり。……他人の趨向のいかに苦く、他人の家の

際子段の昇り下り、いかにばかりつらさを汝自ら験すならん(天竺篇第十七曲)

これは、ダンテが天上で會つた自分の祖先のカチゲイダから、ダンテ自身の將來の不確なる生涯を豫言される場所であるが、云ふまでもなく、祖先の豫言に託して、ダンテ自身の流罪の艱苦の一端を微見させたのだ。「他所の家」の飯には骨がある」と日本でも寄食者の苦みが云はれてゐる。二階借りの苦しさは東西古今同じことである。

かういふ風にダンテを拾ひ讀みしても、現實の世相現實の人生の描寫が、至るところにきらめいてゐるのだ。たゞ、ダンテは中世紀らしい表現法を用ひ、ストリンドベリーなどは近代らしい表現法を用ひた相違があるだけだが、しかし、あれほど強烈な主觀的詩人であつたダンテが、自己の心靈の苦悶と解脱の經路——すなはち自然傳を筆にしたが、なぜストリンドベリーなどは違つて、自己の生活の直寫を試みなかつたか。彼れが二十年間の流離の生涯を何處でどうして過したかについては、断片的に知られてゐるばかりで、後世のダンテ學者をしてその穿鑿に苦心させてゐるのだが、彼れは何故に、自己の實生活については自ら語るに

この頃讀んだ、グランドセントの「ダンテの威  
力」といふ講演集のうち、(中世紀に於て最も  
尊敬された修辭學の權威はアリストートルとシ  
セロであつた。十三世紀では、修辭學ばかりで  
なく、辯論術と論理學とが、大學で重んぜられ  
た。そして、その修辭學は文章を没個性ならし  
めるやうに教へたので、ダンテのやうな強烈な  
個性を持つた作家でもそれに感化されるを免  
れなかつた。彼れが修辭學を學ばなかつたなら  
ば、「新生」と「神曲」との心靈的自傳に於ても、  
自分の物質的實際生活についてもつと何かを書  
留めたに違ひないだらう。誰れでも必要がない  
のに自分について語ることは、修辭學者に許さ  
れてゐないと、彼れは云つてゐる……)と説いて  
あつたが、かういふ修辭學が信奉されたのは、  
中世紀の人生觀に深い關係があるのである。  
人間の實生活、すなはち外形的生活は、さし  
て重んずべきものではないので、重んずべきは  
たゞ心靈の生活だけであつた。だから、今日の  
日本の小説のやうに、自分の煩瑣な日常生活  
をゴタ／＼と書く必要はなかつたのである。自  
分の個人的行爲を喋々と語ることは恥とされて  
ゐたのだ。

「ダマステス」が「私」戯曲である如く「神曲」  
も「私」戯曲である。しかし、それは、自己日常  
の行動をゴタ／＼と書きつめた日本の私小説な  
どとは、正反對の文學である。それで、今日の  
雜誌文學を讀んだ私は、屢々目を「神曲」な  
どに注ぐやうになつた。

それでは、ダンテは、人間を描くこと亡靈の  
やうであつたかと思ふと、決してさうではな  
かつた。ケリーの英譯本には「ダンテの幻相」と題  
目がつけられてゐるが、この幻相が寫實を極め  
てゐることは、地獄篇の幾曲かを熟讀すれば、  
誰れにでもよく解るので、天性の洞察力と寫實  
の才とは、地獄を描いても、天堂を描いても、  
人間を描いても天使を描いても、それ等を讀者  
の眼前に浮上らせるほどの妙境に自ら徹して  
ゐたのだ。彼れの寫實の手腕は、シェイクスピア  
などの及ぶところでない、私は確信してゐ  
る。有名なフランチェスカの情話やウゴリーノ  
伯の慘話も云ふまでもなく、火氣や焦土を手で  
拂ひながらも、それ／＼に頸に懸けた財布を見  
て目を喜ばしてゐる高利貸でも、雨や雪や河水  
で悪臭を放つてゐる地上を轉つてゐる貧食家  
でも、作者の主觀と場景とが融和して、繪の  
如く描かれてゐる。神曲がダンテの存命中で  
に、イタリーの有力な貴族達に興味をもつて

愛讀され、また一般人民も街上でその一部を愛  
唱したと云はれるのは、さもあるべきことと思  
はれる。辛辣な寫實の筆が面白かつたのだ。時  
としては他を怒らせたであらうと思はれるくら  
ゐに無遠慮に、辛辣に、當時の人々の知つてゐ  
る人間や事件を描いたのだから、我々が時處を  
隔てて今日此處で讀んでゐるよりも、當時のイ  
タリー人には遙かに興味が多かつたに違ひな  
い。……現在の大臣や代議士や陸軍大將や大學  
教授など知名の人物を、「神曲」の地獄中の罪人  
どものやうに取扱つた演劇が今日賞讃された  
したらどうであらう。

驚くべきことは、ダンテがこの書の發表を決  
行した以上、彼れが書中の地獄へ追込んで恐ろ  
しい刑罰を受けさせた人々の子や弟や妻など  
が、その父や兄や夫の處遇を如何に感したか  
と云ふことである。その上、驚くべきことは、  
ダンテによつて地獄篇内の極刑に處せられた  
人は、死者ばかりではなかつたので、たとへば、  
地獄篇の第三十三曲に現はれてゐるアルベリゴ  
やブランカ(殺人者で、千三百年頃には二人と  
もまだ生きてゐた)は、地獄でダンテに會つたこ  
となつてゐるが、肉體はまだこの世に残つて  
ゐたのだ。……また、フロレンスの樂器製造

家のベラツカは、かつて戸口に坐つて、膝に膝  
を當て頭を手で支へて懶けてゐたのを、ダンテ  
に見られて笑はれたことがあつたために、まだ  
生きてゐるのに、ダンテのために、その作中の  
淨罪山の麓に、膝や頭をあのみで坐らせし  
れ、懶けものだから山へ登れないことを現はさ  
ねばならなかつた。

かくて、ダンテは自己の生活の直寫は試み  
なかつたが、その幻想には人生の諸相が織込ま  
れてゐるのであつた、寫實味に富んでゐるので  
あつた。ところが、この人生觀を、中世紀の  
神學によつて煉磨されたダンテ自身の主觀で如  
何に取扱つたかといふことが、ムーアや阿部氏  
などのダンテ學者の重大な問題になつてゐるの  
である。前に云つた如く、阿部氏の哲學的倫理  
考察は面白い。地獄の前界から最後の第九獄ま  
での罪人に對するダンテの態度について、細か  
に批判し、高貴なる道徳を説いてゐるところは、  
哲學にも神學にも暗く、聖書をもたゞ、古代史  
として人生記録として鑑賞してゐる私には、  
物珍らしく感ぜられたのであつた。

「我々は哀憐(エレオス)」と同類感(フイラント  
ロビーア)との差別を何處に置くべきであるか。  
哀憐は對者の價値に同感することを條件とする

同情である。同情感は對者が凡そ我々の同類  
であることを條件とする同情であつて、必ず  
しも彼れに人間としての價値があるかないかを  
問はない。たとひ彼れが極惡非道の者であつて  
も、初も彼れが窮窮に墮はれて轉轉するのを  
見れば、我々の心にはフイラントロビーアの感  
情なきを得ないが、この感情には對者を是認す  
る心機が缺けてゐるが故に、それはエレオスと  
呼ばれることが出来ない。エレオスは唯價値あ  
る者の苦惱に對してのみ可能である。アリスト  
ートルの有名な悲劇論に従へば、それは唯、當  
然以上に苦惱する者、價値ありてしかも罪過あ  
る者に對してのみ可能である。哀憐と同類感と  
は其のうちに價値の——人格價値の——見地  
を含むか含まないかによつて、明瞭な差別を持  
つてゐるのである。……ピエタに對する詩人ダ  
ンテの態度は、神曲のある個所に於て、甚しく  
註釋家を悩ました。しかし、ピエタの中には哀  
憐と同類感との二つの意味が含まれてゐること  
を悟れば、彼れがピエタを是認する場合と非認  
する場合との差別は、必ずしも戸惑ひを要する  
ほど混雜してゐるのではないのである。大體か  
ら云へば、ダンテは罪人に對するエレオスを是  
認してフイラントロビーアを非認する。これは

冥々の間に高貴の道徳を奉ずるダンテに取つ  
ては當然のことであるが、それだけに、我々は  
益々この觀點を見失はぬやうにしなければなら  
ない。

阿部氏はかういふ倫理觀を掲持して、ダンテ  
に隨つて地獄の門へ入つて、詩人の行動につ  
て注意深く研鑽を試みた。

私は敢て氏の見解に反對しようと思はないの  
みならず、さういふ見解も自己修養のよすがと  
なるのであらうと思つてゐるが、しかし、私は、  
超人を説いたニイチエの倫理觀を具體化したや  
うな人間の見本としてダンテを見ることを好ま  
ない。彼れは彼れの心に地獄と煉獄との修業を  
積んでやうやく天堂に達したのではないか。道  
案内に「アザルを頼んでおどろ／＼しながら黒  
裡の旅をした彼れではないか。煉獄は他人のこ  
とよりも彼自身の心の鍛錬の道場であつた。前  
に「神曲」から引用した言葉でも、「自分が幸福  
であることよりも他人が不幸であることを喜ん  
だ」と云ふ、嫉妬深い貴婦人サビアの懺悔の言葉  
でも、ダンテ自身にさういふ感じを経験してゐ  
ればこそ、他の心が洞察されたのだ。地獄旅行  
最初の用意として、「われは唯ひとり、旅路と  
同情と二つのいくさ、兼ねて堪ふべく身裝ひ

しつと心構へをしたのは當然であつても、恐怖の世界を辿るにつれて、同情、或はある種の語の恐れ、念に動かされて、用意の配れるのも當然であつた。中世の神學に基いて、それらの罪人をそれらの適所に置きたがらぬ、知人としての個人的感情から心の配れるのも當然であつた。ダンテならぬ者もさうではあるまいか。男色の徒の群の中に、舊師アルネットを見て、その罪に對する憎みを忘れて、思はず優しい感情を起すのも當然であるし、一人の女を一生思ひ詰めたほど戀に徹してゐたダンテが、フランチェスカなど所縁の二人に哀憐の感じを寄せるのも當然であつて、殊更高貴の心として批判するほどのことではないのではあるまいか。ダンテは神經過敏で感情の激しい皮肉な男であつたらしい。今日では創作中の人物となり切つて分らなくなつてゐたが當時は、モデルに對する作者の愛憎の感じが讀者に認められてゐたであらうと察せられる。政争のために故國を放逐されて、二十年間の艱苦を嘗めたダンテだもの、昔信の裏切り者に對して憤激して、その髪の毛を引抜くがらふ當然であつて、強ひて倫理問題を云ふするには及ばないのである。彼れが流竄の生を送つてゐる間、夜半の寢醒めに、

いくたびか、政敵や實國奴に對して憎みを覺えて、彼等の髪の毛でも引つて抜かうと空想した地獄の幻想となつて現はれたと見てはいけないのだらうか。ウゴリノ伯の慘事は、ダンテが二十餘歳の頃に起つたのだから、多感な彼は、ピサから傳はつて來た報告を耳にして、若き心に戦慄を覺えたであらうと察せられる。凄惨な詞句の響きが、無縁の私などの心にも脈々として傳はる譯である。

私は神學の規定によつて罪人を配置したが、七情を備へたダンテの心がいろ／＼に動揺したところに、彼れの心の自然傳を見てゐる。そして、そこに其鳴を感じてゐる。

三

この章話によつて私は、早くからダンテの心境を想望してゐた。

彼は、聖フランチェスコの教團のある人々の如く、絶対の平和に安住し得られる聖人ではなかつた。辛辣な皮肉や、機智や、痛快な激語が、彼の逸話として残つてゐる如く、彼は浮世の事相、周囲の人間の言行から超然としてゐられる人ではなかつた。……彼は彼の政治的見解から望みを喝してゐたハイインリッヒの死によつてイタリー統一の平和の夢が消えてしまつたので、俗界に断念して、ある山腹の修道院に隱退して心を安んじようとしたさうである。

その修道院の光景らしいものが、天竺篇の第二十一曲に、他人から聞かされた話に託して書かれてゐる。

「伊太利の二つの岸の間、汝の郷土よりいと遠くはあらざる處に、雷の音遙かに下に聞ゆるばかり高く響ゆる岩ありて、一つの神を成す。この神カトリアと呼ばれ、これが下にはたゞ禮拜のために用ゐる習ひなりし一つの神清めらる。……かしこにてわれひたすらに神に事へ、默想に心を足はしつ、撒擲の液の食物のみにて、軽く寒さを過せり」といふのは、ダンテ自身の経験であつたかも知れないのだが、彼れ

は、その聖境で神を讚美し永遠を遐想し、あるひは詩作に耽つてゐるだけでは堪へられないで周もなく里へ下つて、あちらこちらの貴族の家などに寄寓して他人のパンの如何に辛さかを味つたのであつた。あるひは冷嘲の目を向けられ、あるひは尊敬を寄せられたりする境地へ、進んで身を置いたのであつた。「おゝ恵まれし孤獨よ、おゝたい一つの祝福よ」といふ、僧院の園に立つた修道僧の嘆きは、六百年後の今日、なほ私の耳底に響いて、思はず首を垂れさせられるのであるが、ダンテはその修道院の神聖なる孤獨と祝福とに心身を埋没してはゐられなかつた。

アトリチエだけはよく書いてゐないと、私は思つてゐる。私は彼女よりも地上樂園のマナルダの方に傾かしみを有つてゐる。このマナルダを聖人人物とした地上樂園の描寫は、詩の極致のやうな感じがされるのであるが、肝心の天上界は、時世の相違してゐるためであらうが、私には甚しく興味索然として感ぜられ

J. A. サイモンズも云つてゐる如く、淨耶界の終りに近いところの、ヴィルジリオとペアトリチエとのパセチクな對立ほど、讀者の心を傷ましめるところはない。地獄煉獄の苦難の忠實な案内者であつた彼れも、天堂の女王である彼女の前では、曠の光によつて影の薄らぐ月しるの如くなるのである。……ダンテに別れて、永へに救はれないリンボの世界へ落ちて行く彼れヴィルジリオの悄然たる孤影を眺めて、サイモンズは一掬の涙を流したのである。サイモンズはまた「新生」では、最も若い天使のやうに美しい少女であつたペアトリチエが、ダンテに對して、氣取つた説教師か乾涸びた自動人形のやうに行動するのを懸じてゐる。

人間はヴィルジリオによつて表象されてゐるやうな理智によつては救はれないで、ペアトリ

チエによつて表象されてゐるやうな愛によつて救はれることが、誰れでも云つてゐる如く「神曲」一篇の眼目なのであらうが、此處に現はれてゐる天堂の光景は、我々には甚しく無味乾燥である。それは時代の相違上止むを得ないとして、ペアトリチエの愛の光が私などには痛切に感ぜられないのはどういふ譯であらうか。……愛を得たり救ひを得たりした人生至上の恍惚境は、文字をもつて傳ふるに困難なのであるまいか。艱苦哀傷の事相は、時に唱へる字に現はして他に傳へ得られても、自足した境地は文字では現はせないのかも知れない。

近年ヒステリーの研究をはじめ、さまざまの精神分析の新研究を發表し、舊套を脱した所説によつて世を驚かしたフロイドの性慾觀に據つて批判すると、「神曲」の天堂も、必竟ペアトリチエに對するダンテの壓迫された性慾の變形と見られるのである。シエークスピアは萬人を描き得てもダイヴァインな人間だけは描き得なかつたとか、ダンテの肖像にあつてゲイテの肖像に缺けてゐるものはダイヴァインな相だとか、ダンテと云へば、Divine、高貴、神聖の形容を附するのが、古來の常例になつてゐるので、フロイド流の解釋は、大いにその神聖を

害する譯であるが、しかし、「久遠の女性」といふものは、男子が婦人に對して充されたい思ひをしてゐる結果として現はれる迷妄ではあるまいか。ダンテは實生活に於てはゼンマといふ女を妻としてゐたのであつたが、ボツカチオの傳ふる所によると、ゼンマは病氣深くつて、ダンテは妻の前では溜息一つ自由に出來なかつたからで、結婚後は良女との交際をも斷つやうになつたさうである。晩年のトルストイの妻、ストリンドベリーの妻、官詩人ミルトンの妻の事など思用される。この傳説の眞否は疑はれるにしても、現實の妻に飽き足りない思ひを、空想裡のベアトリチエによつて充たす事は、ダンテならぬ今日の男子にても、常に經驗することではあるまいか。そして、ダンテが流竄の日夜の淋しさをベアトリチエの追想によつて慰められたことは推察される。日常の喜憂を分つた實在の妻や情婦を理想化して天上に奉ることは困難であるが、少年期の空想の女をエンジェルとすることはさう困難ではあるまい。その代りさういふ空想の女には生氣が缺けてゐる。

一少女子に久遠の救ひを求めたためではない。昔高山樗牛は、中世紀の神學に對して、人間がいかに馬鹿なことに頭を使つたかといふことを現はしてゐるに過ぎないといふ意味の評語を放つた。今日は誰れしもさう思ふだらう。私なども神學には何の興味も有つてゐない。しかし中世紀の人々の心境を羨望してゐる。憧憬さへもしてゐる。そこには現代文明人のとても味ひ得られない靜寂な恍惚境が出現してゐたのに違ひない。「靈魂は地上に於ける遊戯」であつた。「この世は一夜の假りの宿で故郷は彼方にあつた」すべてを棄てて修道院へ行け。そこにて「橄欖の液の食物のみにて、軽く暑さ寒さを過したり」

。煩瑣な哲學も、その夢を奪ませる藥として役立つのだから、彼等には無用でなかつたのだ。……どうせ一夜の假りの宿ではないか。地球が圓からうとも平からうとも、自轉してゐようともまいと、そんなことはどうでもいいではないか。……彼等は不安な思ひをしておどおどしてゐないで、地上の遊戯の終るを持つてゐた。……私は思ふ、人間はさうなり切ればそれでいゝのではあるまいか。歐洲でも大戦後は、中世紀的崇拜者が殖えたさうである。従つてダンテ研究がますます盛んになつたさうである。私も、馴染深いダンテを、新に讀み直さうと思つてゐる。

### 跋

私は長篇らしいものは稀れにしか書いてゐない。「深淵」は、私の作中では最も長いものと云つてもいいのだが、作者自身でも好感を持ち得ないのでこの集には收めたかつた。私は可成り努力する方だが、根氣に乏しいためか、長いものに取りかゝると中途でいやになつて、筆力の鈍るのを例とする。この集中に收めた多くの短篇(あるひは中篇)は、比較的世評の上かつたものである。作者自身はどれを好むかといふと、作家臭のない淡々たる作品を好むのだ。「玉突屋」は、初期の好小品と云つていい。「地獄」と「徒勞」とには、ある時期の作者の心境が現はれてゐると思ふ。「微光」「泥人形」などは、どうして評判がよかつたかと疑はれる。私は隨筆とも小説とも論文ともつかぬやうな、十枚内外の短い雜文を何百篇となく書いてゐる筈だが、つまりは、かういふ片々たる雜文のうち、私の作品としてのいいものがあるのではないかと思はれる。

私は同じやうな小説を書きつゞけるのに飽いて、大地震後、しきりに戯曲を書いたが、この方面でも、同じ事の繰返しになりさうである。人物評論には、近來、自分も可成り興味を感じて筆が流れた。藝術的評價は別として、自分の書いたものには、いかなる種類の作品にも、自分の影が映つてゐるにちがひない。個々の作品をよく見る人に對しては、作家は自己を自己以上に自己以下にも現はし得ないのである。

正宗白鳥

私は小説に於てチエホフを尊重してゐる如く、脚本に於ても、イブセンのよりもストリンドベルヒのよりも、この人の愛誦してゐるのである。先頃ダンセニーの戯曲集を讀んで、非常に面白く感じたのであつたが、しかしこのくらゐなものなら、日本人にでも書けさうに思はれた。彼の戯曲ははじめ讀んだ時ほどには二度目には面白くないのである。チエホフの如く、讀むたびに新たな面白味の出て來るものとは違つてゐる。小説でもアンドーレフのやうな作風のものば、讀んで飽き易く、書いても書き易く、チエホフやトルストイの作のやうなものは、いつ讀んでも感歎させられ、書かうとしても眞似られないのである。私は今日までチエホフの小説のやうなものば、つひに一篇も書き得なかつた。脚本に於てもさうだらうと思はれる。それで、私は、自分の心に映る快不快な空想を、筆の動くにまかせて、脚本の形を借りて書きなぐるつもりである。

(文藝評論の「脚本について」より)

年譜

明治十二年 三月三日、岡山縣和氣郡伊里村穂浪に、正宗浦二の長男として生る。本名忠夫。幼少の頃、癩強し。

明治十六年 村内の椋島尋常小學校に入る。一級、大、精の繪入讀本によつてはじめて文字を學ぶ。同讀本には「神は天地主宰にして人は萬物の靈長たり」といふ六ヶ敷い文章が編入されてゐて、それを誦讀させられた。

明治二十一年 岡村片上村の小學校高等科へ入學。成績よきも、圖書、算術、體操を厭ふこと甚し。

明治二十五年 春、卒業す。それより近隣の私塾へ附合費に入學す。池田光政時代よりの藩校たり。漢籍を主とせり。二年未滿にて退學。

在學中、近松物語、「水滸傳」などを讀み、最も民友社の出版物に親む。

明治二十七年 身體衰弱、胃殊に惡し。近村香登村の基督教講義所に行きその教を聽く。岡山市に寄宿して病院に通ひ、傍ら、本國宣教師の經營せる養陽學院にて英語を學ぶ。在學約半歲、この學校の校長は安部磯雄氏たりし。

明治二十八年 故郷に歸居して文學書類を讀誦す。

明治二十九年 二月下旬、上京、牛込横寺町に下宿した。早稻田大學の前身たる東京專門學校英語部部員に入學。夏、大患に罹り臥尊二ヶ月餘。

明治三十年 植村正久氏によつて洗禮を授けられ、市ヶ谷の日本基督教會の會員となつた。内村鑑三氏の著書や講演によつて感化せられしこと渺からず。

明治三十一年 東京專門學校に史學科新設せられ、入學。

明治三十二年 史學科廢止のために文學科へ轉じた。

明治三十四年 岡村抱月氏の指導の下に、匿名の同人誌とともに、「讀賣新聞附録」へ批評文を寄稿した。最初の批評の題目は鏡花氏の「許文帳」であつた。

文學部卒業。學校附屬の出版部に奉職し、文學科講義録を編輯す。この年、基督教を棄つ。

明治三十五年 出版部辭職。

明治三十年 六月、讀賣新聞社へ入社。美術、文藝、教育に關した記事を擔當した。

明治三十七年 劇評をはじめ、「寂寞」と題する小説を「新小説」紙上に載す。處女作と云ふべし。この原稿料一枚五十圓、全額二十餘圓の半ばを割いて清國を新調した。

明治三十九年 文壇の風潮大いに變化せんとす。「讀賣新聞」の文藝欄は新時代を代表してゐた。「早稲田文學」へ「二階の窓」と題する小品を寄せ、「新小説」に「舊友」を寄せ、稍長きものなり。漱石の「草枕」と同時に掲載された。

明治四十年 「塵埃」を「趣味」へ寄せ。世評大いによし。この短篇によつて新進作家として矚目せられた。

明治四十一年 「何處へ」、「玉突屋」、「五月蟻」、「世間並

「二家族」などを相次いで發表して大いに認められる。この年九月、長い間の下宿生活から轉じて、老婢を雇ひ一家を構へた。

明治四十三年 六月、讀賣新聞社退社。在職七年間、胃弱と不眠症に苦められた。「徒勞」、「微光」を出す。後者は非常な評判を得た。

明治四十四年 四月、甲府市清水徳兵衛次女つね子と結婚す。年末より長篇「毒」を「國民新聞」に掲ぐ。この年「泥人形」など短篇十數の作あり。

明治四十五年 (大正元年) 「朝日新聞」へ「生靈」を寄せた。脚本「白壁」などの作あり。

大正三年 脚本「秘密」、短篇小説「初旅」外十數篇。

大正四年 百日間、胃腸病院に通ふ。「入江のほとり」外十數篇の作あり。

大正五年 「牛車屋の奥ひ」「死者生者」等評判よきものを出す。「朝日新聞」に長篇「波の上」掲ぐ。

大正六年 虹門病院に入院。

大正七年 近年次第に執筆感を感じ、且つ人生に對する倦怠を覺ゆること甚し。

大正八年 十月十五日、當時傭家仕ひしてゐた麻布我善坊町を離れ、大妻相模へて伊香保に赴き、中仙道を経て京阪に遊び、十一月中旬、歸郷した。出来ることなら文學を棄て、都會生活を止めようと思ふ。

大正九年 郷里の生活にも堪へられなくなり、五月出

立、伊香保と輕井澤にて四五ヶ月を過す。  
「毒婦のやうな女」「尾花の藤」など執筆。  
十一月、大磯へ轉居。

大正十年

三月、大磯を離れ、六月、再び大磯に来る。  
東京にい、借家が見つからなかつた爲であ  
る。

「人さましく」「冷淡」など執筆。

大正十一年

「稻妻」を「婦人世界」に掲ぐ。

大正十二年

「生まざりしならば」など短篇十数篇。  
大地震には家は半ば壊されたが、危く生命を  
免れた。

大正十三年

二月、戯曲「影法師」を「中央公論」に掲げし  
より、数年間頻りに戯曲を草す。「人生の幸  
福」「光秀と結巴」最も世評高し。  
この年、痔疾治療のため東京の病院へ四十  
日間入院した。

大正十四年

長篇「人を殺したが……」を「週刊朝日」に掲  
げはじむ。

大正十五年（昭和元年）

引きつゞき文學や演劇やその他の事について  
評論の筆を揮ふ。評論よろし。  
小説にも戯曲にも評論にも長大なるものは  
殆んどなし、長篇はいづれも出来榮え感し。

昭和三年

十一月二十三日、横濱出發、夫妻相伴うて  
世界漫遊の途につく。

自分にも両親があり弟妹があるのだと思ふ  
と、不思議に感ぜられることがある。しかし、  
私自身が老境に入った今日、なほ両親が生  
きてゐる多數の弟妹も生きてゐることを特  
に感ずる時もある。私のやうな他人に親しみ  
がない人間が、一人の肉親もなくして世に生  
きてゐたら、世の中は淋しくつてたまらない  
だらう。この頃は、私は心にも歳を取つて  
氣が弱くなつたためか、両親の長生や、弟  
妹の無事息災を願ふやうな氣持になつた。

（白鳥梅葉の「両親の印象」より）

昭和四年二月一日印刷  
昭和四年二月五日發行

現代日本文學全集 第二十一篇

著者	正宗白鳥
發行者	山本美
印刷者	杉山愛二

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地  
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ二二

發兌

東京市芝區愛宕下町  
四丁目六番地

改

造

社

電話 芝(43)  
一四  
二二二二〇  
四三二二二  
番番番番番



2-2146  
\* ㄱ

~~555~~  
~~43~~

1011  
21

終